

福岡縣史蹟名勝天然紀念物調查報告書

第十四輯

天然紀念物之部

福

岡

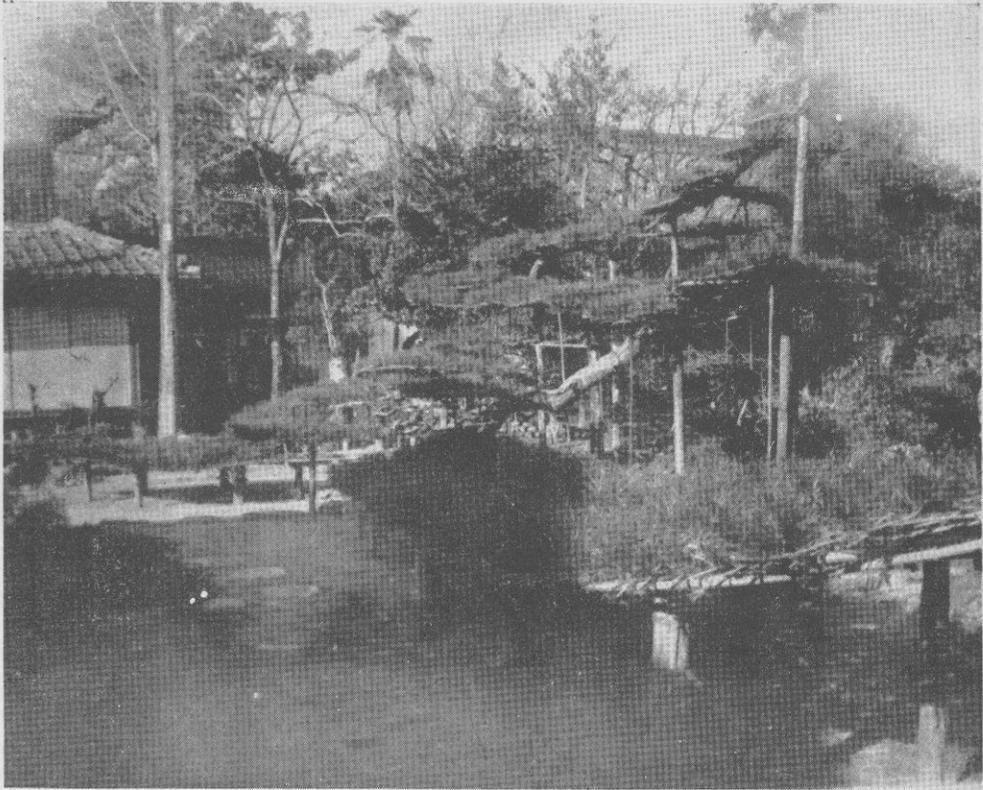
縣

福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第十四輯

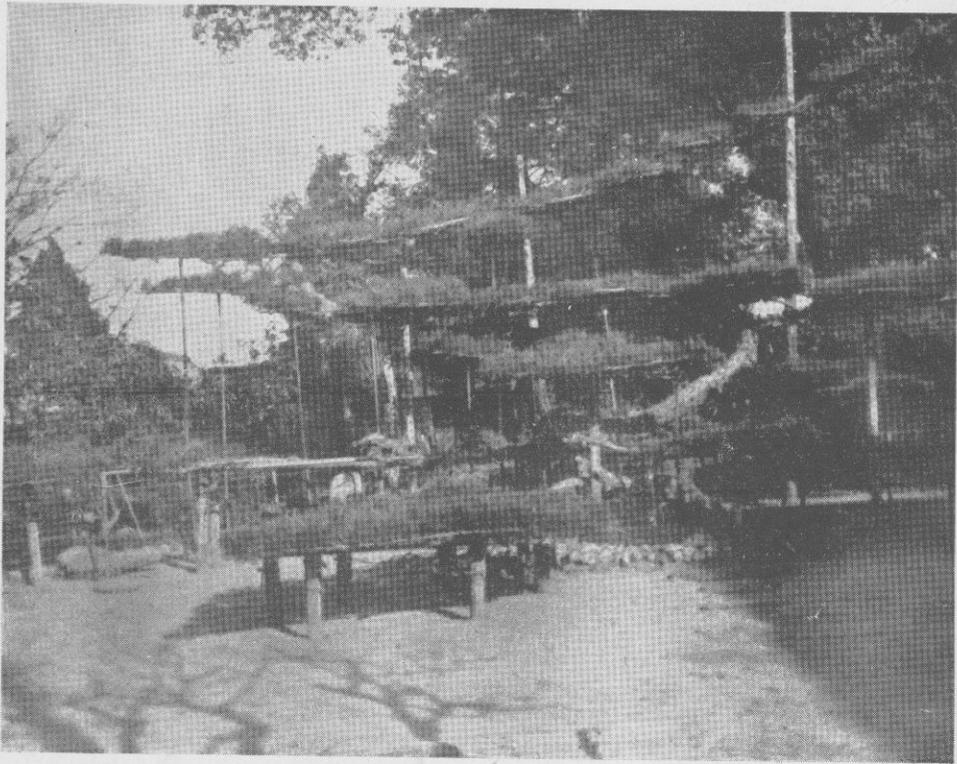
天然紀念物之部

筑後光友村の老松	調査委員 木下盛枝	(一)
松原寺の松	調査委員 荻原武平	(五)
御塔の松	調査委員 荻原武平	(九)
英彦山鳥類一斑	調査委員 安部幸六	(一三)
珍鳥 <i>Tetrax tetrax orientalis</i> HARTERT に就て	調査委員 安部幸六	(六三)
彌永の一里塚松	調査委員 荻原武平	(六九)
有毛の傘松	調査委員 荻原武平	(七三)
安康の松	調査委員 荻原武平	(七九)
筑後高良山孟宗金明竹新竹發生調査	調査委員 木下盛枝	(八五)
観音山の合葉の松	調査委員 瀨瀬理一郎	(九一)
福岡市浪人町のマキの巨樹	調査委員 瀨瀬理一郎	(九七)
	補助員 玉井虎太郎	(九七)
縣社高倉神社境内の樹木	調査委員 山崎又雄	(一〇一)
芥屋大門波止松原の海濱植物群落	調査委員 山崎又雄	(一〇七)

筑後光友村の老松



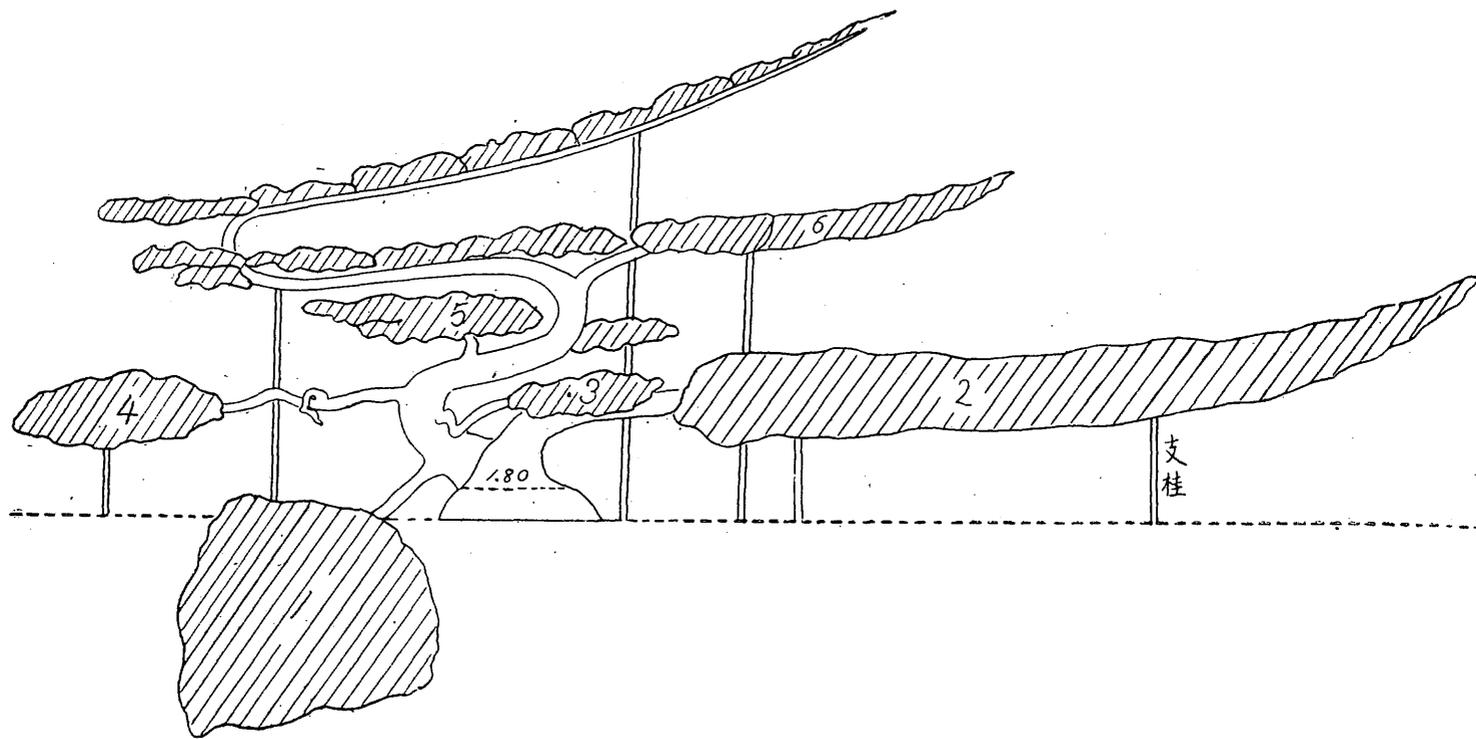
圖版 第一 南ヨリ見タ松



圖版 第二 西ヨリ見タ松ノ一部

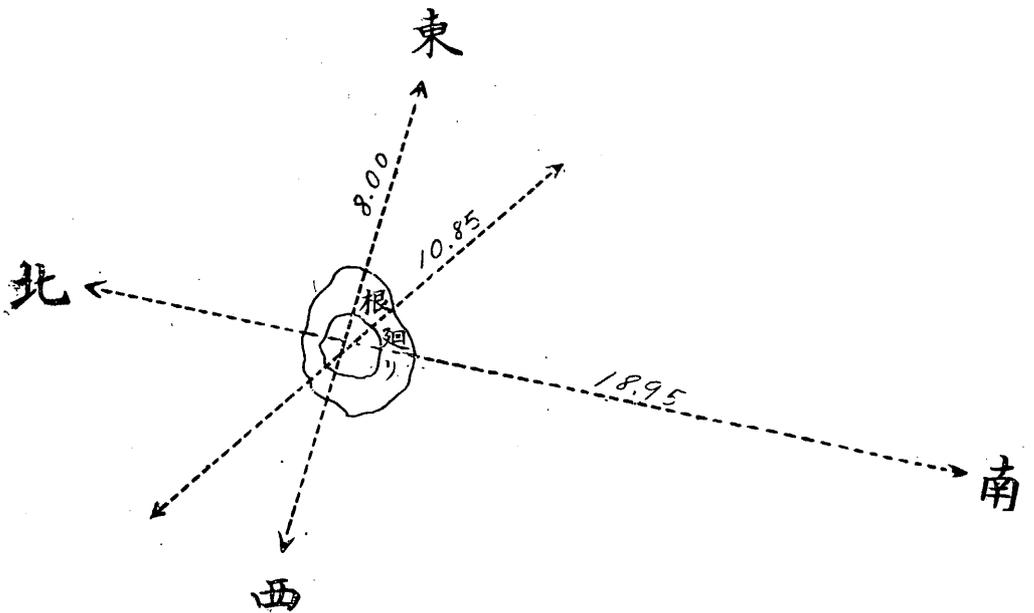
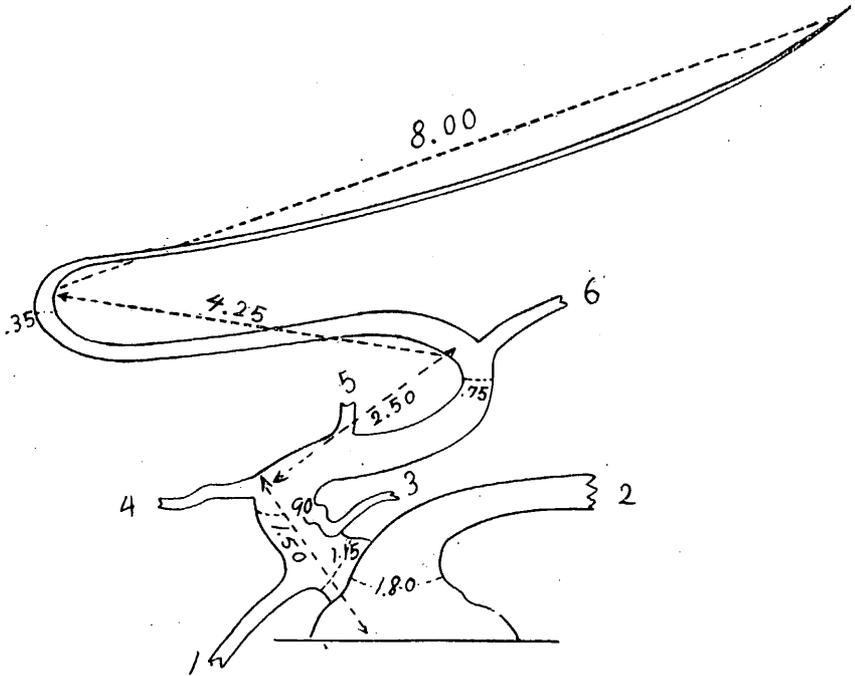


圖版 第三 圖版第二ニアラハレザル枝ノ一部



第一圖 八女郡光友村の松見取圖

第二圖 松の主幹及主枝見取略圖



第三圖 枝張り略圖

筑後光友村の老松

調査委員 木 下 盛 枝

昭和十一年二月五日八女郡光友村原島の宇美保二氏の庭にある黒松 (*Pinus densiflora*, Sieb. et Zucc.) の現地調査を行つた。羽犬塚より乗合自動車で福島に行き、こゝにて自動車を乗り換へ祈禱院を経て原島に到る。(地圖参照)。この地で下車し、歩くこと三町餘にして宇美氏宅に達する。附近は矢部より流るゝ矢部川の本流と、星野を過ぎて來る星野川との合流点近くで、廣い筑後平野の中、祈禱院と兼松間の大きな道路よりやゝ離れた、耕地の中にある家である。

宇美家の庭は其家の南側にある(圖版第一)、その庭の東は隣家の庭と接してゐて、其境には樟其他の常緑樹の高い林がある(圖版第二)。これが背景となつてゐるが常緑の黒松に常緑樹の背景では全く此松の樹相を引き立てない。事情の許すならば、此林を切り拂つて、東の日光を受けるやうにしたなら、よほど植物の爲にもよく、緑の松を緑の植物の中に見なくてよい事になるので、引き立つて見えるだらう。それが出來ないなら、林を切り透し、板か其他のもので背景となるべき垣を造つた方がよくはないかと思ふ。

此黒松は南北の延長十八米九十五糎、東西は八米に及んでゐる(第三圖参照)。幹は全長十六米で、曲り曲つてS字を二つ連ねたやうな形である(第三圖)。根廻りは一米八十糎。そこから伸ぶこと

約四十纏位上部になれば北に曲り、約二十五纏位で、南に、地上九十纏の高さで曲り、二米五十纏進むと地上二米の高さで北に曲り、四米二十五纏伸びて再び南に、地上二米十五纏の高さで曲つて八米伸びて幹の頂端となつてゐる、

幹の周りを見るに、根廻りは一米八十纏であるが、第二枝を出した後の根元より四十五纏の處、即ち北に曲り始めでは一米十五纏となり、次に南に曲る所では九十纏、再び北に曲る所では七十五纏、次に東に曲る所では三十五纏ある。古い松といふ事は根元でもよくわかるが、幹の大きさが割合に他に比して小さい事から考ふるに、幹も枝もよく曲げられ、剪定され手が届いてゐるので抑制されたのであらう。野の松のやうに伸びるまゝのものとは違つて幹が大きいとか高いつとか云ふことで誇る松ではない。

枝の主なるものを次に記すことにする。

(1) 第一枝は北に出てゐる枝で、全長五米二十五纏、周り三十纏、幹から分れてから二米三十五纏は葉は附いてはないが、其先に菱形に近い形に擴がつて葉がついてゐる。對角線は二米九十纏と二米四十纏である。この枝は地面より四十五纏の處にある(圖版第二・第一圖参照)。

(2) 第二枝は根より四十五纏高さの所から南に出てゐる。全長として最も長いもので、幹から分れる所から十三米十五纏、周り七十纏の枝である。これは一米七十五纏は葉が附いてゐないが、それから葉があつてその表面は幅二米で、先端近くで一米六十纏のもの、全長十一米四十纏續いてゐる。先端はやゝ上つて地面までは一米六十五纏ある。實に見事なもので

ある(圖版第一・第三及第一圖)。

(3) 第三枝は地上七十糎の高さに、周り三十五糎の枝が西に出てゐて、地上八十五糎の高さの所に、一米六十五糎と一米二十五糎の對角線の菱形に擴がつて葉がついてゐる。

(4) 第四枝は北に伸びた枝で、全長四米七十糎、二米三十糎は葉がないが、其先に長經二米、四十糎と短經一米五十糎の葉の擴がりを、地上一米の所に附けてゐる(第一圖參照)。

(5) 第五枝は南に出てゐる枝で、葉の擴がりは、地面より一米三十糎の高さの所に二米直經の略々圓形の大きさとなつてゐる(圖版第二・第一圖)。

(6) 第六枝は全長四米の南に出た枝で、地上一米七十五糎位の高さの所に、枝先に二米位の長さの葉をつけてゐる(第一圖參照)。

主幹の先の方は、南に伸ぶこと八米、小枝が澤山に出て種々の形に葉が附いてゐる(圖版第二、其元の方で地上二米十五糎の高さあり、其先端で五米三十糎の高さがある(圖版第三、及第一圖參照)、右に書いた枝は主なる枝の中の重なるもののみで、調査した時、目立つた主なるものでも十、三は數へる事が出来たし、小さい枝はもつと譯山あつて葉を擴げてゐる。尙、枝には枝を生じて樹相を非常に良くしてゐる(圖版第一・第二參照)。大きい枝は支柱を立て、保護されてゐるし、小枝は竹を疎に編みしものに一々繩で結び附ける等、手入の行届いた松である。

我國は古來松を貴び、庭園に植えるやら、新年の飾り等、祝事に多く使用されてゐる。歌人は十返化と稱して千年十回、百年に一度、時ならぬ花を開くものとして、千歳を祝ふ慶賀の標徴としてある。宇美家の松も、結婚の祝儀に飾りとした松を植えたものであると言ひ傳へられてゐる。何年位經たものか、同家にも記録がないのでわからないが、三百年以上經たものではないかと

いふ。愛園家の庭はもとより盆栽等、我國到る所に松を見るが、宇美家のやうに手入れした松で、年を多く経てゐる、大きなものはあまり見當らない。これが個人有として置いために伐株するか、手當を怠り形を損するか、害虫に倒さるる事があるとするれば、數百年間苦心して、あの形に作りあげたのが水泡に歸する事となる、急に天然紀念物として保護保存したいものである。

クロマツについて文献其まゝを記し参考とする。

「クロマツ、一名をまつ、黒松、雄松といひ、海岸地方によく繁茂する常緑喬木なり。幹は高さ十丈餘、周圍二丈餘に達することあり。概形あかまつに似たれども樹皮は黒色を帯び、葉は強剛にして太く新芽は帯白色を呈するを特異とす。又枝には長枝と短枝とありて、長枝は幹に輪生し、毎年一階つゝ輪生枝を生じ、短枝は長枝の周邊に密生したゞ二本の針葉と葉のもとを包める鱗狀葉とを著く。四月頃新芽を生じ、二種の花を著く。其の一種は紫色にして新芽の頂端にあり、是れ雌花にして多數の鱗片相重なりて毬狀をなし、各鱗片は二箇の胚珠を夫々其基部の内面に裸出す。他の一種は黄色にして新芽のもとにあり、是れ即ち雄花にして數多の雄蕊を具へ成熟するに及びて、無數の花粉を吐く所謂風媒花なり。毬果は翌秋に至りて成熟し、開綻して種子を飛散す。觀賞用として栽植し、木材を建築器具等の用に供し、又燃料とす。」とあり。

松
原
寺
の
松

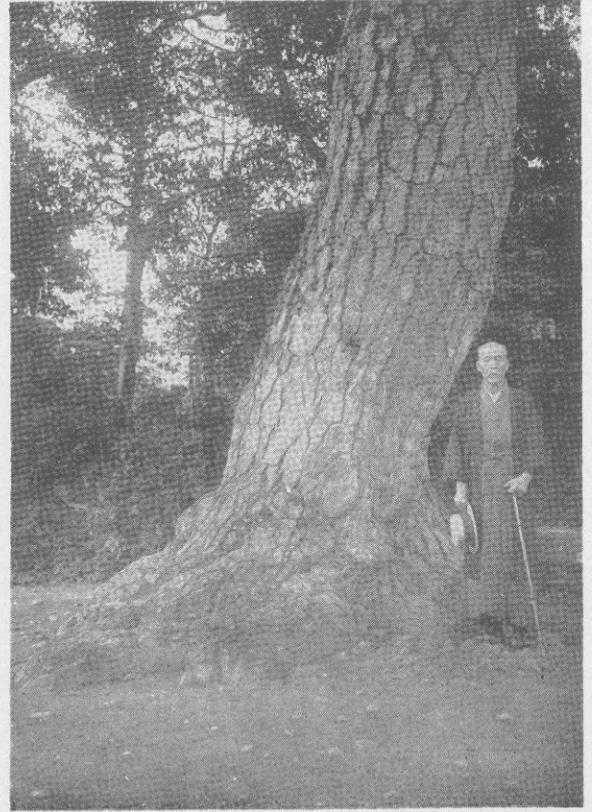
昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可済



西方より見たるもの



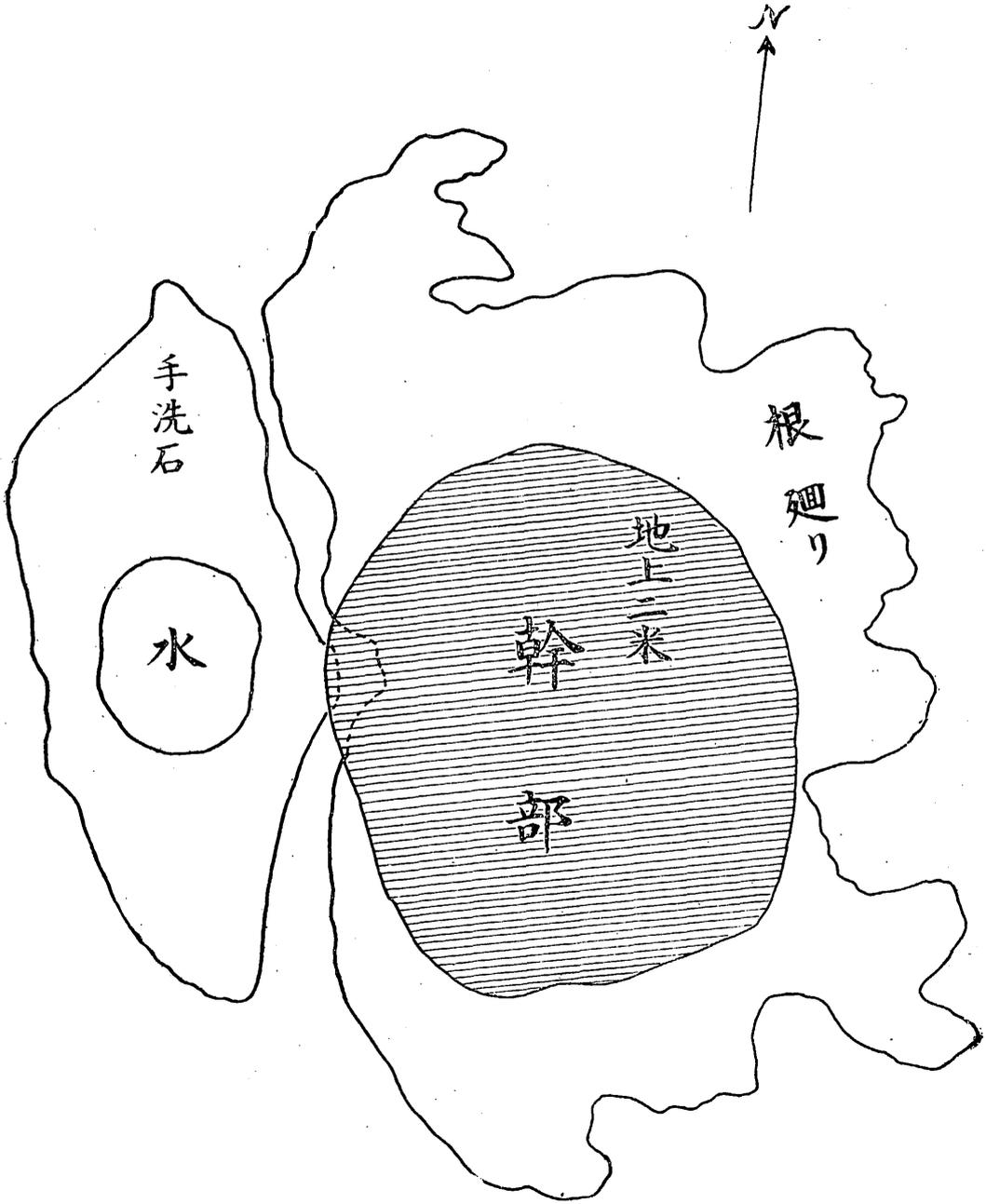
北方稲田の中より



北方より 立てるは筒井省吾氏

(何れも昭和十二年九月二十六日寫) 山下龍雄氏撮影

昭和十二年九月二十六日測定見取圖



松原寺の松

調査委員 荻原武平

一、調査日時 昭和十二年四月十五日及同年九月二十六日の二回

一、樹種 黒松

一、所在地 京都郡仲津村字松原區 松原寺境内

一、樹幹の大きさ 地表に表はれたる根と地面との境(根廻) 十一米六五

根と樹幹との境の周圍 四米七七

地上二米の所の周圍 四米三三

一、樹高 二十米五

一、枝張り

枝の分岐は大凡三ヶ所に大なるものを認む

下端の分岐 地表よりの高さ 凡 八米

概北及西北、東北の方面に延び最長 十二米五

(枝の長さは眞の長さにあらず、樹幹のもとより枝の先端の直下まで地表について計測したるものなり。以下みな同じ)

中の分岐 地表よりの高さ

凡十一米

概、一つ東方に延び最長

凡十三米

他は南方に出で最長

凡十二米

上端の分岐 地表よりの高さ

凡十三米

枝は凡て上方に多分岐をなしこの松に一層の美觀を添ふ

一、樹 齡 不 明

一、周圍の狀況

本老松は前記の如く松原寺の境内にあり、寺堂は東面しこれを圍みて東及南に庭あり、南は二三尺の壇地によりて限られ壇上には隣家あり、然してその境界の壇地には、しひ、つばき、やぶにつけい、かくれみの、はまもつこく、ゆづりは等の丈高き植物の下には、なつふぢ、こいちぢく、ねすみもち、たらのき等の樹木の外、かにくさ、なつづた、いたびかづらの如きもの纏繞したり。

東は里道北は稻田にして、その間を花崗岩の玉垣にて限れり、松はこの庭の東南隅に位し南枝は、つばき、しひ等を凌ぎて隣家の屋根に達し東枝は延びて里道を越えて稻田の上に及びべり。松の根もとの西側に手洗石あり。

一、樹 相

本松は高さ二十米以上にも及びたれば村の何れの地點よりも望見さるゝ程にて筒井老の言によればこの老松ありて松原の地名生じたりと云ふ、それはとにかくとして樹幹は地表

一米程の處より西方へ多少曲りたるも、それより上は殆んど眞直にて最上端の枝の大分岐点まで著しくその太さを變せず、その枝張り等も、西方にはやゝ少き感あるも、他の方向には何れも十二三米に延びて下垂し何れの方向より見てもその形略同形にして恰も傘を擴げたる如くその均齊の美稀に觀るものなり。

樹齡は不詳なれども樹相より見て未だ壯年を過ぎず西方に一枝損傷せるものあるを見れども總じて若々しく然かも千年の綠を湛へ一樹にして一村の總てを壓するの概あり。尙最下端の枝の大分岐点にいぬびは一株地上八米の上にも知らぬげによく枝葉を繁らせて一奇觀を呈せり。尙ほ本松の分岐枝の西方に向ひたるものの一枝は天狗巢病菌の侵せしものか枝も葉も密生して茲にも亦一異觀をなす。

一、傳 説

傳説として傳ふべき程の古きものは聞かざるも、松原寺は眞宗に屬し京都東本願寺の配下であり、明治十三年本堂改築の際本老松をその棟木に奉るの議起り、檀家は勿論一村擧げてこれを賛したるに、當時未だ若輩たりし筒井省吾氏一人これに反對を稱へ「この松ありて、そのもとに立てる村故松原の地名を有するにこの松を伐らば松原村の意義を失ふべし、この因縁深き松なれば斷じて伐るべからず」と、然れども衆寡は敵すべくあらざれば氏は郡、縣の當局に事情を訴へ漸くにしてこの松を今日迄保存せしむることを得たりといふ。されば老松と筒井氏とはその縁故淺からざるものあり。

一、結 び

天然紀念物として保存せらるゝ大樹は他に多々あるべきも、斯くの如く姿の美しき松はその類あまり多からず、又地名とも關係あれば保存の要あり、平常は村童の遊び場となり居る由につき、樹根より相當距離に玉垣等を繞らし、徒に土を踏みつけぬ様保護を要す。尙隣家との境界にある樹木は時々枝を拂ひて、垂下せるこの松の枝より上に伸び出ぬ様絶えず注意を怠らざらんことを切望す。

○本調査につきては元縣議筒井省吾氏、小倉中學校教諭日吉榮一氏、松原寺住職有吉磊巖氏及山下龍雄氏等の御指導御協力に預りたる所多く併記して厚く謝意を表す。

御

塔

の

松

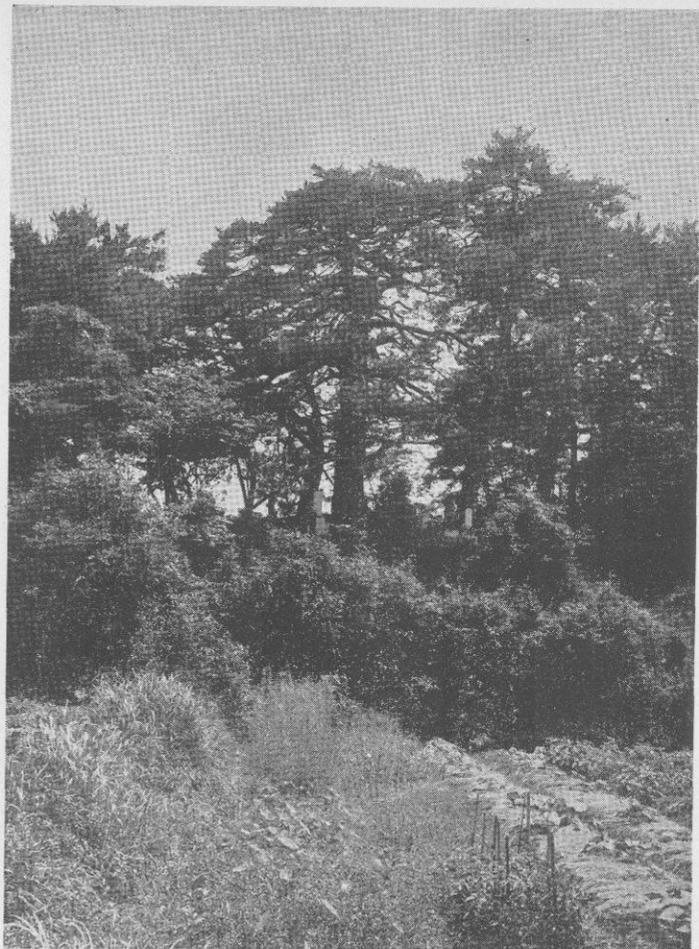
岬村御塔の松附近略圖



昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可濟



東 北 方 よ り



東方より道路を隔てゝ撮影（山下龍男氏寫）

昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可濟

昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可濟

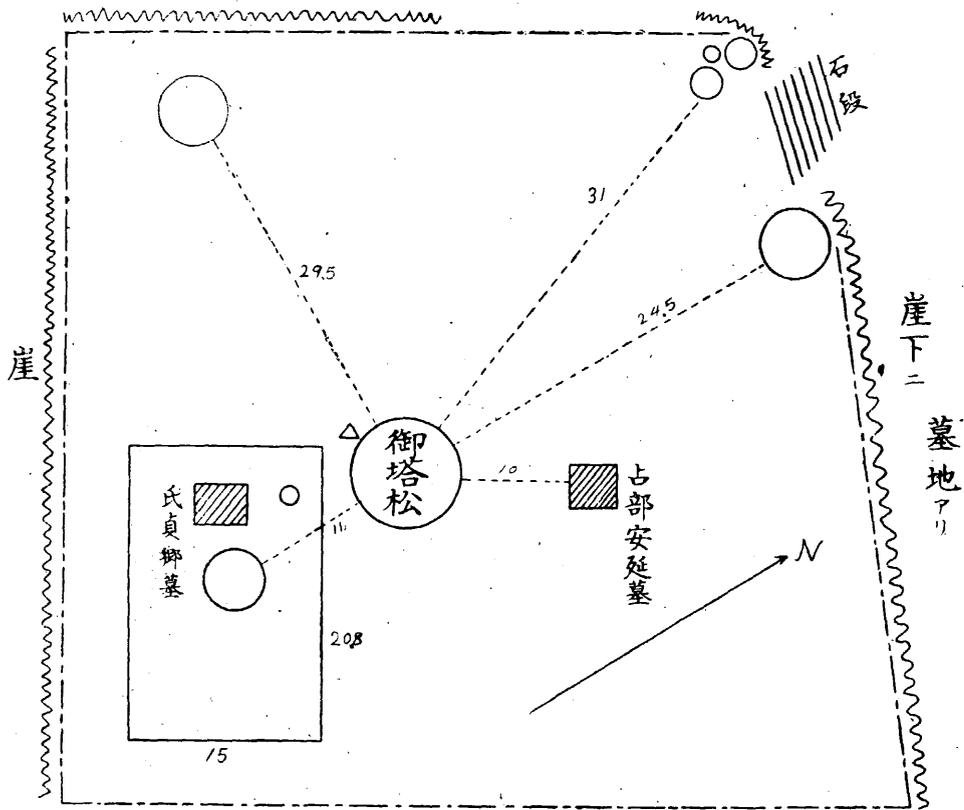


西 北 方 樹 下 よ り

(山下龍男氏寫)

御塔の松附近見取圖

墓地



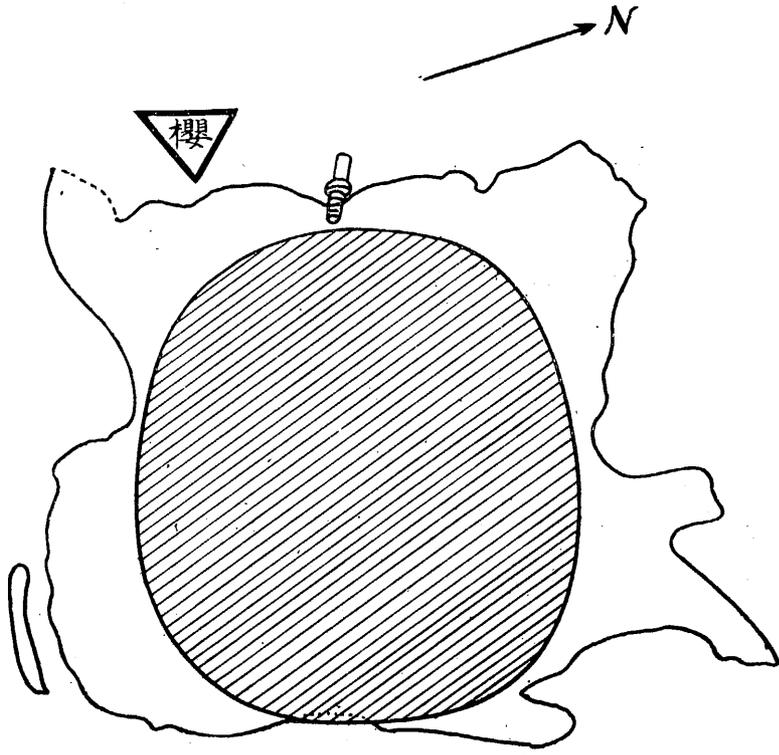
- 松
- △-----櫻

~~~~~ 樹木の茂り又は叢

数字---尺ヲ示ス

昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可済

根廻り及目通りにての想像横断面見取略圖



昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可済

# 御塔の松

調査委員 荻原武平

一、樹種 くろまつ

一、調査日 昭和十三年五月二十二日

撮影 同年六月十六日

一、所在地 宗像郡岬村大字上八小字今井原

赤間驛より鐘崎行バスに乗れば東郷橋(東郷驛より灣鐵バス利用者は茲にて鐘崎行に乗り替へ、上八下車と命ずるを可とす)を経て岬村に到る。切通しの如き所を過ぐれば岬村にして左方田を隔て、砂丘の上に松原を見る。暫くにして本道に對し右に直角に入る二間半ばかりの道路あり、茲にて下車してこの小道路を辿れば上八の部落あり、行くこと三四町にして部落はつきて山路の如くなり小溪を渡る。その附近の右方は遠く海藏寺山より派生し來れる狭長なる小丘陵性の高地にして松樹鬱然として丘を覆ひその樹間所々に墓碑隱見す御塔の松は實にこの丘陵の墓地内にたてるなり。

## 一、附近の狀況

北方の道よりまばらなる石段を西方にのぼれば凡二畝餘の大略長方形をなしたる平坦な

る地ありて御塔の松は略その中央に位し根元近くに小さき櫻の木を従へたり根廻りに添うて大小様々の自然石にて周圍を限りあり。

松の右側には九坪ばかりの土地を是亦長方形に區切りて石を積みその中央前方に大宮司正三位宗像氏貞卿墓と鐫りたる古き石碑あり。これその昔宗像神社大宮司たりし氏貞卿の塋域たるなり。

この碑の後方に周圍二米六四許りなる老松地上より數米にて西南の方に極端に曲りて御塔の松のために日光を遮らるゝを辛じて避けその先は何れも南方の叢崖を遙に越して一種の風趣をなせり。

又松の左側にも古き碑ありて承福寺殿慶岩宗映？居士文明十年六月十八日（文明十年は今より四百六十年前にして百〇三代後土御門天皇の御代足利九代將軍義尙の世に屬し應仁の次の年號にして戰國時代の始めにあたる）の文字漸く讀み得る位にしてその裏面には占部越前守平安延と刻しあり。

西隅に高さ三―四尺に高まれる上に一本の老松あり、遠くより望む時はこの松の方却つて御塔の松より高く見ゆ。

西方はこの平坦地より漸次高まりて黒松赤松の混交林となる、東方の一段低き所は黒松しひかくれみの等の混交林にして何れも墓地となり、新舊の石碑高低大小一つならざる、石碑所在に建てり。

西方はやゝ急なる崖にして叢にて蓋はれ、その下底は相對せる丘陵との間に狹長なる灌漑

用池二つありて何れも濁水を湛えたり。

## 一、樹 相

### 1. 樹 高 約十五米五

本樹は寫眞にて明なる如く丘陵の上にあるのみならず附近大小樹のあるあり小溪流の繞るあり、西方は池にしてトランシットを立つべき地点の發見に苦しむ。

止むなく林中に入り枝を拂ひ樹幹より西方約二十米の地点にて測定せり。

### 2. 幹 周 (二米の高さにて) 四米二四強(十四尺)

### 3. 根廻り 六米五五弱(二十一尺六寸)

### 4. 枝張り

本樹は殆んど四方喬木に圍まれたるを以て幹は直立し長さ枝は皆な東西二方向に限らる、先づ四米五位より枝を出せども皆な枯れて先端を失ひ八米位よりの枝は半枯の狀況となる。八米二の所にて北より稍東に偏して延びたるものは寫眞(三)の左下方より數へて四番目の枝は水平に出づるも間もなく下垂して臺地面より遙に下り樹基よりの距離十七米七餘にて止まる恐らく本樹の枝中最も長さものなるべし。

又此の枝は中程より少し下にて他に一枝を出しこれも十六米を超えたり。

八米より十一—二米に至る間に於て大小の枝を岐つこと夥しくその狀は寫眞(四)に示すが如く實に複雑を極めたり、このあたりより南東に延びたるものの中十七米弱に達するものありてこれ亦臺地の面より下に下れり。

三、四の枝を除く外は周囲の關係より概上方に伸び細枝にわかれたり。

一、結　　び

御塔の松は宗像神社とは多少の緣故はあれども當地方の歴史に詳しき刀根現村長の談によれば本松に對する格別なる詩歌傳説等はなき由なり、又古老の言によれば現在の松の外にもう一本巨大なる松ありたるも雷火に焼かれて枯死したりと云ふ本樹は松としては巨大なりと云ふを得ざるも名松たり得べく、墓地にあれば自然靈域として保護せらるゝを以て松にとりては仕合せなることと云ふを得べし。

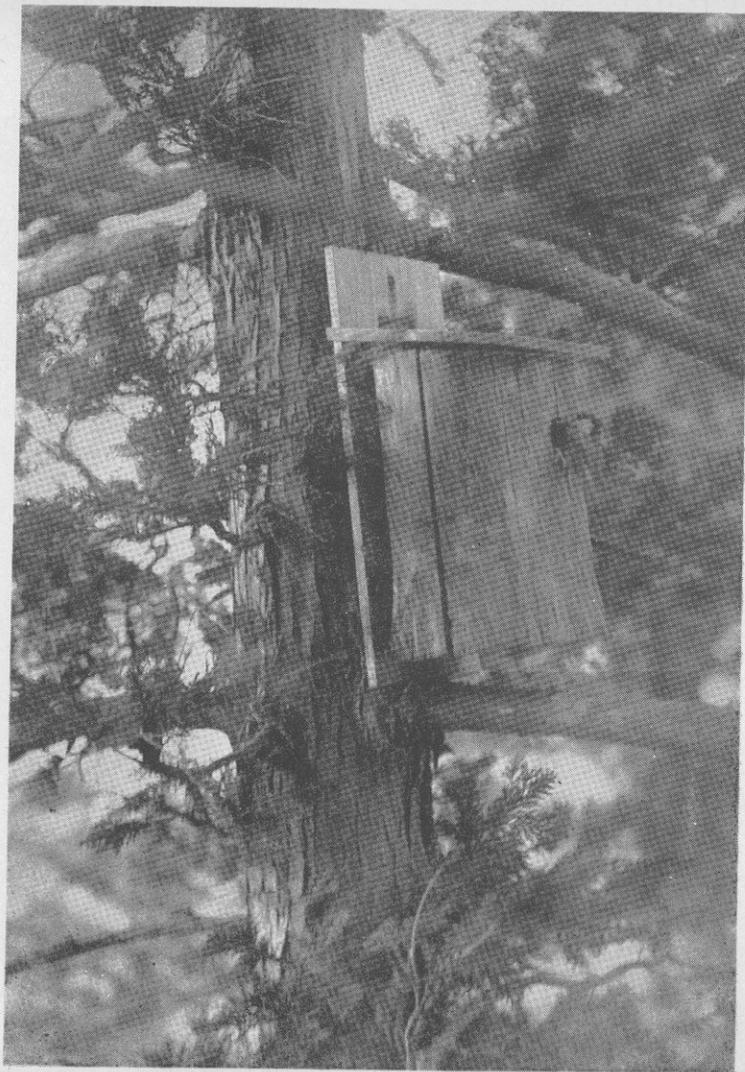
英彦山鳥類一班

佛 法 僧



調 査 者 所 有

英彦山に架設したる 巢箱と營巢せる山雀

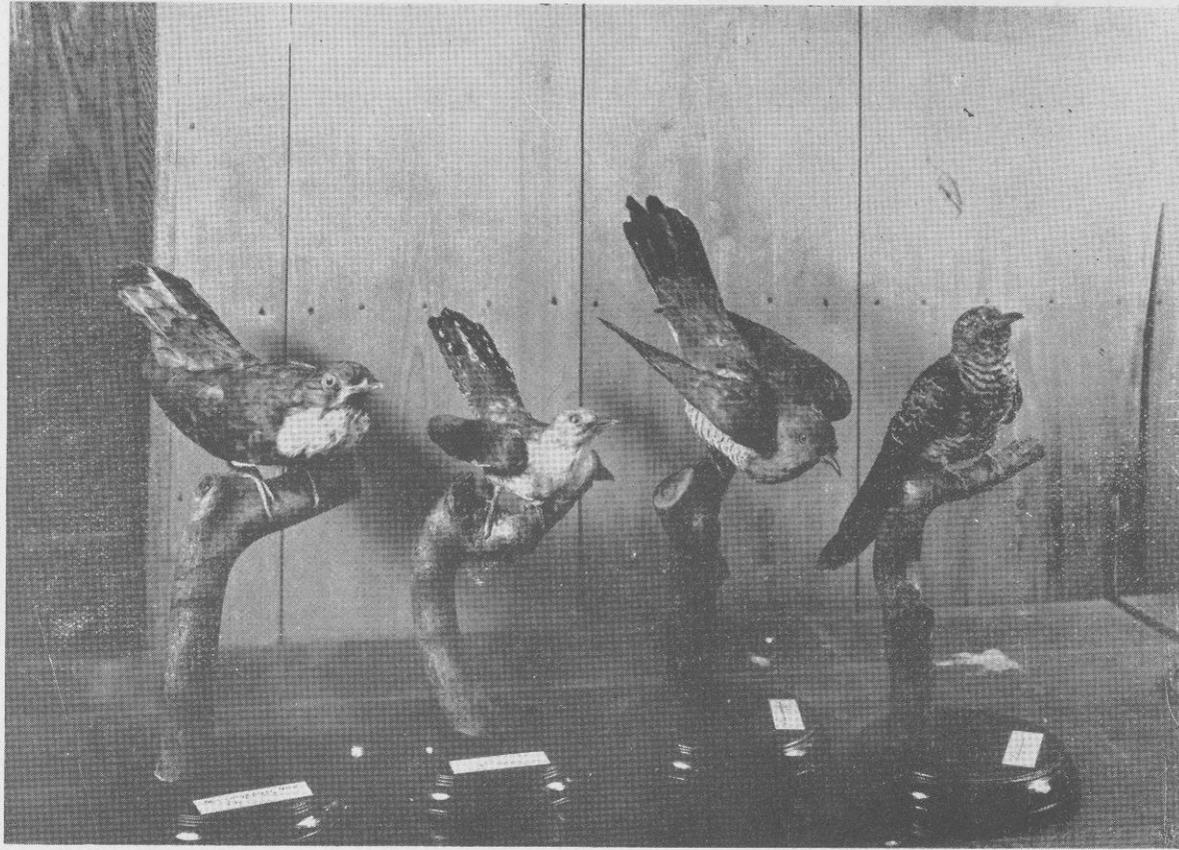


四

三

二

一



慈悲心鳥

杜鵑

郭公

筒鳥

# 英彦山鳥類一斑

調査委員 安部 幸六

英彦山は九州の北部福岡、大分兩縣に跨り、海拔實に一一九六米突、山岳重疊鬱蒼として四時雲を呼ぶ神仙の靈峰である。頂上には天照大神の御子天忍穗耳尊を祭神と仰ぐ官幣中社英彦山神社鎮座ましまし、往昔大寶慶雲の頃迄は十谷四十九窟に役行者の修驗場軒を並べ、僧坊三千八百まことに殷盛を極めたもので、従つて全域殺生禁斷の靈地として各種の珍禽に富み、全く之等鳥類の樂園であつた。然るに明治初年に至つて狩獵の禁を解かれ、一方には各種文明施設の影響を受けて、逐年著しく鳥類の減少を見たのは甚だ遺憾とする處で、ひいては農林業上其他に及ぼす影響も亦大なるものがあつた。よつて去る大正十二年こゝに禁獵區の設定を見るに至り、爾來年を逐ふて鳥類の飛來又は蕃殖するもの漸く多く、一時全く姿を見せなかつた靈鳥佛法僧の如きも再び渡來する様になつたのは喜ばしい現象である。

余は大正八年以來此山に絶大の親しみをもち、登山毎に鳥類の生態を觀察しては、一々之を日誌に收録したものであるが、昭和九年以來福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査委員として、此山の鳥類を調査することになつたので、之を機會に前の日誌を基礎として、更に毎年數回登山して調査觀察を進め、茲にはじめて此報告書を脱稿するに至つた。

尙此稿を草するに方り、男爵高千穂宣麿閣下並に英彦山神社宮司高千穂俊麿殿、彌宜松養具榮殿、外社務所員各位の懇切な示教乃至援助を忝ふした事を深く感謝する次第である。

昭和十二年六月一日

## 凡例

一、本稿は元來英彦山鳥類目錄に過ぎざるも少しく記述の方法を變へて當山に飛來棲息する鳥類の習性並に迷信傳説をも附記し、努めて通俗的に記述したもので名づけて英彦山鳥類一斑とした。

二、ここに英彦山と云ふ區域は便宜上國設英彦山禁獵區、福岡縣田川郡彦山村及び同郡津野村及び大分縣下毛郡槻木村各一部に跨る全部及び田川郡彦山村の禁獵區外全部を含む。

三、記載鳥類は余が直接實見したもの及び他の人々によつて棲息又は渡來の確實性を證言せられたるものみを擧げ苟も曖昧なるものは一切之を省くことにした。

四、和名の次行に記した鳥名は異名別名及び漢名等の代表的のものを擧げ而して方言は特に本文に入れて便宜上鳥類の習性等の説明資料とした。

一、記事中、英彦山と云ふは山名で、村名の時には英の字を略することに實際がなつて居る、尙彦山町と云ふは英彦山の山腹にある部落名、名稱で何も町制を布いた意味ではなく、單に町と云ふのも此部落のことである、又單に神社又は社務所などと稱するは官幣中社英彦山神社同社務所の意である。

# 英彦山鳥類一斑

## 目次

### 杜鵑目

#### 杜鵑亞目

#### 杜鵑科

一、ほととぎす

二、かつこう

三、つつどり

四、じういち

### 佛法僧目

#### 佛法僧亞目

#### 佛法僧科

五、ぶつぼうそう

#### 翡翠科

#### 川翡翠亞科

六、かはせみ

七、かのこせうびん

#### 山翡翠科

八、みやませうびん

#### 梟鵂亞目

#### 梟鵂科

### 英彦山鳥類一斑

### 鳥鵂亞科

九、きうしうふくろふ

一〇、あほばづく

一一、みみつく

一二、このはづく

#### 怪鵂亞目

#### 蚊母鳥科

一三、よだか

#### 雨燕亞目

#### 雨燕科

#### 雨燕亞科

一四、あまつばめ

#### 啄木鳥亞目

#### 啄木鳥科

#### 啄木鳥亞科

一五、かごしまあをげら

一六、なみゑげら

一七、きうしうこげら

一八、ありすひ

英彦山鳥類一班

燕雀目

八色鳥科

一九、やいろてう

雲雀科

二〇、ひばり

鶺鴒科

二一、きせきれい

二二、せぐろせきれい

田鵲亞科

二三、びんずい

鶉科

二四、ひよどり

鶉科

二五、きうしうさんこうてう

二六、こさめびたき

二七、きびたき

二八、おほるり

鶉科

二九、とらつぐみ

三〇、つぐみ

三一、しろはら

三二、あかはら

三三、まみじろ

三四、くろつぐみ

三五、こまどり

三六、のごま

三七、じようびたき

三八、るりびたき

三九、のびたき

鶯科

四〇、うぐゐす

四一、せつか

四二、こむしくひ

四三、きくいたゞき

河鳥科

四四、かはからす

鶉科

四五、みそざい

燕科

四六、つばめ

連雀科

四七、ひれんじやく

四八、きれんじやく

鶉科

四九、もず

四十雀科

五〇、しじうがら

五一、やまがら

五二、きうしうゑなが

鴉科

鴉亞科

五三、はしぶとからす

五四、はしほそからす

五五、みやまからす

椋鳥亞科

五六、かけす

椋鳥科

五七、こむくどり

繡眼兒科

五八、めじろ

雀科

五九、しめ

六〇、いかる

六一、まひわ

六二、こかはらひわ

六三、あと

六四、うそ

六五、すずめ

頬白亞科

英彦山鳥類一班

六六、ほほじろ

六七、みやまほほじろ

六八、あをじ

六九、くろじ

七〇、かしらだか

七一、ほほあか

七二、のじこ

阿比目

鸚鵡亞目

鸚鵡科

七三、かいつぶり

鶴型目

鶯亞目

鶯科

七四、ごいさぎ

七五、やまいぼ

雁鴨目

雁鴨亞目

鴨亞科

七六、まかも

七七、おしどり

鋸齒鴨亞科

七八、かはあいさ

英彦山鳥類一斑

鷺鷹目

鷺鷹亞目

鷺鷹科

蒼鷹亞科

七九、つみ、ゑ、つさい

八〇、このり、はいたか

鷺鷹科

八一、のすり

八二、さしび

八三、とび

鷓鴣目

鷓鴣亞科

鷓鴣科

八四、きうしうきじ

八五、あかやまどり

八六、うづら

鷓鴣目

秋雞科

八七、くみな

鷓鴣目

鷓鴣亞科

八八、たしぎ

八九、やましぎ

鳩鴿亞目

鳩鴿科

九〇、きじぼと

九一、あをぼと

追記

〔五十雀科

九二、きうしうごじうがら

杜鵑 目

杜鵑 亞目

杜鵑 科

「ぼととぎす Cuculus Poliocephalus Poliocephalus (Latham).

杜宇、時鳥、蜀魂、不如歸、勸農鳥、冥土鳥、賤ノ田長、望帝

英彦山の杜鵑は此山の景物の一つになつて居る位で有名な彦山盆踊の歌詞の中にも謳はれてゐる、梅雨前頃登山すると、中宮、豊前坊乃至彦山町の附近にも此鳥の啼聲を自由に聞くことが出来る、此地では勿論ホトトギスと云へば誰でも周知の鳥であるが稀にはタケチヨコなどの方言を用ふる者もある、其譯を聞くと聲が「オンタンタケチヨコイモクビクタカ」と聞ゆるので之から來たものだ、と云ふ之に就いて次の様な傳説がある。

▽兄弟があつて弟の竹太は病氣で寢て居る兄を看護して居た、或日のこと病人の兄は「弟は芋の良いところのみを喰つて自分には蔓首のみを喰はせて居る」と邪推し遂に思ひ切つて其場で弟を喰ひ殺して胃袋の中を覗くと豈圖らんや弟も矢張り蔓首を喰つて居たので大に恥入り己れも遂に自殺したので其靈魂が前記の様に鳴くのだと云ひ傳へられて居る又次の様な傳説もある。

△彦山では此鳥の初音を寢て聞くと一年中病氣をし又坐つて聞いた年は一年中泰平無事、立つて聞いたら年中多忙で暮すと云ひ、だから若し初音を寢て聞いた時は「時鳥今が初音と思ふなよ昨日のきぎす今日の古聲」と詠んで縁起を取り直すと云ふ。

△又此鳥が鳴き始むると筈に虫が入り亦芹もヤマイモも喰べられなくなると云ふが之は此鳥の停鳴期が既に之等の植物の時季が過ぎて自然食用に適せぬやうになる譯で何も不思議なことは無いのである。然し其邊の一致した俚諺が實に面白い。普通彦山では此鳥は五月上旬より其聲を聞き八月に入ては全く耳にせぬ様である。此時は最早や遠く印度、スマトラ、ボルネオ、ジャバ等に去つた後で當地でよく云ふ巢籠して其聲を聞かぬなどの言は全然誤りである。次に此鳥の啼聲に就ては傳説と共に各地様々に模倣して云ふが此地では次の様に云つて居る。

○トツケン、トケタカ

○ハツチャン、ドケタカ(西谷方面の人がよく云ふことで、ハツチャンは勿論人名、ドケタカ何處に行つたかの意)

△此鳥の黒焼は當地では血の道の妙薬と云ひ脂肪は眼病に特効りと云つて居る。

因に前に述べた盆踊の歌詞は次の様である。向ふの山にエイコノシヨウ、ほぞんかけたと鳴く鳥は冥土の鳥よヤーサーサーハーリヤリヤ]

ニが　つ　こ　う　Cuculus canorus telephones (L).

郭公、鵲、布穀

杜鵑と共に毎年毎年五月の上旬になると「カクコウ」の情緒豊かな鳴聲を聞く、彦山の一部の人の談によるとホトトギスよりちよつと早く來ると云はれ、此鳥も此山の景物で初夏登山者を喜ばせて居る、全山至る處に來るが殊に中宮、鬼杉、高住神社(豊前坊)附近に多く、麓の方二

俣或は上津野地方では緑の楡の枝に來て楡の害虫シラガタロウ等を啄んでゐるのを見ることがある、而して彦山地方の或狩獵者など此鳥を杜鵑の雌だなどと間違へて居る人もある。此鳥の黒焼も矢張り血の道の藥、脂肪は眼病の妙藥と云はれて居る。

### 三つつどり *Cuculus optatus optatus* (Could)

#### 筒鳥

英彦山に筒鳥が果して飛來するや否やに就ては多年疑問として居た然るに一昨年六月彼の佛法僧の研究の爲めに登山した時上宮附近及び上宮より下山の際本通り兩側の山で盛に一ポーく」の鳴聲を耳にした、同行の人々は此鳥は何も珍らしくない當山では「ボンギス」と云つて大体五月の初旬から鳴き初むる様だと談じて居たが余は大に喜んで之が筒鳥であると説明した蓋しボンギスの名はボンく」鳴くホトトギスの意であらう。此山續きの築上郡求菩提山では此鳥をタイく」鳥と云ふ其意は此鳥の鳴聲を聞く時節になると周防灘に鯛漁が始まる夫で鯛々と鳴くと云ふのである、面白いことと思ふ。元來鳥の鳴聲は時と場合で異り又其聞く人の心々によつて異なるが余は豫てから福岡地方に來る鹽賣の觸れ聲によく似てゐると云つて居る。

### 四じういち *Hieracoeyx nicicolor* (Blyth)

#### 慈悲心鳥十一

前記佛法僧調査の爲め英彦山に徹夜した時曉近く彦山町の方に山を降つてくると北岳の中腹及び通稱日本ゼメ、カラ谷方面に當つて頻りにジウイチく」と語尾を上げて鳴くのを聞

いたので同行の人にあの鳥が慈悲心鳥なることを説明した。夫で結局此山には杜鵑科の鳥が四種類揃つて來ることが判つた。同行の川上正信氏の言によれば此鳥は大南の方にも相當多く居て此地方では「長平鳥」と云つて居るさうである。成程聞き様ではチヨウヘイ、チヨウヘイと聞へぬこともない。余は先年肥後の五箇莊に鳥を訪ねて旅行したが久連子から板屋村に向ふ際土地の人々の話に此地方に毎夜(ミミキリ、ミミキリ)と鳴く鳥が居る其鳥は杜鵑大であると聽かされたが其當時は何鳥か一向思ひ浮ばなかつた。今考へて見ると、どうも此ジウイチらしい。此地の籠鳥に委しい人々の談に依ると英彦山にはホトトギスの仲間が此外にも數種あると云ふが恐らく此等の鳥の雌雄老幼の羽毛の差によつて誤り考へたものと思はれる。

## 佛法僧目

## 佛法僧亞目

## 佛法僧科

五ぶつぼうそう *Eurystomus orientalis* Calonyx (Sharpe)

## 佛法僧三寶鳥

英彦山の佛法僧は今や天下に普く知られて居る。其佛法僧も高千穂男及び當地古老の言に依ると明治二十五年の頃迄は相當多かつた。尤も其頃は上佛來山等も鬱蒼たる大森林で此處にも澤山佛法僧が來て居たが其後何時とはなしに全く姿を消してしまつたと云ふ。昭和八年の夏高千穂男及び英彦山神社々務所の方々から佛法僧飛來の通信があつたので數日の後登山調査したが運悪く其時は似た鳥も目撃することが出来なかつた。越えて昭和九年八月二

日同山に夏鳥の調査に行つた時圖らずも一の鎖から中宮千本杉の處で同伴の川上正信氏と共に完全に四羽の佛法僧を觀察することが出來た(昭和十年三月發刊の史蹟名勝天然紀念物調査報告書第十輯に詳細報告)尙當山神社々務所の人々及び直方營林署英彦山擔當區早野儀一郎氏等の談に依れば矢張り昭和八年の初夏より國有林六十八林班樅學術參考林(海拔八百五十米突)等に約十羽位の佛法僧を目撃したと云ひ次に昭和十年五六月の頃には數羽の佛法僧が奉幣殿横の老杉に屢々現れ石川熊懷兩主典から熱心な觀察報告に接した。越えて昭和十一年六月には彼の佛法僧の鳴聲の調査で登山千本杉及び社務所の附近で五六羽の佛法僧を目撃した譯で之から毎年引續き來ることと思ふ。此鳥の鳴聲に就ては觀察者に依つて異つて居るし又余としても其聞いた場處其他の環境によつて多少異つて居るが先づ普通の啼聲としては「ゲッゲッゲッ」を繰り返す様に余の耳には聞こえる。即ち此學問上で云ふ佛法僧は決して「ブツボウソウ」と鳴かぬと云ふのが本當である。次に此山に於ける此鳥の去來に就て調査すると明確なことは不明であるが先づ五月初旬に來て八月中旬には見えなくなる様である。然し宮崎縣西諸縣郡挾野神社(佛法僧飛來地として有名なる場所)先年實地觀察の爲め參拜した時の日誌に依る(主典石塚幸盛氏の談に依れば同地では毎年五月二三日に來て十月上旬迄なほ二三羽位を目撃すると又三河鳳來寺等でも五月の初めに來て九月に入つてもなほ見ると當地丸山喜兵衛氏の談である。

#### 川翡翠亞科

六、か は せ み *Alcedo benglensis* (Gmelin).

## 翡翠、魚狗、魚虎

コウセビと此地方では云つて居る、二俣、汐井川、障子岳の溪流邊でよく見受ける、水面を低くチツ／＼と鳴きながら飛ぶ様や、柳枝又は朽ちた杭などに止つて居る様は恰も繪の如く山間の風致を添へて居る。水近い崖などに穴を穿ち夫に産卵する習性があり、高島深氏も自宅の附近に營巢したのを見たとのことである、又同氏の話に「コウセビはヒラクチのお醫者さん」と昔から此處では云つて居る、其意味はマムシの棲んで居る穴にナメクヂが來て其周圍を這ひ廻ると粘液の圈内にあるマムシは這ひ出ることが出來ず誤つて其粘液がマムシの体に附着すると局部から腐敗し始むるが若し此鳥が嘗めてやると立どころに癒ゆると云ふのである、又一説にはコウセビはマムシの化したものであるとも云はれ何れも穴の中に棲む習性から來た迷信傳説と思ふ此鳥の黒燒は當地では淋病の妙藥と云はれて居る。

七、かのこしようびん *Ceryle guttata* (Vigors)

ヤマセミ、カワテウ

彦山では河船頭と云つて居る、嘗て高千穂男に聞いたことであるが夫は矢張り其止つて居る姿が河船頭に似て居る處から云つたもので深い意味はないだらうと語られた、余は先年伯耆の大山に登山したことがある其鳥居側の宮本旅館に泊つたが其主人の談話中に大山には山神主と云ふ鳥が居ると云ふのでよく調べて見ると此カノコシヨウビンのことであつた。この東西兩地の方言を對照して見ると實に面白いと思ふ、彦山では字牛淵、黒岩に稀に見る人がある位である、先年肥後の五箇莊を旅行した時下鶴の谷川の邊りで此鳥の營巢して居るのを

觀察したことがあつて其鳴聲は「クキツ〜」と聞えた此地方の人々は白鷺〜と云つて居た。

### 山 翡翠 科

八、みやませうびん *Halcyon coromanda* (Latham)

アカシヨウビン、赤翡翠

嘗ては彦山村役場及最近では白梅旅館の浴室に飛び込んだこともあり、湯山附近には可なり多い様である大字落合地方では「ニイレ」と云つて此鳥が人家に飛び込むと誰か死ぬ前兆で不吉な鳥として居る、處が彦山町では「ニイレ」と云へば虎鷄を指し同じく不吉な鳥として居る、其鳴聲のキヨロロ〜と異様に聞えるのと其の羽毛の嫌に赤褐色であることが色々の傳説を産んだのであらう、彦山に近い朝倉郡小石原及び高木村等でも此鳥のことを「ニイレ」又は「ニレ」と云ふ然し此語はだん〜詮索すると鶴(鷄)から來たものらしい昭和八年の夏高千穂宮司邸附近の石垣に營巢したことがある、或人は此鳥を水乞食と云ひ而も之に關する傳説迄話して居たが然し此人は近頃他から移つて來た人であることが判つた。

### 梟 鴟 亞 目

### 梟 鴟 科

### 梟 鴟 亞 科

九、きうしうふくろふ *Syrnium uralensis* (Temminck & Schlegel)

### 九 州 梟

此地ではコウゾウの方言で通つて居る、大正十五年の夏福岡鳥の會が此地に登山をした時

有志數人と共に夜禽の調査に行つたが恰度其の時社務所の下方及び奉幣殿の後ろに當つて此鳥の活動して居る嘴の音「パチ〜」及び異様の鳴聲を耳にした此地では「コウゾウハナクンクウタカ」と鳴くと云ふ、コウゾウの方言も此鳴聲から來たものであらう、五六月の頃麓に近い森の老木の空洞などで蕃殖する。

一〇あほばづく *Ninox scutulata* (Rafines).

青葉木兎、綠葉梟

毎年五月上旬頃から彦山町附近の森で、夕方から「ホウ〜」の聲を聞く、小學校前の松の空洞に數年續けて營巢したことがある、雛は三羽で「ヒュル」「ヒュル」と昆虫の様な鳴聲を出し育雛中は必ず一羽が附近の枝に監視して居るなど、なか〜玄人の様な觀察をして居る人があつた。

一一み〜つく *Scops. semitorques* (Temminck. & Schlegel)

大コノハヅク、梟鴞

余は未だ此山に於て此鳥を目撃したことはないが客年聞いた「英彦山の鳥を語る座談會」で初めて此鳥の棲息を確認した譯である、鳴聲は矢張青葉ヅクに似た鳴聲と思ふが此地の人々は「ギャ〜」と鳴くと云ふ、恐らく此聲は普通の場合ではなく何か異常の場合の叫聲かと思ふ。

一二ウのはづく *Scops. japonicus* (Temmin. & Schlegel)

カキヅク、木葉木兎、柿木兎

昭和十年六月、名古屋放送局から三河鳳來寺山の佛法僧の鳴聲として放送があつた、其鳴聲

は誠に明瞭に聞えたが此の放送を聞いた彦山町の有志は新らしく不審を起し社務所の人々と協同して手を分けて調査すると上宮方面に當つて放送で聞いた同じ聲で鳴くのを耳にしたと云ふので直に余にも報告があつた早速同月十日に登山高千穂男及び社務所の人々と共に上宮に登り此處を根據として附近を調査すると果して午後七時五十分より北岳の西方俗に云ふ「ニホンゼメ」方面にあつて明瞭に聞え後方槻木谷の方にも下手ながら同一の鳴聲が聞えて來た又鬼杉方面にも二三羽啼いて居ると聞いたので深重調査を進めた余は昭和九年の夏當山の佛法僧調査報告の一部を福岡放送局からアナウンサーを通じて述べた様に決して學問上の佛法僧は世間で云ふが如く「ブツボウソウ」とは鳴かない「ゲゲツゲゲ」と鳴くのみであると言つたが只豫想して居た通り、梟鳴類としたら其内の果して何種であらうかと、高千穂男とも屢々話してそれのみが不審であつた同夜社務所の蒲池治麿氏に依つて其鳥の啼いて居る位置止つて居た樹木(ブナ)夫から小型の鳥で軟く飛んだこと、月夜に黒く見えたこと等詳細の觀察事項を報告して貰つたので更に一泊して翌日も調査を続け今日こそ完全に正体を突き止めたいと心かまえをして夜に入るのを待ちつつあと數時間と云ふ時、黒田博士に依つて放送の聲の主こそは「ノハヅク」なることが證明發表されたことを大阪朝日新聞で見たり時は聊か調子抜けの感があつたが高千穂男と共に豫想した通り果して梟鳴類であつたことを喜び英彦山の分も間違なく「ノハヅク」であることを證明して下山した譯である、鳥の佛法僧が「ブツボウソウ」と鳴かないで「ブツボウソウ」と鳴くのは「ノハヅク」であると云ふことは當時天下の謎となり問題となり少からず誼しかつた此鳥の鳴聲は勿論聞き様では「オツタ

ツター」と聞え佛法僧とは聞えぬと云ふ人もある、要するに彦山には學問上の佛法僧も聲の佛法僧も共に棲む譯で此處では毎年五月初旬から此聲を聞くことが出来る、松養具榮氏の歌に三寶の名をし争ふ奇鳥は共に棲へり彦の高山

怪鴟 亞目

蚊母鳥 科

二三よ た か *Caprimulgus. jotaka* (Temminck. & Schlegel)

蚊母鳥、蚊吸鳥

五六月の頃英彦山に登ると夕刻、町はづれの松の樹上にキョク／＼と連呼する此鳥の鳴聲を耳にする、又學校の運動場などに下り砂浴して居るのを見ることがある、昨年昭和十年前に述べた佛法僧調査のとき深夜上宮の附近各所で此鳥の鳴聲を聞いた、同行の人の中には佛法僧と鳴く鳥の雌ではないかと云ふ人があつた、又或人は此彦山であの鳴聲は杜鵑の雌であると云ふ説があるが如何と問ふた人もあつた、余は蚊を喰ふことや、其他此鳥の習性から彼の新開地又は港の町等を闇に稼ぐと云ふ醜業婦のそれに此名通ずる點を説明して一行を笑はせた様な次第である、彦山に近い朝倉郡の狩獵家因小藤太氏は此鳥が孵化した雛を啜へて巢替へしたのを二度も見たと云ふが之が果して此鳥の通有習性か又は敵に襲はれての所爲かこれは疑問として大に研究の餘地があると思ふ。

雨燕 亞目

雨燕 科

雨燕亞科

一四 あまつはめ *Cypselus pacificus* (Latham)

雨燕

勿論燕の種類ではないが其形貌と其羽毛の色彩が普通燕に似て居るところから此地でも岩燕とか、雲切とか云つて居る。五六月頃登山すると上宮の上空を三ヶ月型に飛んで居るのを目撃する。鳴聲は初めツイー〜、次にピーン〜、續け鳴く。

啄木鳥亞目

啄木鳥科

啄木鳥亞科

一五 かごしまあをげら *Picus awokera awokera* (Temminck & Schlegel)

青啄木鳥

こゝでは栗斗と云つて居る。蓋し嘴で樹木を叩く音が栗を枿を斗る音に似て居るところから來た名稱と思ふ。本州等に居るアホゲラよりちよつと小形である。上宮及び鬼杉、玉屋神社附近でよく見る。山路を一人で歩いて居る際など此鳥が不意に出て「クエツクエツ」と物凄い聲で鳴くのでびつくりすることがあるが如何にも深山氣分がする。四五月頃の蕃殖期になると一層甲高い聲でケーケーと鳴く聲が谷に飢して寧ろ凄い感じである。

一六 なみゑげら *Dryobales leucotos namiei* (Steydneger)

赤啄木鳥、波江啄木

昔はアカゲラも相當居たとは彦山村の狩獵經驗者の均しく云ふ處である、勿論茲に云ふアカゲラとはナミエゲラのことであらう、余は未だ目撃したことはないが昨年六月登山の際例の英彦山鳥類座談會の節、白梅旅館主人早川槌雄氏外二三の人の談に鬼杉附近椏の林中などで折々キョー／＼と鳴く此鳥を見るところである。

一七、きうしうこげら *Yungicus kizuki Shikokuensis* (Temminck).

## 九州小木啄木

英彦山中各所に普通に、見る大正十五年であつた、此山に最初の試みとして縣から巢箱を架けた時、白梅旅館の裏庭の樹に架けた巢箱に入つたことがある、宿の人々も此鳥が、ギイ／＼鳴きながら、樹幹を斜に廻る習性は皆談じて居たことである。

一八、ありすひ *Lynx torquilla* (L.)

## 蟻吸

彦山町の故橋本少將邸前の大棟の樹に此鳥が斜に攀ち登るのを目撃して、當時余は少將に説明したことがある、此鳥も一度大正十五年(巢箱に入つたことがあつて、其時は特に農林省に報告した、高千穂男は此鳥が蟻の蛹を喰つて居るのを目撃されたさうである。

## 八色鳥科

一九、やいろこ／＼ *Pitta nympba* (Temminck & Schlegel)

## 赤旦那

明治二十八年に高千穂男は當山で八色鳥を一羽採集されたことがあつて、當時の動物學雜

誌に委しく記述されて居る(この標本は學習院の火災のため可惜鳥有に歸したさうである)其後彦山では誰も見た人がなかつたが昭和八年の秋社務所の石川主典の自宅庭園の柳の木にとまつて居たさうで又同じ頃高千穂男の庭園にも現れたとのことである何れも同男の話に依つて明瞭となつた、抑も美感は人によつて異なるもので別に標準もなからうが、恐らく日本の野鳥中小禽類中此位美しい羽色の鳥はあるまい。

雲雀科

ニ〇〇ひ ばり *Alauda arvensis japonica* (Temminck & Schlegel)

雲雀告天子

豊前坊に行く途中、即ち井手上農園の近く、それからスキ場附近で時々雲雀の囀るのを聞く、又冬季登山の際も同地方で雪の間を走るのを目撃したことがあるがその時は、勿論鳴きはしない、大正十四年五月二十七日の觀察日誌に次の様な記事がある。

「今日も高畑深君の案内で彦山を廻つた、別に變つた鳥の話の收穫もなかつたが然し歸途落合の路傍の大麥畑で雲雀の巢を發見した、巢は禾本科の枯草が主材で、巢の底は土について居た、卵は三個で一見淡青色の地色に褐色の斑点があつた、尙産卵中と思はれた、一間許り近寄せた、此日天氣晴朗で彼の新井白石の東雅に云ふ「日晴れよりヒバリの名出づ」を想ひ起さざるを得なかつた。

雲雀の鳴聲は各國各地色々に聞き做して居るが此地では只チイチビ／＼と唱へて居る。

## 鵓 鴿 科

## 二三 せぐるせきせい Motacilla boarula (Pallas)

## 黄 鵓 鴿

此地では總てセキレイの類をイシタ、キと云つて居る社務所前の廣場或は奉幣殿の屋根の上にツイ〜と鳴き番ひで尾を上下に振つて歩いて居るのをよく見受ける、一昨年(昭和)の夏社務所の人々の盡力で巢立後の巢を三個採つて貰つて歸つた、巢の位置は奉幣殿の母屋と破風と行き合つた處夫から一つは社務所の戸樋の中で巢材は禾本科の枯草或は蘚苔草根等で營み至つて粗末なものであつた。此鳥はよく他地方では灌木などに巢をすることがあるが英彦山では見當らない、社務所の人々の談によると卵は五六個で六月十三日に巢立したのもあつたとのことである、當社禰宜松養具榮氏等の談に此鳥が育雛中親鳥が雛の糞を啜へて搬出するのは珍らしくないが夫を態々水盤の清水の中に棄てに來るのが其意を得ぬとて余に質問された。然しこれに就て一二の人は次の様な説をなした、曰くそれは口を嗽ぎに來た序の所爲で別段深い意味はなからう、又曰く育雛の場所を敵に悟られぬため巢の附近に糞を棄てずわざと水中に入れて所在を暗ますのであらう、云々と、何れにしても判斷に苦しむ、しばらく記して研究題として置く。

## 二三 せぐるせきせい Motacilla grandis (Sharpe)

## 脊 黑 鵓 鴿

前種の様には多くはないが町の裏手溪流の邊、又は沙井川の汀等によく見る鳥である、昨年(昭

和十年(登山)の際、奉幣殿の屋根上、それから社務所側面の杉の根、石の上などに「ツーツー」と鳥さながら尾を上下に振つて居る優雅な姿を見ることが多いので、彼の日本紀の伊弉諾伊弉册二柱の神の神話を思ひ浮べ、神社境内に相應はしい鳥と思ふ、嘗て二俣の水田の石垣の中に産卵して居るのを観察したことがある。

田 鵲 亞 科

二三びんとずい Anthus. maculatus (Hadgson)

キヒバシリ

修道館下の田圃や、小學校の庭木などによく見る鳥で「ツーツー」と鳴いて尾を變な風に振つて居る、青鵲、野鵲などに似たところがあるがよく見ると脊の緑褐色や翼の一部にある黄白色の部が眼につく。

鶉 科

二四ひよどり Hypsipetes amaurotis amaurotis (Temminck)

鶉

彦山と云つても、中腹以下に多い様である、殊に大正十二年禁獵區となつてから以來急に多くなつた感じがする、即ち參道の兩側の木々に群れて人を恐れず「ジイ〜」鳴く大膽さは登山者の均しく認むる處である、元來此鳥は渡鳥であるから、例年十月初旬に來て四月には去るのが大部分であるが、此山では夏もなほ相當残り盛に鳴いて夏の登山者に清涼の氣をそゝつて居る、此地古老の言によれば初夏此鳥の雛を見ることがあるから多分此山でも蕃殖するだら

うとのことであるが余は十數年來此山の鳥に關して注意して居るけれども未だ巢を發見したことがないので疑問として居る、ユヅリハ、クロガネモチ(方言なのみ)ヒサカキ(方言シャクキ)クス等の實を好みこれ等の木に集るのを目撃することが多い、

鶯科

二五'さんこうてう *Terpisiphone atrocaudato atrocaudato* (Eyton)

九州三光鳥

早川槌彦氏の談によると近年殆ど見えなくなつたがそれでも昨年一二回玉屋神社の邊で彼の脊の黒い尾の長い三光鳥を久し振り見たとのこと、多分此鳥の雄鳥を見られたのであらう、彦山町では普通にはイカルの別名として三光鳥と云ふ人もあるが早川氏が見られたのは眞の三光鳥に間違ひないらしい、此地では勿論蕃殖はしないが、對馬等では盛に蕃殖する模様である、巢は樹枝の高い所に架け随分深い、余は富士の裾野で得たものを一個所有して居る、此鳥の鳴聲は此地古老の言によれば、矢張り「ツキヒホシ」<sup>ノ</sup>と鳴くと云ふが普通には「四十七里ポイ」<sup>ノ</sup>七里ポイ<sup>ノ</sup>と聞いて居る前記の分は寧ろイカルの方が近いと自分は思ふ。

二六'ござめびたき *Muscicapa latiostris* (Raffles)

小 鵲 鶯

冬季は全く見たことは無いが、昭和三年の夏及昭和七年の春登山の際慥に目撃した、櫻の枝にとまつて、初めは「ジイ」<sup>ノ</sup>鳴いて居るので山雀かと思つて居たが後には繡眼兒に似た鳴聲であつた、尙續けて觀察すると櫻の木に居た蜘蛛を捕つて居た、昭和七年四月十一日の日誌よ

り)

二十七 ぎ び た き Muscivora narcissina (Temminck)

黄 鶺鴒

彦山町某家の座敷の床に高山を描いた山水の掛軸が掛けてあつた多分英彦山の一部を描寫したものと想像される。そして此畫中に一羽の小禽があしらつてあるのをよく見ると黄鶺鴒である。成程此鳥は高山性の鳥で南岳及び北岳の一部でも見たことがある。尤も麓の平地で目撃したこともあつたが、兎もあれ美術家の觀察眼も周到なものだと窈かに感服した。これは何も此地ばかりではないが初夏の頃「獵師戀し、黒口來い」と反復して鳴く小鳥があるがあれは何鳥だらうかと二三質問されたこともあり當時余はそれは多分それは青葉木兎であらうと答へて居たところ其後また某地で此話があり其人の話に青葉木兎の鳥体はよく承知して居るが全く別な鳥であるとのことに大に疑問として居た。然るに本年(昭和十二年)四月本邦鳥學界の權威大阪市榎本佳樹氏が有明海鳥類調査のため來縣されたので氏を案内の際談偶々こゝに移ると同氏は「それは黄鶺鴒ではないだらうか、あの鳥の鳴聲は聞き様によつては獵師戀しとも似た處がある」と云つて居られた。同氏によれば此鳥の鳴聲は

△ツクツクポウシ、ツクツクポウシ(語尾をあげて蟬の様に聞える)又

△ピーホーリー、ピーホーリー

△チツーホウチウ

△ビヨシコウ、ビヨシコウ

等であると尤もこれは同氏が軽く口真似して居られるのを側で一寸手帖に控へたので、多少聞き誤つたところもあるかも知れない、之から考へて見ると大に點頭づかれる点もある。

二八、おほるり *Muscicapa. cyanometalena* (Temminck)

大瑠璃、竹林鳥

參道の兩側に並ぶ石燈籠の火袋の中、それから産靈神社、豊前坊(高住神社)の堂宇の隅又は注連繩の張つてある板壁との間などに主として蘇苔類(スギゴケ、ヤマゴケ)などを蒐めて扁平な巢を營んで居る、巢は卵を載せる部分が少し凹んだ位で、別に茶碗形ではない、千本杉稚兒落附近には此鳥の群れて居るのをよく目撃する、ある瑠璃色の可愛らしい姿は慥に彦山の名鳥の名に恥ぢない、初夏の頃彦山町に泊つて朝早く町外れを散歩して居ると、彼の頬白に似て又、黄ビタキに似た處もある、此鳥の初鳴は毎年四月上旬頃である。

鶉 科

二九、とらつぐみ *Turdus. dauma aureus* (Holandre)

虎鶉、鶉

此地ではニール、又は無常鳥などと云つて居る、無常鳥は杜鵑のことだと云ふ人もあるがそれは稀である、而して、此鳥の鳴聲を「ヒョーヒー」又は「ヒーヒョウ」と聞いて居る、三方圖會にある「聲如日休戲」と略ぼ似て居る處が面白い、古老の言に「此鳥は朝と夕刻に、時間を定めて鳴く」又は「正午と夜明に鳴く」などと云ひ又前記ニールと方言する人の説に「此鳥が夕方鳴くと、老人が死し、朝鳴くと若者が死する」などの傳説もあるが、思ふに、ニールの傳説方言何れもヌエ(鶉)の訛り

から来たものと思はれる。此鳥は穂の實を好み大南などでよく見る。昨昭和十一年の秋禁獵區  
續きの朝倉郡小石原で捕つた珍鳥と稱して剝皮を自動車會社の人によつてわざ／＼余の手  
許に送つて來たことがあるがそれも此鳥であつた。

三〇三　ぐ　み　Turdus. fuscatus (Pallas)

鶉

此地ではキイキイガツチヨと云つて居る。宇唐谷附近の楠の實等につく、彦山に渡つて來る  
のは毎年十二月頃だと云ふ。四月登山すると歸り前(渡りの去期)の集つた此鳥は一種の鳴聲で  
さかんに騒いで居るのを見る。普通鶉は「キイ／＼」又は「クアツ／＼」と鳴くが此時は「キヤア／＼」  
／＼「キヤツ」など遠くから聞くと恰も杜鵑の鳴聲の様に聞える。古書にツグミの名は口を嚙む  
より來るとあるが、此鳥は随分騒ぐ鳥で此名の起りを怪まざるを得ない。然し又或書には夏至  
から後、口を嚙むとあるから之で考へると理屈もある様である。兎も角も此鳥は渡鳥で口を嚙  
ると云ふ時季は既に飛び去つた後であるから此の話が出たものであらう。元來此鳥は英彦山  
よりも却つて平地の方に多く見る様である。

三一　しろ　は　ら　Tardus. pallidus (Gmelin)

白腹鶉

此地では「クソホリ」「クソガツチヨ」などと云つて居る。鶉より少し遅れて十月中下旬の夜間  
に渡り來る様である。龍の髭、タブ、シシヤンボ等の實を好んで食しよく地上に降りて落葉を漁  
る習性がある。「グチュ／＼」「クワツ／＼」と普通には鳴くが時にはカイツブリと云つたやう

な鳴聲や又ミソサイの様に鳴くこともあり、更に春先になると「ピヨロシ〜」又は「チイロン」又は「チヨロン〜」などの囀りを聞くことがある。

三二あかはら *Turdus chrysolaus* (Temminck)

赤腹鶇

白腹に比して赤腹は尠ない、此の地方ではクソガツチヨウ(白腹)の雄とか又は雌とか云つて居るやうだ、主として昆虫を食するので益鳥になつて居る、鳴聲は矢張り白腹に似て居る。

三三まみじろ *Turdus sibiricus davisoni* (Hume)

眉白

此地でもチポイチチ、チポイチと鳴く眉の白い鳥が秋になると、鶇などと一緒に來ると云つて居る、色々な点から見て眉白だらうと思ふ、高千穂男等も眉白は確かに來ると云はれる。

三四くろつぐみ *Turdus cardis* (Temminck)

黒鶇

英彦山のカラ谷附近に獵期初めに短期間來る、そして獵期の終り方になつて再び來る様であるが一般には知らぬ人が多く又知つて居る人も雄鳥だけである、雌鳥は腹部が褐色で脊の羽色も又淡いので別種の様に思はれて居る、此鳥は他の鳥の眞似をすることがあるので往々間違へられることがあるが、然し普通には「キョ〜キョロロ〜」又は「ツーツー」などに聞える。

三五うまどり *Eriothacus akahige* (Temminck)

駒鳥

英彦山の駒鳥と云へば昔は産地の一つとして有名であつたと云はれて居る位だから、相當渡つて来て居たことと思ふ、然るに近年は殆ど見あたらな、例の早川槌雄氏外二三有志の談に障子岳及岳滅鬼官山などで稀に見受けるとのことである、此地では、ヨシノゴマ、又はホシゴマなどと云つて居る、鳴聲も「ガチャ〜グリ〜」と聞ゆる。

三六の じ ち Erithacus. calliope (Pallas)

野駒

雄鳥の喉に赤い羽毛(雄鳥)があるので割合によく知つて居る人が多い、町に以前小鳥を好んで扱つて居た人が居た此人は「日ノ丸」と云つて居たが勿論彦山に生れた人ではない、昭和八年の五月、藤の花のある頃此山で見たことがある、昭和十年の秋、座主跡に来て居たのを見たとの話も聞いた、此鳥の常鳴は左程でもないが、囀りは逆も複雑な良い聲である。

三七じ ようびたき *Ruticilla. anorea* (Gmelin)

鶉、迎客鳥

彦山町乃至界隈の人家近くに普通に見る鳥で、方言ではアカヒン又はヒンコツなどと云つて居る何れも其鳴聲又は羽毛から來たものであらう、和名のヒタキは其鳴聲が燧石を打つ音に似た点から名づけられたものだとすれば、英彦山の方言と對照して面白いと思ふ、現今では自動車が町迄通るので登山、參詣者も樂であるが以前は二俣から皆徒歩で登つたものであつた、その途中、琴の茶屋附近などで此鳥が兩側の木に止つて体を前後に屈伸しつゝ、ヒン、カツ〜

と鳴くのを聞けば如何にも登山者を慰むるかに思はれて異名の迎客鳥を僂ばずには居られなかつたものである。

三八るりびたき Tarsiger cyannus (Pallas)

瑠璃鵯

雄鳥の羽毛はルリ色をして居るのでよく判るが、雌鳥は小虫喰か、眼白の色をして居てなか／＼見分け難い(腹部に僅かにルリ色の羽毛があるだけである)湯山の處で一度「ヒীগチユ／＼」と鳴く小禽があるのでよく見ると此鳥であつた。

三九のびたき Pratincola maura (Pallas)

野鵯

昭和五年の十一月晴れた日であつた、今の修道館下の稻田の中で一二本高く伸びた稻穂に小さい鳥が止つて居るので持合せの双眼鏡で覗くと脊に鐵赤色の處が見えて正しく野鵯でヒィヒィと鳴いて居た、此鳥も複雑なよい聲で鳴くさうであるが余は未だそれを耳にしたことがない。

鶯科

四〇うぐゑす Horeites cantans (Temminck)

鶯春告鳥

座主跡(今の九大生物研究所のある地点)の上方の谷を鶯谷と云ふ、又高千穂男爵家の家付の雅號を鶯嶺と稱せられる由蓋し此地鶯谷の地名と昔も今も此地に鶯の多い處から號せられ

たものと思ふ、盛夏の頃登山して此鳥の艶麗な囀りを聞くと誠に萬斛の涼味を覺ゆる、此鳥の初音を便所で聞くと其年は縁起が悪いと云ふが惟ふに之は杜鵑の傳説と混同して取違へたものと思はれる、又鶯の巢に杜鵑が卵を産み込み抱卵育雛迄鶯に托すると云ふことは傳説的に彦山でも云つて居る勿論之は學問上からも動かすべからざる事實であるが彦山では未だ實見した者が無い、英彦山では五三竹の竹藪にカヤや笹で作つた横向の巢を發見すると二三の人は座談會で話して居た、因に鶯の卵も杜鵑の卵も共に赤色で少し大小の差がある位である、所謂造化の神の妙技と云はざるを得ない。

#### 四一せ　　つ　　か　　Cisticola. cisticola (Shapse)

##### 雪　　加

夏季に登山して彦山町から豊前坊の方に廻る途にスキ―場の邊を過ぐるときよく注意すると茅野の中に昆虫の鳴聲に似た「ヒヒヒヒ」と云ふ聲が聞え暫く見て居ると雀大の一寸黄ばんだ鳥が「チュ〜〜」と鳴きながら飛び換ふ様を見る、之が雪加である、春季、茅や蓬を集めて粗末な巢を營むものである。

#### 四三「こむしくひ　　Phylloscopus. borealis (Blasius)

##### 小　　蟲　　喰

英彦山には八月の末には渡つて來る様で恐らく秋の渡り鳥の先驅者であらう「ジュ〜」又は「ゼツ〜」と鳴き彦山町の附近の藪に多く見る、鶯の雌などと云ふ人もあるがそれは誤りである。

四三 きくいたゞき *Regulus. regulus japonensis* (Blakiston)

菊 戴

マツコブリと云へば英彦山では菊戴を指すやうである。エナガと共に松の蕊芽に止つて松の蚜虫等を喰つて居るのを見撃する。

四四 かはからす *Cinclus. Palasi* (Temminck)

河 鳥

湯山、汐井川、障子岳の麓、其他溪流に沿ふた處でよく見受ける。大きな岩にとまつて、黒褐色の翼と尾を一緒に動かして「チツ〜」と大きな聲で鳴きながら岩を打つ様は如何にも深山幽谷に相應はしい情景である。此鳥も三月頃になると實に朗かな高音を擧げて囀る鳥でさる。此鳥の巢は水落ちの裏岸又は水落ちの横などに穴を掘り、笞を敷いて産卵育雛するもので、大正十四年六月二俣川の上流で水落ちの横の岩壁の棚見た様な處に水苔を集めて營巢すら居るのを見たことがある。

鷓 鷓 科

四五 みそざゞい *Irogodytes. fumigatus* (Temminck)

三十三才、襪雀、黄匠雀

彦山町から上宮に登る道路の兩側、藪の中や熊笹の中に「チュ、チュ、チュ」と甲高い鳴聲をよく聞く。此地では「チャチャツ」又は「ミソツチュ」などの方言がある。「ミソツチュ」又は之に似た方言は随分汎く使用されて居るが、其依つて起るところは此鳥の習性たる溝や土管などによく這入

ると云ふ意味で溝鳥から来たものではないかと自分は聊かこぢつけて居る、昭和十年の夏登山した際社務所の三河益海氏から此鳥の巢を貰つて歸つたが巢材は勿論蘚苔類で巧みに出来て居る。

燕科

四六つばめ *Hirundo rustica gutturalis* (Scopoli)

燕乙鳥

毎年三月の中旬頃になると、落合、坂本、彦山町などに現はれて營巢するが然し平地に比して余り多くないとして十月の中旬には姿が見へなくなる。

なほ腰赤つばめは此地には來ない様である。

連雀科

四七ひれんじやく *Ampelis japonicus* (Seehorn)

緋連雀

英彦山には緋連雀も黄連雀も共に飛來するが緋連雀の方が多し、此鳥はマツグミ(寄生植物)ネヅミモチ、キツタなどの實によく着く當地で此鳥のことをトツキンカブリと云ふ人があるがよく調べて見ると深山、頬白の方を普く指して居る様である。

四八きれんじやく *Ampelis garrulus* (L.)

黄連雀

前項に述べた様に英彦山ではヒレジャクに比して尠ない、緋連雀と同じ餌につくが其外に

ほうのさ、椋などの實もよく食すると云ふ因に英彦山の椋は標高千尺から二千尺の處に多く椋は故橋本少將邸附近に小數あつて之に連雀類の來て居るのを折々目撃する。

鷗科

四九も

す *Lanius. bucephalus* (Temminck. & Schlegel)

百舌鳥、伯勞

近年鷗はかなり多くなつたと此の地の人は云ふ、各所で見る鳥で殊に夏期谷間で此鳥の尾を廻して居るのをよく見るが然し決して秋の様には鳴かぬ大正十五年四月落合の畑の岸にある野荊薇の中に巢を營んで居るのを見たことがある、巢の材料は禾本科の枯草やそれに紙屑襤褸等も交ちつて居た、此鳥の挿刺餌に就ては矢張り平で云ふが如く雲を目當にして刺して居るからあとで其場所が判らなくなつたものであると云つて居る、此挿刺餌には雨蛙、バッタが此地では普通である。

四十雀科

五〇しじうがら *Parus. major minor* (Temminck. & Schlegel)

四十雀、荏雀

英彦山の山手にも又町の近くにも普通に見る小禽である、昭和十四年にはじめて巢箱を架設した時、一番多く利用したのは此鳥であつた、昨年(昭和十一年)一月に架設した巢箱(八十個)中小鳥の營巢利用を見たのは約三分ノ二だつたがその大部分は四十雀で次は山雀であつた、此鳥は平素「ジュク〜」と鳴くが春先きになると「ツツペイ、ツツペイ」又は「チツペイ〜」と聞ゆる、

彦山では此鳥は「チヨキン」と鳴くと云つて居る、そして之に就て次のやうな傳説らしい話がある。一人の酒好きの木挽が此山の麓に住んで居た、或日山に出掛けて熱心に木を挽いて居ると鋸の下で慕蛙が「五合買ふ々々々々」を繰返し鳴くので木挽は之を聞いて堪り兼ね早く歸つて酒を飲まうと咽喉を鳴らして仕事もロクに手に付かぬ折から今度は頭上の樹枝に四十雀が来て「貯金」と鳴いたので遠がの木挽も大に悟つて考へ直しそれ以來酒呑を中止して貯金を始めたと云ふことである。「惟ふに「チヨキン」と啼くのは彼のヒガラの啼聲の方が寧ろ近い様に感ずるが之から來た誤解ではあるまいか。

五一やまがら Parus. Vorius (Temminck. & Schlegel)

#### 山 雀

小笠原家所有の杉の造林地、それに田川農林學校の演習林、上津野の村有林の杉山などには特に多い、こげらの様に嘴で樹枝などを啄きながら時々頭を擡げては「ジイ」と鳴いて居るのを見る、一昨年(昭和十年)五月登山の際に川上正信氏の案内で上宮側面のアスナロの空洞に此鳥の蕃殖したのを見たが翌年には此空洞を四十雀が利用して居たのも面白い。

五二きんごうなが Aegithalos. caudatus Kiushiuensis (Kuruda)

#### 九州 柄 長

松の木の前に述べた菊戴と一緒に群れて「ツヨ」と又は「ツルリ」と鳴きながら松の害虫、芯喰虫や蚜虫を捕つて居るのをよく目撃する、これが柄長と云ふ益鳥である、柄長の名は蓋し尾の長いところから來たものであらう。

鴉 科

鴉 亞 科

五三「はしづとからず」 *Corvus, macrorhynchus japonensis* (Bonaparee)

嘴 太 鳥

彦山町に泊つて居ると朝早く花見岩の松の木や其近くにある火ノ見台の上に止つて「カア」  
カア」と輕快に鳴く聲が谷に響いて如何にも山の宿に泊つて居ると云ふ感を深くさせられ古  
語の「鷄は晨天を報じ鴉は東明の空に飛ぶ」を想ひ起す、英彦山でも鳥鳴が悪いと邑に誰か死人  
があり、鳥鳴きが良いと屹度喜びことがあると云ひ、即ちカア〜と輕く連呼するのは喜  
び鳥、カア〜と語尾を引くのは凶事の兆として居るやうである。又此嘴太鳥のことを糞喰鳥と  
も云ひ此鳥の黒燒は血の道の妙藥又は發狂者の鎮靜劑として特効ありと傳へられて居る、尤  
も之は鳥一般に云ふことではあるが特に此種の鳥を最良と云ふのらしい。

五四「はしほぞからず」 *Cornus, corone orientalis* (Eversmann)

嘴 細 鳥

此鳥を地鳥じからずとも云つて居る、尤も人によつては嘴太にもさう云ふ様である「鳥々勸三郎親の  
恩を忘るゝな」と云ふ民謡は彦山にも殘つて居るので此地の有志の人から鳥に反哺の孝あり  
やと聞かれたことがある、余は之に對して「老いた鳥や、負傷した鳥に若い鳥や、元氣のよい鳥が  
餌を採つて來て與へると云ふことは先輩の實見談にも聞いたが果して反哺の孝ありや否や  
そこ迄は判らない」と答へて置いた。ところで鳥で書き落すことの出來ない次のやうな神行事

談がある。

下宮の側に今でも大きな岩がある。春祭(二月十四日)の時昔は其の岩の上に御供物を供へたものでそれを神鳥が飛んで来て喰へばそれを合圖に御神幸の行事を進むるけれど、御山に何か不吉不祥事があると鳥が来ても蹴散らして決して喰はない其時には座主は齊戒して御山に祈りをしお祓ひをし、鳥が喰ふ迄は座主も斷食謹慎して動かなかつたと云ふことで此行事は近ごろ迄も續けられて居たとのことである。これで思ひ出すのは彼の有名な安藝の宮島(嚴島神社)に今も尙行はる御鳥喰式(おひしき)の神行事である。

五五 みやまがらす *Trypanocorux frugilegus pasinator* (Gould)

深山鳥、山老公

千羽鳥、わたり鳥などと云つて居る。彦山村(まき)、下田方面の麥畑等によく來る。老人の談に昔は澤山來たものであるが近年非常に尠くなつたとのことである。

檀鳥亞科

五六 か け す *Garrulus glandarius japonicus* (Schlegel)

檀鳥、掛子

カシドリと云つた方が此地ではよく判る。町から上に登ると至る處に「ギャ〜」と鳴く此鳥の聲を聞く、初めて登山した人など頭上の樹枝に不意に此叫び聲を聞いてびつくりする人が多い。毎年梅雨前に蕃殖する。余は一度上宮前の正面石段下の杉の樹に營巢したのを見たことがある。高さは地上三メートル位の處で小枝を組み合せて營んで居た。面白いことには嘗て社

務所の中に度々出入して大膽にもお饌米を喰ひ荒すので社務所の人々が次第に奥の方にお饌米を移し換へて誘導し鳥が奥深く這入つて來た時不意に襖を閉めて擒にしたことがあると此話を聞いて居ると座に居た一人は又イモムシを吊して置くとよく喰ひに來ると語つて居た。此鳥は普通「ギャア〜」と鳴くが又色々の鳥獸の聲や物音迄も眞似する鳥である。直方市の一部頓野とんのの山間部では此鳥のことをキモーズと云ふ蓋し良く他鳥の眞似をする百舌鳥ヒツの更に眞のものと云ふ意味であらう穿つた名だと思ふ。一昨昭和十年の夏上宮の茶店で憩つて居ると近くで「ヒョー〜」と鳴く鳥があるので浮足で挿つて見るとそれが檀鳥であつた。

椋鳥科

五七〇 むくどり *Sturnia. violacea* (Boddart)

小椋鳥

昭和十年の初秋であつた川上正信氏の談にこの頃頭の上部に白いところがあつて、鶉より少し小形の小鳥が上宮に群れて來るとのことだつたのでよく〜調べて見ると小椋鳥であつた。多分以前から來て居たものと思料される。一般に此鳥は秋の渡り鳥としては早い方で、渡つて來る時は「チャ〜」鳴いて實に騒々しい鳥である。

繡眼兒科

五八〇 り *Zosterop. palpebrasa japonicus* (Temminck)

繡眼兒、眼白

英彦山の中腹以下殊に人家近くなどに普通に見る鳥である。數年前深倉の畑近くの桑畑に

巢を架けて水色の卵四ヶを産んで居るのを見たことがある。因に普通のメジロより嘴の長い飯鳥メジロも或はこの地に棲息するかも知れないが概して本縣では海岸に近い處に多い様である。茲には疑問として省いて置く。

五九し め *Coccothraustes japonicus* (Temminck & Schlegel)

蠟 嘴

椋や榎の實を好んで食ふので英彦山でも椋鳥又はムクワリの名がある。狩獵者などは次のイカルと對照して雌雄の様に云ふがそれは誤りである。昭和三年の秋、故橋本少將宅前の椋に「キヨキヨキヨ」と鳴く鳥が五六羽とまつて居たので近寄つて見ると此鳥であつた。

六〇い か る *Euphonia Personata* (Temminck & Schlegel)

鶇、桑、厦、斑鳩

前項に述べた様に此地ではシメと共にムクワリ、ムクバリ等の方言で通つて居る。稀に豆廻シと云ふ人があるが之は他から來た人で小鳥屋の通用語である。其鳴聲は「キヨッキキ」と聞える。三才圖會に此鳥の鳴聲を「比志利古木利」と記してあるのも面白い。此地では又「月日星々」と鳴くと云ふ人もある。

六一ま ひ わ *Spinus Spinus* (L.)

鶉 金翅雀

随分古い話であるが大正十一年二月七日に豊前坊道でウツを落して居る人がマヒツを糲で捕つて居るのを見た。一方にヘクソカヅラの實を吊して居たから此鳥も此の實を好むこと

が判る。

六三二かほらひわ *Chloris. Sinica ussuriensis* (Hartert)

河原鶉

タテヒバ、アサヒキ等の方言がある、尤も此方言は獨り彦山のみに限らず福岡縣下各所に通ずる、麓の方では麻の實を蒔くと之が發芽するのを待つて引き抜いて喰ふと云はれて居るが彦山の山中では苺の實を好んで喰ふとも聞く「キユル〜〜」  
「ビーン」又は「チウイン」などと松の木の上等にどまつて鳴いて居る、此鳥は三月頃になると例のひわ色が一層濃くなつて美麗なもので籠鳥としてもよい鳥である、筑前の海岸松山等には盛に蕃殖するが此地では未だ巢などは發見しない。

因に大カハラヒワも或は棲息するだらうと思ふが判然しないから茲には省くことにした。

六三三あ と り *Fringilla. montifringilla* (L.)

花 雞、花 鶉

毎年一月十四五日頃になると何羽かのアトリを落合附近で見受ける、而して又獵期の終り頃(四月上旬)中宮と産靈神社の附近で「チャー〜」と鳴く此鳥の大群に出逢つたことがある、實に騒がしい鳥で此地ではアットリと云つて居るが英彦山に近い朝倉郡地方にてはボメキと云つて居る、蓋し騒々しき意らしい、昔から此鳥が渡來すると地震があるとか、火山が爆發するとか古書にもあるが當地でも古老は云つて居る、谷間の段々畑にある粟、蕎麥を害するので農家の人はよく知つて居る。

六四(う) そ Pyrrhula pyrrhula Kriensis (Sharpe)

鸞灰兒、拙老婆

昔は非常に多かつたさうである。禁獵區にならぬ以前は此山に登ると登山道の兩側の茶店などに此鳥を籠鳥として吊してあるのをよく見たものであるが近年は全く目につかぬ様である。此鳥は年によつて非常に渡りの多い年と尠ない年がある。彦山では昭和二年同七年が多かつたと云つて居る。余は嘗て北坂本で百羽位の群に逢つたことがある。其時は不思議にも雌(此地でアマウソ)が多かつた様に思ふ。此鳥は梅や櫻の芽を害するので此鳥の多い年は梅の實は不作だと云ふがそれは合理的の話と思ふ。此鳥は普通「ヒョン、ヒョン」と鳴くが機嫌のよい時は琴弾くと云つて喉を振はして鳴く聲は何とも云へぬ。雄鳥。此地で「ヒウソ」と云ふ(の喉の赤い部分は個体によつて濃いものと淡いものがあるが飼養者の經驗談によると若い間は赤い部分が濃く廣いが老ゆるに従つて淡く且狭くなると云ふ)。ヘクソカヅラの實や、ナヅナの實なども好んで喰ふやうである。

六五(す) ず め Passer montanus (Saturatus)

雀

英彦山には割合に雀が尠ない。珍らしいことに英彦山の雀は松や杉の木に藁や禾本科の枯草、雞の羽毛等で巢を架ける。何故人家に營巢せぬかと疑問にして居た處昨年登山した時、高千穂男其他によつて疑問はあつけなく解決した。其理由は、英彦山の家は草葺や小板葺が多くて瓦屋根が無い、従つて戸樋が無いので大切な脚場が無いためであると、成程と余は手を打つて

首肯した。

頬白亞科

六六ほほじろ *Emberiza ciopsis* (Bonaparte)

頬白ひび 鶉ひな

ヤマズメ、ヒトト、シトト等の方言がある。秋夏の候松のミドリに止つて囀つて居るのは登山する人のよく知る所である。此鳥は普通、ヒツツと鳴くが蕃殖期の前後になると例の「一筆啓上仕候」又は「辨慶皿持つて來い」などと鳴くと此地でも云つて居るヒトトの名は地鳴から來たものであらう。

六七みやまほじろ *Emberiza. Elegans elegans* (Temminck)

深山 頬白

此地では「トツキンカブリ」の方言がある。勿論これは頭上の冠毛から來た名であらう。蓋しトツキンとは昔、山伏の冠つたもので以前のものは今の夫と異つて尖つて居たとのことである。鳴く時は冠毛を立つるのでなか／＼可愛らしい別項の様に人によつては連雀に此名を云ふものがあるけれど普通は此鳥の方を指す人が多い様である。

六八あをじ *Emberiza. spodocephala Parsonate* (Temminck)

青 鶉

英彦山にはアオジもノジロも共に棲んで居るが其名稱は區々の様で混同して居る。濶葉樹のある處に行くと「チツ／＼」と鳴いて落葉を返して居るのをよく見る。奉幣殿の下から豊前坊

に通ずる間道でよく目撃する。

六九くろじ *Emberiza variabilis* (Temminck)

黒 鷓

雁田峠(大字落合)で一羽の黒鷓を見たことがある。彦山の人に聞くと普通に居るとのことである。昔は網で青鷓などと共に捕へて喰ふたもので中々美味であると云ふ。

七〇かしらだか *Emberiza rustica* (Pallas)

頭 高

彦山では頬白と混同して居てヒトトシト、山雀などと呼んで居る。高須原方面落合などにも稀に見るが、彦山村の平坦部には溝縁などに多く見る鳥である。

七一ほほあか *Emberiza fucata fucata* (Pallas)

頬 赤

頬赤の名は頬に赤褐色の部分がある處から來た名と思ふ。英彦山にも可なり居る。此地の方言にナタウシナイと云ふのがある。どんな鳥かと聞くと雀や山雀に似て溝縁などに居る鳥がよく草原に匿れるので鉋を投げ付けて之を捕獲しようとするれば遂に鳥を見失なひ鉋も失ふことがよくあると云ふ。多分此鳥を指すものであらう。

七二のじ *Emberiza sulphurata* (Temminck & Schlegel)

野 鷓

前にも云ふ様に青鷓と混同して居る人がある。よく注意して見ると頭上は黄褐色で翼は黒

褐色であるが、先端に黄白色の部分があり尾は黒褐である。鬼杉の上方六十八林斑などによく見る普通「チチ、ヒリリリ」と鳴く様に聞えるのは此鳥である。

阿比目

鷺鷥亞目

鷺鷥科

七三かいつぶり *Podiceps. ruficollis japonicus* (Hartert)

鷺鷥

湯山限近、又は唐ヶ谷、小貳川邊に來ると云ふ、此地方では「ケイツグリ」と云つて居る。黒燒は淋病の藥になる、脂肪あぶらは刀の錆留になると古老の言である。

鶴型目

鷺亞目

鷺科

七四「じゐさき」 *Nyctox. myctcorax myctcorax* (L.)

五位鷺、星五位、有黒五位

夏、秋の頃、彦山町に泊つて居ると、町の上空を「ワツ〜」と鳴いて通る鳥がある、即ち五位鷺で此地では訛つて、「ゴヨサギ」と云ふ人もある。昔は麓の杉山などに澤山營巢したこともあるさうである。尤も昭和十一年五月には田川郡赤村に數百の此鳥が蕃殖したのを調査して報告書を作つたことがある。

七五番 まいは Gorsachius. Gaisagi (Temminck)

溝五位、山五位

英彦山に鋸挽鳥、或はウメキドリと云つて恰度鋸で樹を挽く様な又聞きやうでは人の呻吟する様な鳴聲の鳥が居ると云ふので調査すると夫はヤマイボであつた。肥後の五箇莊では此鳥を麥搗鳥と云ふ蓋し麥を搗く時の掛聲に似て居るからであらう、五位鷺より小型のちよつと赤味のある鳥である。

雁 鴨 目

雁 鴨 亞 目

鴨 亞 科

七六番 がも Anas platyrhyncha platyncha (L.)

真 鴨

英彦山に鴨が來ると云へば何だか變に思はれるけれど區域内には池もあり河川もあるから水禽の飛來するのも無理はない、大宇深倉の吉木川は年々青頸(マガモ)が來て浮び遊んで居ると同地の有志の話である。

七七番 しどり Aix galericulata (L.)

鴛 鴦

落合の二俣から彦山町の方に登る途中に唐谷(通稱、南條落し)と云ふ處がある此處は樹も茂り溪流も流れて居て、よく鴨(つば)などもつく處であることによくオシドリが來て椎や檜の實又河

中に降りては水棲昆虫の様々のものを漁つて居る。大正十二年禁獵區設定以來年を遂ふて増加渡來するさうである。

鋸齒鴨亞科

七八、かはいさ *Mergus merganser merganser* (L.)

鋸齒鴨

湯山に行くくと齒があつて頭に黒いトツキンのある鴨が來るとの話があるから調べて見るとカハアイサと云ふことが判つた。

鷺鷹目

鷺鷹亞目

鷺鷹科

蒼鷹亞科

七九、つみ(雌)あつさい(雄) *Accipiter gularis* (Temminck & Schlegel)

雀鷹、雀鵠

此地では雀ダカ又はハヤブサなどと云つて居る。彦山町附近で雀などを追ひ廻すことが多いので雀ダカなど云ふのであらう。

八〇、このり(雄)はいたか(雌) *Accipiter nisus masismilis* (Jickell)

鵠、兄鷹

彦山村(山手にあらず)の某家に鷹の標本があつた。これは此村で或る狩獵者が鴨を追つて來

たのを捕つたもので小學校の先生の手で剥製したものだと思ふ。見るとコノリである。勿論これは平坦部で捕獲したものであるが、山地にも多分來ることと思ふ。

鷺 亞 科

八一の す り *Buteo. bateo japonicus* (Temminck. & Schlegel)

土 豹 鷲

此地方では専ら「ノブク」と云つて居るが尤も此方言は汎く使はれて居る。野河豚か野鼻から來たものと思ふ。彦山村の平坦部榎の木などで圓く膨れた姿をよく見る。

八二の し は *Buteo. indicus* (Gmelin)

鵞 鳩

昭和二年の五月であつた。津野村大字上津野の松の木にとまつて「キンミー」と鳴く鳥が居るのでよく見るとサシバが巢を營んで居た。鷺に縁の近いとりで樹上にとまつて居るのを遠くから見ると前額の白い部分が目立つて見える。

八三の ひ *Milvus. lineatus lineatus* (Gray)

鷲

彦山村では方言トンビと云つて居る。秋晴天の日など琴ノ茶屋障子岳の上空など何十羽と云ふ群が思ひくの圓を書いて舞ふのをよく目撃することがある。此地でもよく雞の雛をさらふことがあるので大に嫌はれて居る。夫で鷄雛が死んだのをウケ(魚)を捕る籠に入れて鷲を生捕にすることがある。普通トンビは「ピーヒョロ、ヒョロ」と鳴くが此地の人は「ピーヨロ〜」

と譯して居る。鳶の剝皮は苗床などに吊して、害敵の威し(案山子)に使用されて居るのを此地でも見受けた。

鶉 雞 目

雞 亞 目

雞 科

八四「きつしつぎ」 *Phasianus versicolor kiusimensis* (Karoda)

九州 雉 子

彦山の人に雉子の話を聞くと、近年著しく減少した、然し夫でも禁獵區の爲めか此二三年又各所に雉子の「ケン〜」「チョン〜」を聞く様になつた。殊に障子岳、鷹巢原、三呼峠及び中道の邊りでよく目撃することがある。嘗て禁獵區の標識検査の時此地方で雉子の足許から飛び立つた時、吟じた駄句がある。

「禁獵の標木白し雉子の聲」

八五「あかやまどり」 *Grophophasianus soemmeringii soemmeringii* (Temminck)

赤 鸚 雉

英彦山でも雉子は大變少くなつたが、ヤマドリは今でも相當に見受ける。殊に濶葉樹林の附近に多く、四五月頃になると雑木林の中に産卵して居ることがある。藤の實やネムノキを好み、普通「クククク」又は「チョン〜」「雉の夫よりも少しチャシテ」と鳴くが此地の人に聞くと物に恐れた時などは頭を擡げて「カッ〜」と鳴くことがあると云ふ。

八五、つ　　ら　　Coturnix coturnix japonica (Temminck & Schlegel)

鶉

彦山町の裏手の花見岩や、其他、焼畑のある谷々に棲む。蕎麥の收穫後そのコボレによくつくさうである、勿論ここでは蕃殖しない様で秋になつて渡つて來るものらしい。

鶉 型 目

秧 鶏 科

八七、く　　ゐ　　な　　Pallus. afaticus indicus (Blyth)

秧 鶏、水 鶏

落合の老人達から「田圃や溝渠のウド(空洞)又は石垣が破損して出來た空洞などによく匿れ、体は茶と黒のキチ／＼の色でミンサザイの大型とでも云ひたい恰好の鳥が居るが何と云ふ鳥か」と問はれたことがある。大きさを聞くと鳩よりも少し小さいと云ふのでそれならば「クキナ」に間違ひないとして序に他のクキナの類も併せて説明したことがある。

鶉 型 目

鶉 亞 目

田 鶉 亞 科

八七、た　　し　　ぎ　　Capella. gallingo radder (Buturlin)

田 鶉 鳴

深倉や落合に行くと俗に鱈取と云ふ鳥が居る、嘴が長くて、鱈をよくとり「ギーギ」と鳴いて飛

び方も相當速いと云ふ、之は勿論「タシギ」のことで、余も一度刈田の跡で見たことがある。

八九やましぎ *Scolopax rusticola rusti cola* (L.)

山鳴、ボトシギ

英彦山ではヤネキジと云ふて居る、(ヤネとは藪の意である)以前は相當多かつたのでよく毘で捕つたものだ。と老人達は話して居た、谷々の開墾地などに時々來て長い嘴でミミズなどを捕つて喰ひ、又嘴を土中に突き入れて尻つと不動の姿勢をして居るのは此邊の人もよく見て居る、他に鳴聲もあらうが「グググ」と鳴くやうである、眼が頭の頂近くにあることと味のよいと云ふことは此地の狩獵家の話の種である。

鳩 鳩 亞 目

鳩 鳩 科

地 鳩 亞 科

九〇きじばと *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham)

雉 鳩

此地で單にハト又はジバトと云ふのはこの雉鳩を指して居る、十月中旬頃になると中腹の森などにトト、トウ、トウ／＼などの鳴聲を聞くが此地の人に眞似させると「トテツポツポ」などと云ふ、秋になると、谷の山田に來て稻の落穂を拾つて居るのをよく見る。

樹 鳩 亞 科

九一あをばと *Sphenurus sieboldii sieboldii* (Temminck)



参 照 *Tetrax tetrax orientalis* HARTBERT に 接 して



*Tetrax tetrax orientalis* HARERTT

# 珍鳥 *Tetrax tetrax orientalis* HARTERT に就て

調査委員 安部 幸 六

は し が き

鳴なやう鶴しよ千鳥類の渡來地として有名な九州有明海の沿岸で未だ嘗て日本内地で捕獲されたことのないと云ふ珍鳥がはしなくも此地方狩獵者によつて捕獲された。夫が廻り廻りて余の手に入りをして正体の判る迄の經路は次の様である。

## 一 標本入手の經路

昭和十五年二月二十一日と云へば恰度酉の日で福岡縣下柳河獵友會の總會で同會から講話を依頼されて出席した。すると會員の一人山門郡城内村の狩獵者柢島武俊氏は余に向つて質問して曰く、私は先日珍しい鳥を撃ちました。鳥のことに委しい誰彼に見せたが其名前が全然判りません。鳥は鷄の雌の如く羽色は彼様彼様と然し空で色々話を聞いても想像がつかぬので其實物を拜見したいと要求すると其人は快諾直に自轉車を騙つて持ち來たのは不完全な剝皮であつた。取り上げてよく見ると逆も珍らしく何れから考へても内地産の鳥ではない。そこで貰ひ受けて歸り、圖鑑などにより調べて見たが愈々不審の點が多く迷つたので恰度他用の序もあり鳥類分類學者として有名な大阪の榎本佳樹氏に此事を照會

した。すると同氏より實物が見たいとの事で早速件の剥皮を送ることにした。其回答は意外にも次の様である。

## 二、榎本佳樹氏の回答

自分の鑑定によると日本内地では恐らく未だ標本はいざ知らず捕獲されたことはないと思ふ兎に角珍品だ學名 *Tetrax tetrax orientalis* HARTERT 英名を *Eaterns Little Bastard* と云ふ鶉(野雁)科の類で頗いて余をして名稱を付せしむるならば「ヒメノガン」と云ひたい。そして調べて見ると此鳥は標準より小型で、殊に嘴の短小なこと及び胸部の横斑が密在してゐるところから考へて、どうも雄の若鳥らしい。兎も角、珍品中の珍である。何とかして日本鳥學上、參考標本として、例へ不完全でも保存の方法を講ぜられたいとの意味の、懇篤なる書面に接した。何分にも喉から肛門迄切開してあり、脂肪が非常に多いので、作製は困難であつた。而して此の標本に基き測定すると次の様である。

## 三、標本の測定觀察

△頭上は淡茶褐色に幅廣き黒色斑點があり、背は淡茶褐色に黒色の蟲喰狀點斑が密在し、各羽の黒色軸斑は、端末に至るに従つて、幅を増してゐる。肩羽も同様、上尾筒は白色で内瓣に、黒色蟲喰狀點斑がある。而して左右各一列の外側羽の幅廣い白色先端部が、連結して尾筒全体の兩側に白縁を形成し、又其白部には、其の下方にある黒色横斑が透して見へる。

頬と耳羽は灰白色で、細い黒色縦斑があり、腮と喉も灰白色で、疎に黒色斑點がある。前頸の各羽は白色の地色に兩瓣とも黒色横斑がある。胸は白色の地に黒色横斑があり、腹部は白色

である。脇は白色で間隔の廣い黒色横斑がある。下尾筒は、白色に黒色横斑がある。

小中雨覆の各部分、内方大雨覆の一小部分のもの、及三列風切等は、淡茶褐色で、黒色の横斑、蟲喰狀點斑及軸斑等があつて複雑である。小中雨覆の各一小部分、初列小雨覆及次列大雨覆の大部分のものは白色で、何れも黒色横斑がある。次列風切の大部分は白色で基部にある黒色横斑は、大雨覆の爲に隠され、先端近くに黒色點斑がある。内方四列の初列風切と、内方三枚の初列大雨覆は、何れも白色で基部は淡茶褐色を帯び、先端は白色で、且つ先端近くに、黒色の横斑がある。外方五枚の初列大雨覆は暗褐色で、基部と先端とは、淡茶褐色を呈し、外縁に淡茶褐色の斑がある。外方五枚の初列風切（かきき）も、前者に似て居るが、基部は純白で、先端の茶褐色部がなく、其中の外方三枚の各外瓣には、茶褐色と暗黒色の混斑からなる不判然な横斑があり、各羽の白色部は内方羽となるに従つて範圍を廣め、遂に第五羽では、先端の小部分だけが暗褐色であるに過ぎない。裏小雨覆は白色で、淡黒色の點斑がある。内方五枚の初列風切裏面は白色で、先端近くに淡黒色横帯があり、外方五枚の初列風切裏面は白色で、先端部は灰褐色である。翼を折疊んだ際、風切羽は殆んど大雨覆と三列風切に覆ひ隠され、只僅に初列風切の小部分が、場合により現るることがある。

尾羽は黄白色で、黒色の蟲喰横斑があつて、それ等諸斑は、外側羽となるに従つて細くなつてゐる。而して、尾筒外に現れてゐる横斑は二條である。

嘴は褐色で、先端部黒く、下嘴基部は淡色。脚は淡褐乾燥で、趾と關節は暗色。虹彩は不明乾燥(?)である。尙鳥体を測定すると、全長約四四六耗、嘴峰二〇耗(會合線三五)翼長二四五耗、尾羽長

一一三耗、附蹠六四耗、腿の裸出部約一九耗、中趾四〇耗(爪八)、外趾二九耗(爪六)、内趾二五耗(爪七)、嘴高一〇耗、第二、第三初列風切最長で、第一は一六耗、第四は二、第五は一六、第六は四六、第七は七〇耗、短い。外側尾羽は中央尾羽よりも二五耗、短い。翼を折疊んだ場合翼端と尾端の差約三〇耗。

#### 四、捕獲者の言

尙捕獲者、福岡縣山門郡城内村奥州町柗島武俊氏につき左記項目に洵り質問すると次の様に答へられた。

一、捕獲場所 (山門郡西宮永村彌四郎) 周圍五—六町の麥田の中央

一、海岸迄の距離 捕獲せし場所より約二千米。

一、捕獲期日 昭和十五年一月四日午後三時三十分頃、一月頃の氣候としては幾分暖い感じのする天候で風はや、北西の微風の様でした。

一、捕獲せし模様 クヒナを取る爲、犬を使つて小さい堀端を歩いてゐますと、麥畑の中央に何かしきりに食つてゐる鳥を見出し、急に五號彈を詰め、進みました處、四十間の處で飛び立ちました。最初は「カモかな」と思ひましたが、眞鴨マガモの飛ぶ速力より遅く、翼が餘り白い斑らでしたので、次に考へたのは、大シヤクか知らんと思つてゐますと、凡そ百間餘も飛んだでせう、再び麥田の中に着陸しましたので、再び鳥を目當に一直線に進み、今度こそと思つてゐましたが、亦四十間餘のところまで飛び立ち、今度は五—六間程で着陸しました。幸にも今度の場所は二五—二六間の手前に、小さな笹藪が有り、好都合でしたので、其の蔭から

麥田の中に何か食つてゐるところを、第一彈を發射しましたが、命中しなかつたのか又飛び立ちましたので、第二彈を浴びせましたところ、三〇―四〇間も飛行してから、亦着陸。今度こそと、着陸附近迄進んで見ましたが、飛び立ちませんので、犬を使つて見ましたら、最早や畔の中に絶命の様でした。犬が直ぐ咬へて來ました。

一、別に連れもなく、唯一羽でした。

一、肉の味 肉は鶏の様で美味でした。

一、砂囊が鴨等に比較して非常に大きく、亦普通の鳥の砂囊の様に硬くなく、寧ろ軟い方でした。

一、砂囊内には麥の芽を食つてゐたものと見えて、澤山の青物が入つてゐました。云々

## 五、結 び

此鳥の名稱に就ては、榎本氏の主唱に拘る「ヒメノガン」が適當として、斯界の權威雜誌「鳥」にも此名で紹介せらるゝに至つた。而して如何に迷鳥とは云ひ乍ら、我福岡縣より此珍鳥を捕獲したことは聊か誇であると思ふ。尙余は筑後地方獵友會其他の席に臨む度毎に此鳥を説明し今後の注意方を促してゐる。標本は其後鳥學界の權威侯爵黒田長禮博士より御懇望があり差上ぐることにしたので、現在は東京赤坂の御本邸の標本室に飾られてゐる。標本の保管上から見ても大いに喜んで居る次第である。

終

彌永の壹里塚松



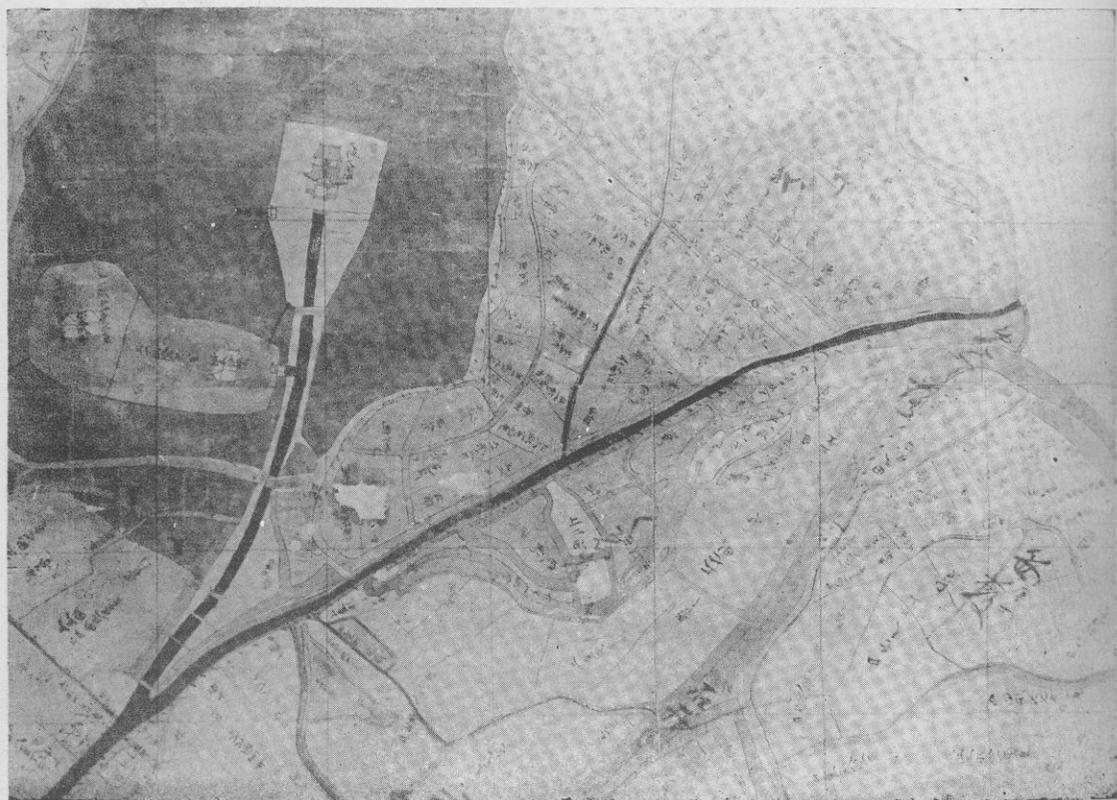
一里塚松（北方より撮影）向つて左方は竹林なり



一里塚松の根部を示す（道路側より撮影）後方は竹林なり



縣社大己貴神社々寶の繪馬



縣社大己貴神社々寶（秋月藩測量師土井松之介の作りたる分間圖）

# 彌永の壹里塚松

調査委員 荻原武平

一、樹種 くろまつ

一、調査年月 昭和十三年十一月五日

一、所在地 朝倉郡三輪村大字彌永字谷口

二日市町と日田町とを連ぬる道路に添ふて朝倉軌道を架す、その要衝甘木町より少し西に當れる依井部落より折れて東北方秋月町に向ふ街道を行くこと凡二軒ばかりにして彌永村と安川村との界に達す。

壹里塚松はこの村界附近にありて本秋月街道に添ふて生育せり。

一、樹相

樹高 二十一米九六

目通りの樹周 六米二四

地上四米の所にて 凡五米あり

根廻 十五米一二

一、枝張

彌永の壹里塚松

地上凡五米位の所より東西の二大樹幹に岐れ、その東方のものは地上凡十一米迄は概直立の相を保てどもそれより上は著く東方に傾き十五米の高さにて又々上方に伸ぶ、このあたり分枝最も多く、概東方を指したり。その頂端は本樹の最高二十一米九六を示す。西方の幹は始めより稍西方に彎曲し地上十二米にて、著しく分枝をなして上方に向ひ最高は二十一米〇六にして本樹第二位の高さを保てり。

兩幹とも下方十米位までの枝は大小にかゝはらずその殆んど伐り採られ、上方のみは枝葉繁れども下方は淋しく一般の風致いたく損傷せられ、かゝる老松名木に對しては寧ろ然たる感を深くするものなり、その西方に延びたる最も長さ枝はこの街道を越して民屋の屋根乃至は庭に迫りて、餘命を保つも何時切り取られぬとも定められぬ運命にあり。又東方は根元より三間餘にして土手となり、その斜面には孟宗竹生ひ繁りその間に柿、樟等を交へたり。さればその方へ伸びんとするも延ぶること難く、偶々延びたるものは總伐採の厄に遭ひたること寫眞に示すが如し。

以上述ぶるが如く本樹は東西にその枝を多く岐てども南北の方向には少く然も多くはその先端概枯損したり。

## 一、根

傳ふる所によれば往昔壹里塚上に移植せられたるもの、由なるも今は塚らしき面影は少しもなく、根は地上によく表はれその盤根錯節、廣き地面を擁して廣りたる様は蓋し一偉觀とも云ふべし。

然れどもその街路に面する方は道路改修の都度大部分切斷せられて、多くは深く腐蝕し空洞をつくれり、

## 一、史 實

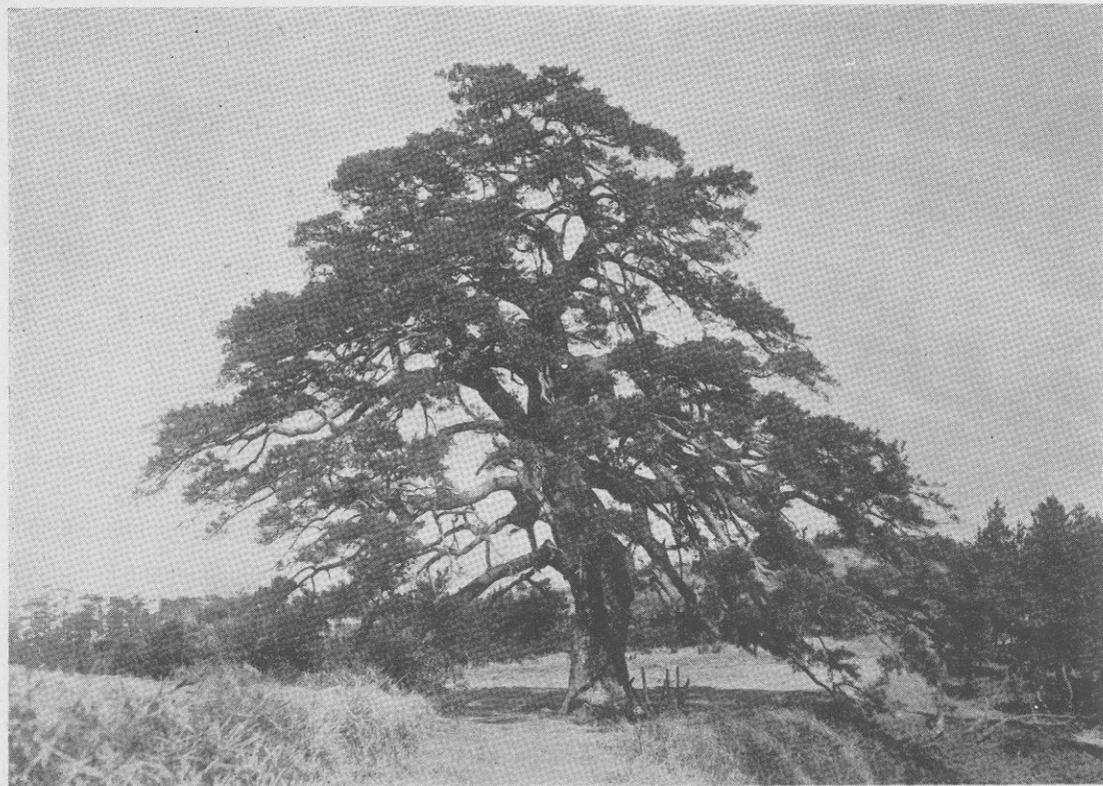
藩政時代秋月藩にては秋月松崎間を結ぶ道路上に秋月町の西端女男石を起點として一里毎に一里塚を築きその上に松を植ゑたるものにして、當時は道を挟みて東西二基の塚ありたるがいつの世にか一方は壊滅してその西側のみとなり、更に明治十四五年の頃の塚上の二樹のうち北側のもの取除かれ、南側の一株のみ殘置せられしものが現存の松なりと傳ふ。附近の縣社大己貴神社に秋月藩總帥齋藤秋圃の献じたる繪馬あり、その昔一里塚の松の狀況を髣髴せしむ。

## 一、保存につきて

本樹はその巨大なる老松たる點に於ても、又歴史上より見るもその保存の必要と價値とを感ずるものなり、故に是を天然紀念物に指定せられ永く保存されむことを望む、現状のままにては漸次衰滅に傾き枯死の虞あるを以て先づ東、南方の竹林、雜木の伐採を要し、出來得べくんば四周柵を圍らして附近にての焚火其他老松の生存を傷くる如き一切の行為を禁じ多少の利害は忍びて枝條を徒に切り取る事なき様切に望むものなり。

摺筆するに當り本調査に關し三輪村當局の方々より種々御便宜を御與下されたる點につき感謝の意を表す。

有毛の傘松



昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可濟

本調査以前の有毛の傘松

# 有毛の傘松

調査委員 萩原武平

一、調査月日 昭和十三年五月一日

二、所 在 若松市大字島郷字有毛

若松市若くは折尾驛より發する岩屋行バスに投ずれば有毛部落を通過す、その停留所にて下車すれば十字路となり居る故枳殼の生垣に添ふて西す。松林の間に點在する民屋あり道は緩かなる坂道にかはり小松の密林の傍を過ぎ行くこと凡一籽にして林は拓かれ葡萄畑、麥畑等あり、その間を曲折して進めば前方に凹字形の丘陵を望む、その凹める中央に頭のみ見ゆる松こそはこれより調査せんとする傘松ならんとの豫感を抱かしむ。やがて峠の頂に達すれば凡百米許り離れたる前方の低地に件の傘松は悠然と枝條をわがち千年の翠を湛えたり。

## 三、附近の狀況

砂丘かとも思はるゝ如き丘陵性(海岸より此所まで凡一籽位なりと云ふ)の砂地にして松の附近は浸蝕のため、今通りたる峠の頂より少し西偏したる低地にある故、東より來れば松にとりては見下さるゝ位置にある故、稍その偉風を損殺せらるゝの感あり。

樹根より南へ四米許りにして高三米の崖となり、それに續きて南斜面の緩傾斜の麥畑二枚ありてこれを越ゆれば峽間に湛ふる狭長なる池となる。

樹根より西は東と相對する如き高地となりみな麥を栽培する畑地なり、北は低平の地少し續きて蔬菜を植うる畑なり。道路は東より來れば樹根より凡十八間余にて北西に轉じ松を左に見て西し、山鹿、蘆屋方面に通ず。

附近高地は倭小なる樹木の林地をなす故この松はまさに群小樹木に對し君臨するの概あり。

樹下には二條の針金をひき廻らしたる柵を設けて東の一方の入口より外の出入を禁じあり。

尙樹根を去る數米には圓形に八基のコンクリート角柱を建てつなぐに太き鐵鎖を以てし、一つは保護のため、一つは美觀を添ふる爲めにせり

尙樹下外柵内にはコンクリートのベンチ二脚ありて休憩に便し、地藏尊の祠を安置して附近の神聖を保てり。

#### 四、樹の狀況

|                 |    |       |
|-----------------|----|-------|
| 1. 樹            | 種  | くろまつ  |
| 2. 樹            | 高  | 十四米七三 |
| 3. 二米の高さにての樹幹の周 |    | 五米一餘  |
| 4. 根            | 廻り | 七米二七餘 |

## 5. 枝 張 り

樹幹は殆んど圓柱狀にして地上に直立し地表七米餘にて枝をわかつ、樹皮も大きく龜甲型に割れ、その老齡を思はしむ。

### a. 東方の枝

下より數えて(以下準之)第二枝は地表七米餘にて凡周圍二米餘の大枝なるが昨年の大暴風のため無慘にもその分岐點より折れて眞直ぐに垂れその先端は地につき太き支柱を建てたるも全枝枯れて、二三の小枝には茶褐色の針葉をつけたるは憐れにして、これが爲め樹容は大に損はれ麗人の抜け齒を見るの感あり。

第一枝はこの第二枝に接して出てたるも何時の頃やらんこれもその着け根より折れ、折れ口を北に向けたるが空洞となりたる爲めセメントを充填して防腐したる跡見ゆ。

### b. 北方の枝

第三枝は一抱ひ程の枝なるが下垂して斜に下り樹根より六米余にて先端は地につきこれを便りとして樹幹にまで登ることを得べし

第五枝は生存せる枝のうち最大なるものにして地表八・五米の所より岐れて上昇して枝をわかつこと五六、その先端中南方に偏して立てる小枝は本樹の最高點にして十四米七三は茲を計測したるものなり。

その本幹と分岐する所に蔓性の小植物を生ず、なつたならんか、本枝より稍上りた

る所に西北方を指して緩斜して外柵を越し人の頭に接せんばかりに延びたるは最も長き枝にしてその先端は樹根より水平に測りて(以下皆なこれに準ず)十三米六四あり、これに平行して西方に走るもの先端兩分しその北方のもの十一米二一、南方のもの十米六に及ぶ。

## c. 西方の枝

第六枝は西方に向へるもの、隨一にしてその先端近くに至りて枝を分ち外柵を越して麥畑の上のび麥穂を壓せんばかりにて樹根より十三米〇三に及びたり。

## d. 南方の枝

地表九米五の邊より南を指してゆるく下垂せる長枝は樹幹より五六米の所にて二分して平行に東西に並びその先端は崖を越して前方にのびひろがり、樹根よりも却つて下方に及び、これも麥穂に接せんばかりにて終る樹根より西側のものは十二米四二東側のもの九米一に及びり。

## e. 本幹の先

本幹は第五枝を出してよりはその太さを減じて稍南に偏じ南方への大枝をわかたあたりより更に直上の形に復し地表十一米五附近にて二分岐をなし、一つは南方の方へ枝を分ち一つは主として北に延び中細枝は枝を交へて綠葉をつけ第五枝の先端とその高さと同様とを競ひたり。

## 五。結

## び

本樹はその樹相より見て何となく老年期に入りたるやの感あるのみならず、所々に白蟻の侵入し居るの形跡を認むるにより適法を講じて、その驅除を完くせざらんには案外早く枯損するの虞なしとせず。

しかも樹根の分るゝあたり東方より南方に樹をめぐりて長さ三米深さ深き所は〇・八米幅の廣きところに一米に及ぶ穴を堀りあり、何の爲めなるや不明なれども、樹を愛する所以にあらざるなり。

## 六、附言

### a. 縣の標柱

外柵東方の入口左側に縣の標札を建てたり。曰く

□ □ □ □ ノ 傘 松 (□ □ □ □ の所文字抹消しあり)

幹圍十七尺餘蟠曲シテ空ニ聳エ梢頭ヨリ枝ヲ四方ニ垂レテ廣ク地面ヲ覆フ傘松ノ名之ニ依ツテ起レリ

幾百年ノ風雪ヲ凌ギテ樹勢旺盛翠綠尙濃カナリ環境ニ順應シ極度ニ發育シタル松ノ代表的巨木トシテ又造花ノ技巧ヲ現ハシ時美ノ觀ヲ示セル名木トシテ推稱スベキモノトス

幹ヲ傷ツケ枝ヲ折ルコトヲ禁止シ根ヲ踏ミ固メズ火氣ヲ近ヅケザル等保護ニツキ注意アリタシ

昭和八年六月

福岡縣

b. 口 碑

附近古老の言を徴するに現在の傘松の傍には猶古き松樹ありたるも何時の世なりけむ枯れ果てしそれより若き松一もと残りたるが今の松なりと云ふこの里輪の人々のうち還暦古稀喜壽米壽等の齡に達する時は昔はその賀宴はこの樹のもとにて催され法螺貝の中にて飯をかしぎて集れる人々に頌ちその齡さらに千年の翠をかへぬこの松にあやからむことを願ひ集へる人々も亦その長命をこの松に祈願し過ぎ越し方の思ひ出など打ち語らへて互に喜び互に祝ひたりと云ふ。

安  
康  
の  
松



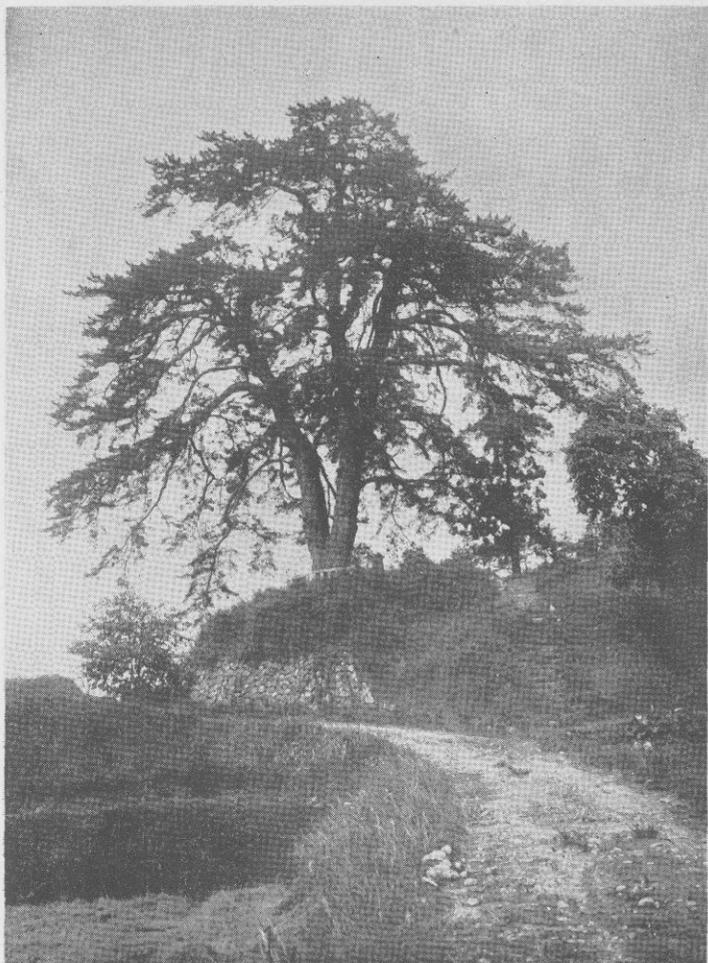
昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可濟

(一)西方 約五十米の地點より撮影 (右方は八所神社の森)



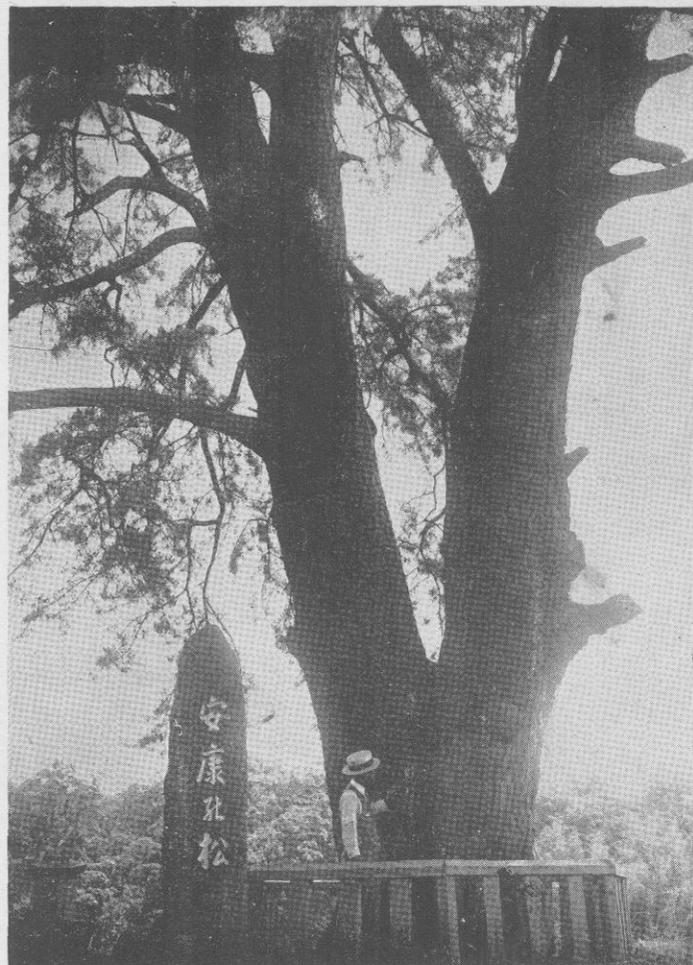
昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可濟

(二) やゝ南西の道路上より撮影



(三) 東方より撮影

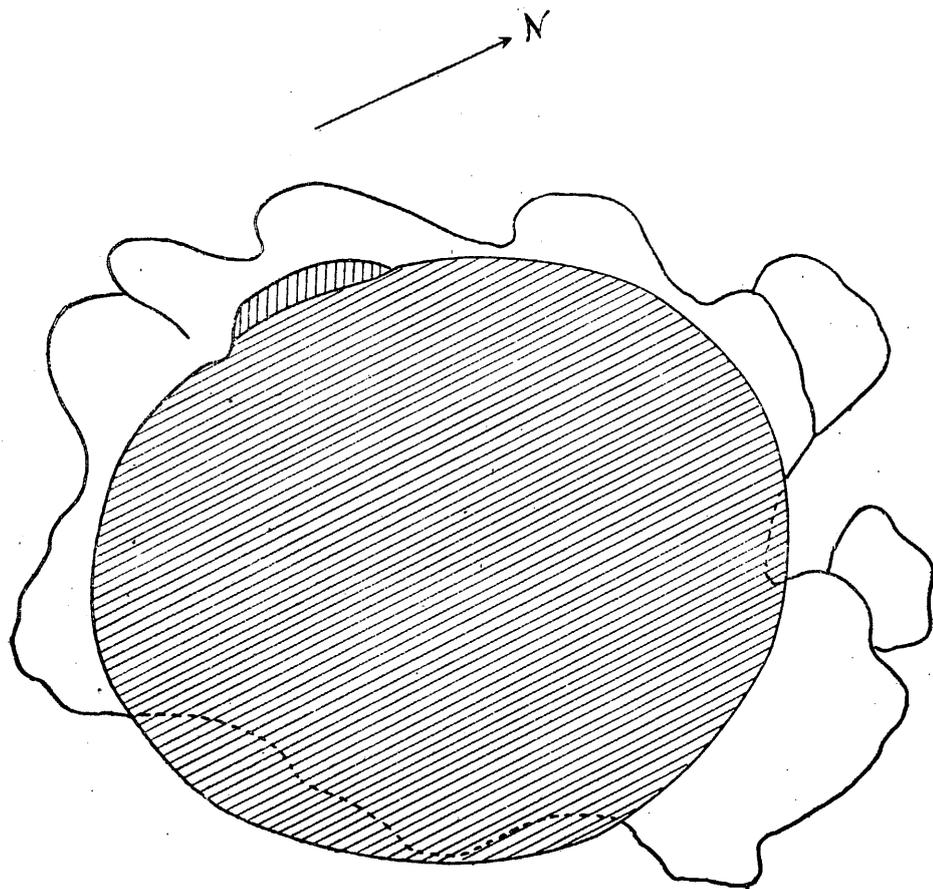
昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可済



昭和十七年九月十九日下關要塞司令部許可済

(四) 大分岐點及南幹切斷枝の狀況を示す (四圖とも山下龍男氏撮影)

根廻り及目通りにての想像断面見取略圖



# 安 康 の 松

調査委員 荻 原 武 平

一、樹 種 ころまつ

一、調 査 月 日 昭和十三年五月二十二日及六月十六日

一、所 在 地 宗像郡吉武村字宮の尾

鹿兒島本線赤間驛に下車すれば驛前より卅分乃至一時間毎に吉武村行の西鐵及舞鶴バ  
ス運轉する故、その何れかに投じ吉武村役場前にて下車するを便とす。それより稍西南に  
建てる八所神社の額を掲げたる花崗岩の大鳥居をくゞりて、附近小部落を貫く道路を東  
北にとれば凡四町位にして道の左側小高さ臺地に安康の松は毅然として天を刺す如く  
聳え立ち實に壯觀を呈す。

## 一、附近の状況

道路より壞れかゝりたる石階十數段をのぼれば、松のある臺地に達す。廣さ凡二畝半位の  
稍方形の地積を有し概平坦なり。

松はその南東端に位し樹幹より凡五〇糎離れて八角形の花崗岩の玉垣を繞したり(周圍  
十二米三)

又これに接して西北方に高さ二米位の石碑あり、海軍中將飯田延太郎閣下の染筆にかゝり表には筆太に「安康の松」と記し、その裏面には「社記に曰く、安康天皇二年二月十日勅使中臣の俊盛八所宮御社參の砌御手植ありしを以て安康の松と稱す云々、昭和五年庚午六月建之」とあり尙東方八所神社の方向に下る石段の際には小祠を安置しあり。

この臺地は南と東は崖にして南方は高さ一間の石垣を積みその上に法に添ふて計れば三米餘の高さを持つ急なる叢地あり、松はこの端縁より約二米離れたる所にあり、この崖の附近には樹根の露はれたるものなし。

東方も急傾斜の叢地にして石階を以て道路に通する有様は寫眞三に示すが如し。

北方は丘陵に續き松に向つて傾斜し時に畑として利用せらるゝと覺しくさしたる樹木もなく赭土を表はしたり西方は田又は畑に續き、この臺地との間を堀りて北方丘陵に登る小徑を通せりこの附近は樹幹より四五間距り居るが巨大なる樹根所在にその一部を隠見せり。

右述べたる臺地はすべてこの老松のために覆はれ北方の丘陵に上る道の傍に一本の杉の木を見る外喬木は一本もなく老松は遙かなる八所神社の鬱蒼たる森を背景に四圍を壓して亭々揚々たり。

一、樹

相

1. 樹 高

二十五米

2. 二米の高さにての樹幹の周 五米九四弱(十九尺六寸)

想像横断面は南北に長軸を有する橢圓形

3. 一米二一(四尺)の高さにての樹幹の周 五米四五強(十八尺)

右測定は目通りの高さの所には横徑凡一米餘縦徑凡一米三高さ凡四〇纏の瘤ありてその中央を横に測らざるを得ざりし故その瘤の下端即四尺の所を測りたるなり。

4. 根 廻り 十米二四(三十三尺八寸)

5. 枝 張り

本樹は寫眞の示すが如く地上凡二米餘にて南北略同大の二大幹に岐れその北方のものは地上凡六米四にて更に二大分岐をなせども是等三大分岐幹は殆んど南北の方向に一列に並びたり始め二分岐をなせる邊はこれを西方より見るに(寫眞四参照)明に二本の松が結合したるが如き溝を有し且つ樹皮の割れ目も亦附近の瘤のためやゝ右に偏するも殆んど一直線の如く地表に向ひたり。

又東方より見れば西方に見るが如き明にはあらざるも樹皮の割目は兩半の間を上より下りしかも一大龜甲形の樹皮の一劃に切られこれを隔てゝ更に上の線を延長なしたる如く下方に走れり樹根の方には二本の松の結合したと覺しき點は見當らず果してその昔相生の松なりしや否や後の研究に俟つ。(勿論後記松の由緒にある後盛卿の植えられたるものには非ず)今假りにこの三分岐幹に名を附して北方のものを北幹、中のもの中幹、南方ものを南幹と呼ぶことゝすべし。

南 幹

二分岐點より南方に位する本幹は分岐點より上るにつれや、南に偏し地表二米三―四にて二枝を出したるも何れも切斷せられ漸次上方に進むも南及東方を指す枝十四、五枝は皆切斷の厄に遭ひたること寫眞(四)に示すが如し。

これ明治時代の頃八所神社の祭典に際し大なる山車を出したるに、その頃この松の枝に岨まれて通すことを得ざりし爲め止むなく伐り採りたる由にして(この山車は一回ありたるのみにて以後は續かざりしと云ふ)今となりては誠に惜しき事と思はるれども如何とも致し方なき次第なるが、然し全相の美觀上大なる故障とならざりしは不幸中の幸とも云ふべきなり、

幸、西方に向ふ枝は殘されたるが本樹に於ける西方に延びたる最長のものとなり樹基より九米二七に及ぶ。

十二米の高さに至れば、大なる枝は漸次南方に下垂し、下の道路を隔て、南にある田の上までも差しかゝり樹基よりも稍下に垂れ、地上四米弱にて止りたり、その先端は樹基より計測するに凡十五米二三の距離にあり。

十六米にして又二三の大枝を出し十八米にて主幹は南北に二分してその北方に向ふもの本幹の最高をなし二十三米七を示せり。

### 中 幹

假稱南幹の一大分枝にして七米附近より分れてよりは殆んど眞直に伸ぶ、その形南北の大幹に挟まれたるを以て二者に比して稍細く且下方の分枝も少く僅かに十一

米にて大なるもの二三枝を岐ちたるが就中その一枝は本樹として東方へ延びたるもの、隨一にして樹基より十米三六を示し、東方石階よりその東南方叢の上に迫り。

十七米にて二大分し、その北方に伸びて細分せる先端は本幹の最高をなし二十四米の高さに達す。

### 北 幹

南幹より分岐するや一、二小枝を出したる後七米附近にて可成り大なる枝を岐ても衰ふることなく、稍北方に偏しつゝ十一米及十二米に及びて更に大枝を出す、その下方のものは北方にのびて丘陵に續く所に立ちたる杉に達し、本樹枝中北方に向へたる最長のものにして十米三六に及ぶ、このあたりより稍真直になりたる本幹は更に二分して一枝は北に太く出で、細枝をわかつてとも一枝は上方に延び、その頂端は本樹に於ける最高點にして二十五米に及びたり。(寫眞(一)參照)

### 一 結 び

前掲寫眞(一)は樹に對してその西方(二)はや、南西(三)は東方(小橋の附近)より撮影したるものなれども、何れの方向より見るもその形均齊の美を保ち、地上まで垂下する如き雅致に富みたる枝ぶりは示さざれども、何處か若々しき所あつて尙幾春秋翠はいよいよ増り枝も繁りて囊に切除せられたる部分をも補ひ得てその美に於て、その品に於て一段の趣を呈するものとなるべし。

その東及南は人道を繞らせば如何とも致し難きもせめては西方丘陵に登る道路の如きは全くこれを廢止するか止を得ずば今の程度より掘り下げて附近の根を切斷することなく、又車馬等の通行は禁止するを以て可とすべし。

しかも本樹は本縣内にも稀に見る大樹なれば靈松として厚くこれを保護し又由緒ある松として永く保存せられんことを切望す。

### 一、安康の松由緒

人皇二十代安康天皇二年二月十日一神大内に顯はれて人に託して朝廷の禍福吉凶を言ふ當らずといふ事なし元后宮大いに驚ろき給ひ神祇官に命じてかゝり給ふ處の神を伺はしむ。官吏請申して曰く、かく教へ給ふ神は何處の神ぞや願くば其の御名を知らむとおぼすなりと神答へて曰く、吾は是筑紫宗像に住む八所大明神也とこゝに於て天皇感心歸依ましまして幣使を筑前の國に下して始めて當宮を祭り給ふ、正使神祇官中臣の朝臣俊盛祭場に於いて松二株を植ゑて標とし給ふ、今に至つて其の松存す枝葉扶疏し其曲靈美はし冬春異色なく朝暮清風あり寔に神木なりけらし時の人名づけて安康の松と稱す(縣社八所神社縁起下卷より)

安康の松は八所神社鎮座地鶴鶴山正面一町餘の高地飛地境内にありて始め貳株なりしにより相生の松とも稱せしが近代専ら安康の松と稱す。其の容姿何れの方向より眺むるも實に偉大秀麗にして四時異色なく縁起に記されたるが如く寔に神木ならむか。

(吉武村長 花田利三氏)

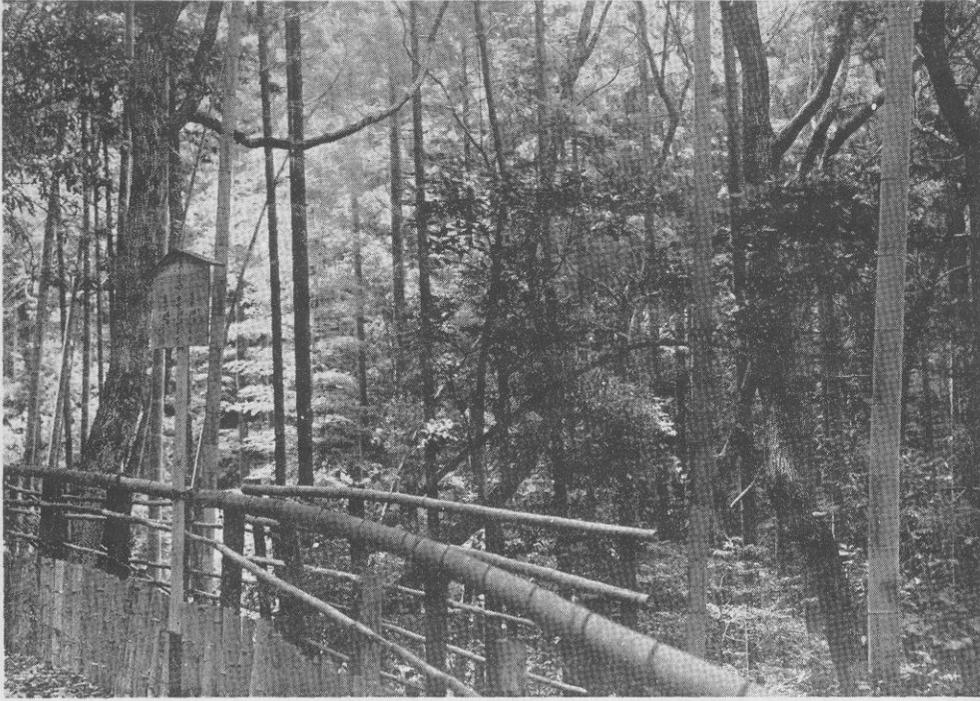
摺筆するに當り「安康の松由緒」御惠送ありたる花田利三殿に謝意を表す。

筑後高良山孟宗金明竹新發生調査

第一孟宗金明竹  
(昭和九年生)

第二竹  
(昭和十一年生)

第三竹(新竹)  
(昭和十三年生)



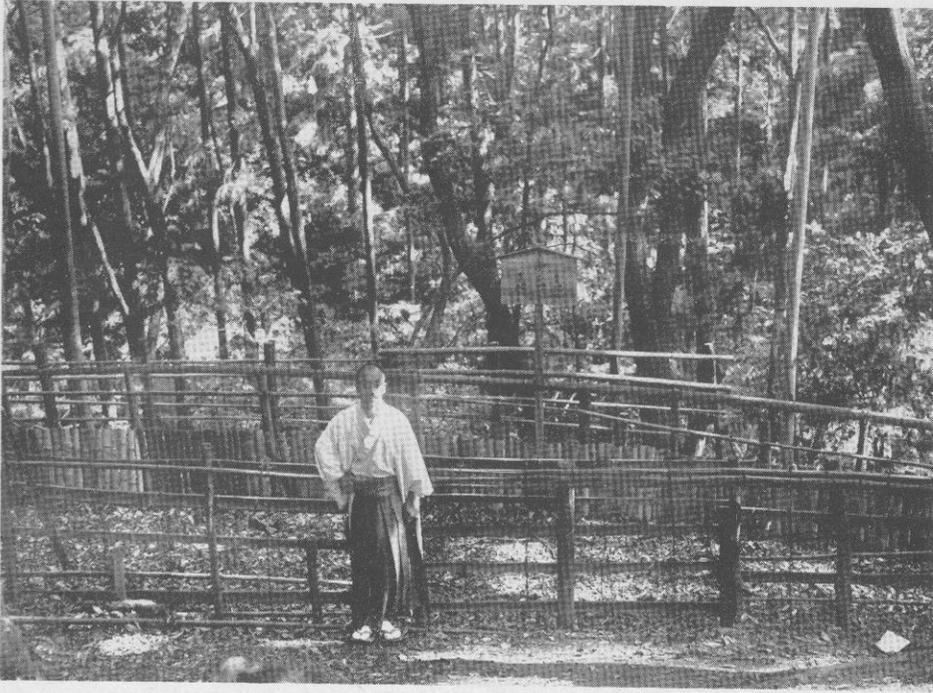
孟宗金明竹の位置と新竹

第一金明竹



←  
地下莖  
(側面に黄線あり)

第一竹と地下莖 (斜面にて)



孟宗金明竹と矢田宮司



枯れたる筍 (本年生にては最大のもの)



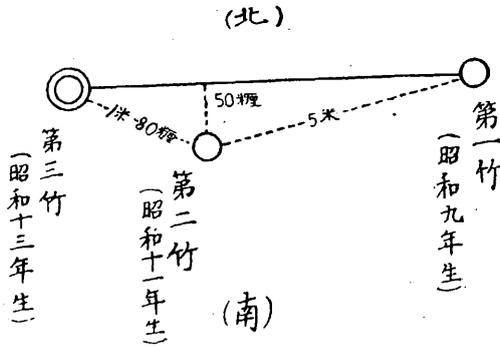
第三孟宗金明竹の程 (新竹)

# 筑後高良山孟宗金明竹新竹發生調査

調査委員 木 下 盛 枝

昭和十三年六月十八日及同月二十七日の二回に互りて、筑後高良山の孟宗金明竹の新竹を調査した。それより以前高良神社より今年新しい竹が發生したとの報告を受け、且又縣廳からも主任川上市太郎氏より調査するやうとの事で十八日現地を調査したが、發生地が木立の中であり、天氣が曇つて來て寫眞をとることが出來なかつたので再び廿七日に再調査を行った。

## 發生位置



福岡縣史蹟名勝天然紀念物報告第十二輯に記載したやうに、高良山の二百五十米位の高さの地に國幣大社高良神社がある。其神社の境内本殿から西南約二町位下れば約二畝歩の孟宗竹林がある。これは社有と民有になつてゐるが、社有竹林の西に約五米離れて第一孟宗金明竹が出てゐると記して置いたが、今年になつては、竹林から發生した新一金明竹に接近して二米位の離れとなつてゐる。この第一竹は昭和九年發生のものである。第二孟宗金明竹は昭和十一年發生のものであるが、第一竹より西に五米離れて發生してゐる。今年發生した第三竹は、第二竹の西北約一米八〇程離れてゐて、第二竹は第一竹と第三竹を連ねた線より五〇程南に出てゐる。(上圖)

發生地は七〇度もあらうと思はるゝ急な傾斜地であるから、第二竹は他の二本より低い所にある。

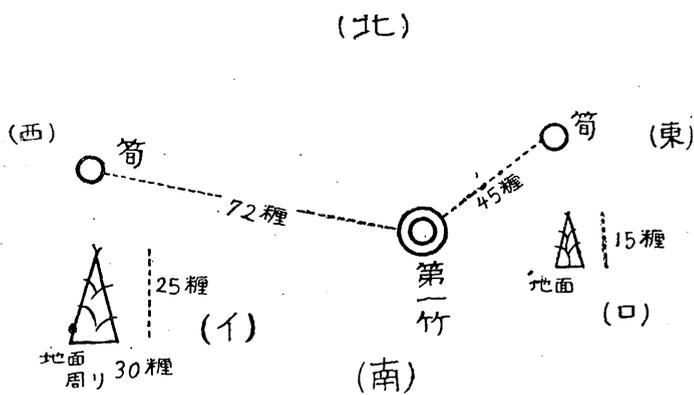
新竹は南に樟が二本高く立ち西に杉の大木がこれも二本真直につき立ち北に樟と檜がある間にあるので上方はこれ等の枝が交叉してゐる。其中に突き入つてゐる爲に幸か不幸かこれ等の枝に支えられてゐる。新竹の側五十二纏の處には檜の小木がある。

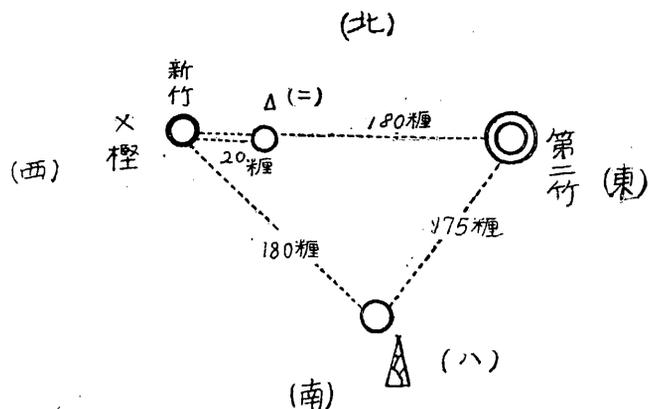
發生狀況

新竹は昭和十三年四月上旬の發生であるが、其當時の筍の發生は第三竹(新竹)一本ではなかつた。數本出て來た。枯れては居るが今も跡を止めてゐるものは四本ある。當時は五本の筍が出た。其中一本だけ發育成長して前記の新竹となつたが其他は最も高いもので地上に表はるゝこと二十五纏他はそれより短くてみな枯れてゐる。

昭和九年發生の竹の附近に出たものは二本あり、昭和十一年生の竹の附近のものは三本ある。位置を圖とすれば

第一竹の西に七十二纏離れて出てゐるものは土面より現れてゐる高さ二十五纏周りは地面にて三十纏であるが枯れてゐる。(上圖イ) 東北に四十五纏離れてゐるものは其高さ十五纏でこれも枯れてゐる。(上圖ロ)





第二竹の附近に發生してゐるものには、それより西北に百八十糎離れて出たものは發育して本年生の新竹となつて元氣に伸びつゝある。南西に百七十五糎、新竹よりも略々同距離に出た筍は高さ二十糎で枯れてゐる。新竹の東、二十糎にも一本出てゐるが、地面に顔をやうやく出したばかりで枯れてゐる。即ち第一竹の附近には二本の筍が全部枯れ、第二竹附近には三本の筍が一本成育して新竹となつてゐる。孟宗金明竹の筍が盛んに出かゝつてゐるので、この筍の枯死せざるやう保護を加へ、發生發育を助ける必要があるやうである。

#### 新竹及新舊竹の比較

調査した昭和十三年六月には、新竹には地面より五十糎位筍が附着してゐた。其數は七枚である。新竹の大きさは地面よりの高さ五十五糎の處で周り四十八糎、節間は十六糎である。目通り即ち一米五十糎の高さでは、周り四十三糎、節間は二十三糎である。孟宗竹の若竹に必ず附着する白粉があり、地色黄に他の金明竹のやうに幅五糎の緑の線が節に交互にあらはれてゐる。他の金明竹のやうに、それと九十度の側面に小緑線のないのが違ふやうであるが、後に現れるものであるかも知れぬが多分出ないだらう。

三竹を比較するに

○大きさは(目通り)即一米五十糎の處で)

第一竹(昭和九年生)は周り四十三糎

第二竹(昭和十一年生)は周り三十五糎

第三竹(昭和十三年生)は周り四十八糎

(新竹) 尙高さは他の二竹より一米以上高い

○綠色線は

第一竹は東西に節交互に幅五糎の廣い綠色線及幅狭き綠色線も見受ける。

第二竹は南北に節交互に幅五糎の綠色線があり、地上七、八、九節には南北に○五糎位の狭

き綠色線がある。狭き綠色線はこの竹が最も多い。

第三竹は南北に幅廣い五糎の綠色線がある外、狭き線は見當らない。

従つて此三竹を西より眺むるときは、この線の有様明かに美しい。

### 地下莖

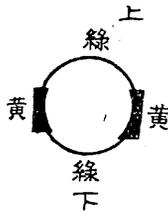
第一竹の發生點より六十度位の斜面下に約二十糎の地下莖が現はれてゐる。やゝ弓なりに

曲つて二十糎位土より半出てゐるので計る事が出来た。地下莖は周り六糎、

節間は四糎で節からは多くの根が出てゐる。色は緑であるが、左右は幅一糎

の黄色の線が相對して通つてゐる。即ち緑と黄とが交互である。地上莖より

地下莖の色が鮮かにして美しい。



### 保護

高良神社は今より壹千五百四十餘年前履中天皇の御宇に創立されたと稱せられ、大正四年十一月十日に國幣大社に昇格され、御主神は高良玉垂命、御相殿に八幡大神、住吉大神がある。高良山は景行天皇の十八年御駐蹕遊ばされ、繼體天皇の二十年國造磐井が此山によつて叛いた事もあり、北條氏の末世から豪族の兵を動かす毎に此山に據り吉野朝時代、肥後の忠臣菊池氏が征西將軍懷良親王を奉じて此山に陣せられたのは史上有名の事である。豊太閤陣營の地も吉見嶽にある。古來九州豪族の興廢は殆んど此山に支配せられたと言つても過言ではない。隨つて神社に武運長久の戰勝祈願が屢々行はれる。著者の調査の折も久留米工兵隊より出征兵士武運長久祈願の爲多數登山された。其他兵士出征毎に部隊長引卒の下に、亦其家族も武運長久を祈願する。この神社の境内にこの美しき竹を發生し、支那事變酣なる本年多數の筍を生じ、其中一本のみ發生成育せしは、不思議と言へば不思議に思はれて、裸參りの松明等あまりに近づけて、此竹にもこの林にも危険を感ずる事多くなつたので何かの方法を以て保護することが急務となつたのみでなく、筍の發生を促す方策を立てたいものである。

(終)

觀  
音  
山  
の  
合  
葉  
の  
松

第一圖版：觀音山の合葉の松の樹相

c

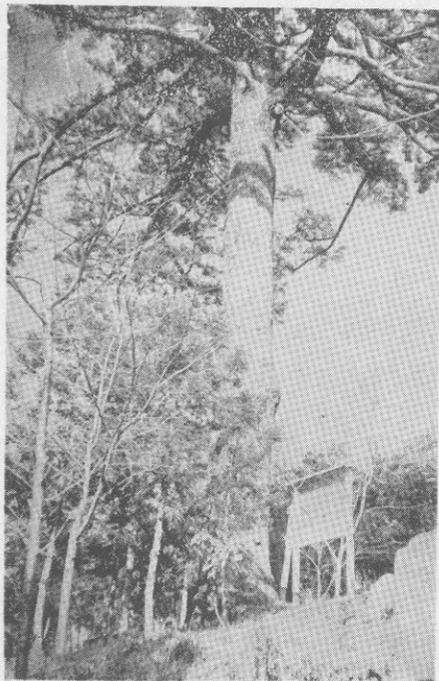


a

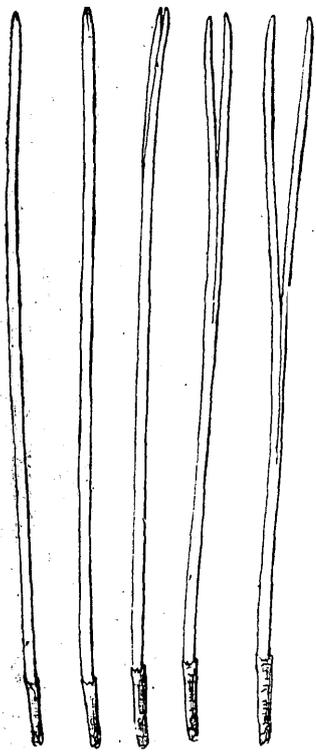


b

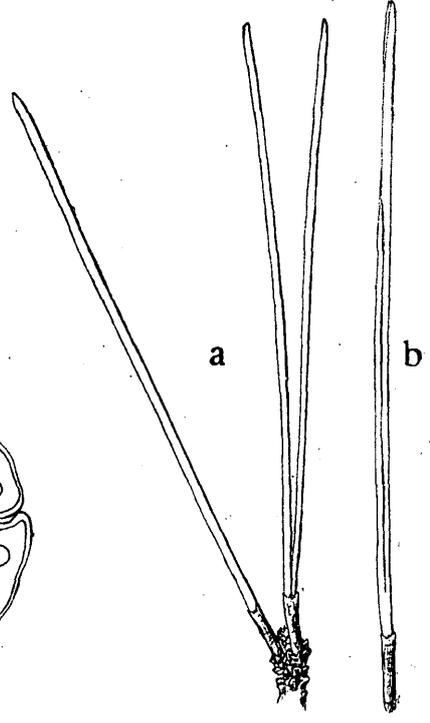
d



第二圖版：觀音山の合葉の松,葉の寫生及解剖圖

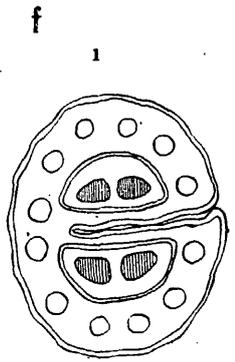


c



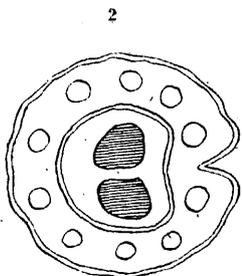
a

b

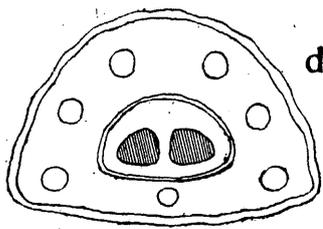


f

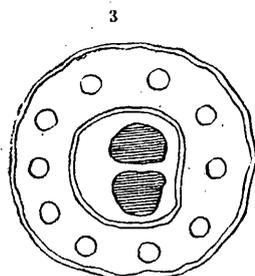
1



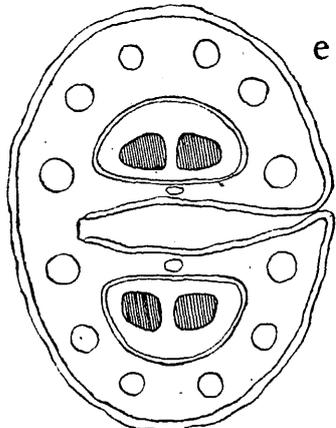
2



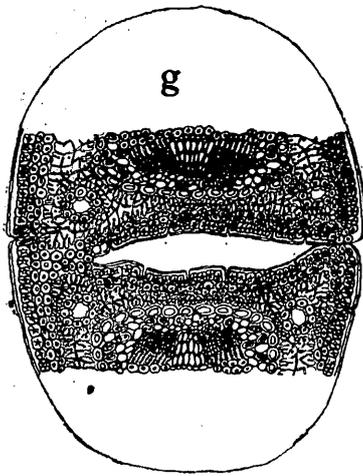
d



3



e



g

# 観音山の合葉の松

調査委員 纈 纈 理 一 郎

## 一、前 書 き

福岡縣筑紫郡安徳村中原観音山は福岡市の中心を南に距ること二里半、福岡平地が南に盡きて脊振山を盟主とする筑肥國境連山の北面裾に接する丘陵起伏地帯にやゝ高く聳えて標高一七〇米の山頂を擁する小山岳で、山頂又は中腹高台地からの展望は甚だ雄大眼下に擴がる筑紫平野を隔てて蔓を連ねる福岡市街をかすめ玄海灘を一望の中に收める景勝の地である。

此處は弘法大師唐土よりの歸朝の途次止錫せられた地と言ひ傳へられ、現在山麓にある観音堂を中心として境内各所に堂宇石佛櫻樹等を配置し、福岡市南部の一靈地として善男善女の隨喜の的となつてゐるのみならず、附近一帯の地に多數の古墳を藏して千古の史實を秘め、山内には奇岩怪石樹蔭に出没し、山内遊歩の廻路に於ける點景の變化に棄て難いものがあつて、福岡よりの一日の漫步清遊の地として屈指の地歩を占めるに十分であり、筑紫の高野山と稱せられる必ずしも僭稱ではないであらう。

この靈域観音境内の中央部に一本の松の巨樹が亭々とそそり立ち、群小の樹木の梢を遙か

に抜いて(圖版寫眞參照)その優雅典麗なる姿を遠望せしめてゐる。これが問題の松であつて、弘法大師唐土よりの歸朝止錫の際に於ける御手植の松と言ひ傳へられ、之に着生する松葉に一種の畸形現象を呈し、二本の松葉が互に癒合して一本松葉の如くなれるもの少なくない。之を夫婦松葉と名づけて弘法大師の加持力によつて夫婦和合の相を現はしたものと隨喜し、更にこの松の現はせる靈驗に關する傳説なども加はつて、觀音山の子安觀音松の名が廣く世に傳はつてゐる。

この松は見たところ普通の黒松と變りがないが前記の如く葉に畸形現象を現はすのと、黒松としては老樹巨木の範に入るのにより、調査の價値あるものと認められたので、昭和十五年三月九日之が調査を行ふ事とした。當日は前日から懸念されてゐた空はよく晴れ、朝の快晴に心地よく出發したのであつたが、途中遽かに起つた突風が砂塵を巻き暴風雨襲來を思はせ、寫眞撮影など思ひもよらない狀況となつた。よつて調査を斷念して引返さうとさへ思つた程であつたが、現地に近づくにつれて風は風ぎ、一時垂れ込めてゐた暗雲も消散して屈強の調査日和に恢復した。

調査着手前に於けるこの一時的な突風狂亂は實に豫想外の天恵であつたのであり、強風によつて折られた小枝が地上に落下散亂し、好個の調査材料を豊富に提供して呉れたのであつた。若しこの事がなかつたならば、高處にある材料を採取する用具を準備してゐなかつた我々には、枝下十五米もある高樹の枝を採取する事は殆んど不可能であつた譯で、一種の天佑によつて調査を完了し得た事は全く感謝の外ない。

## 二、調査成績

本樹は黒松であつて、大多數の葉は普通の如く二葉から成り、一見するところ枝の着葉状態は普通のと變りがないやうであるが、よく見ると一末梢枝に着生する葉束(短枝)十數個乃至數十個からなる葉叢の中に、一個乃至十個内外までの葉束が癒合葉を成すのであり、二葉の癒合程度は様々であつて、基部から癒着して下部過半に及ぶものから、先端まで全く癒着するものまである(圖版寫生圖參照)。

黒松の葉が癒合して一本松葉となるのは從來から知られた例であり、黒松の園藝品種に於ける所謂一葉黒松は癒合によつて成れる一本松葉を着ける品種である。即ち本樹の癒合葉と一葉黒松の葉とは成因を等しくするものであるが、本樹の葉は前記の如く葉叢の一小部分のみが癒合葉を形成し、一葉叢の少局部に於て何等かの理由で畸形的發因を生じ癒合葉を發生せしめるもので、黒松からの變異によつて所謂一葉黒松なる品種が生じた道行を暗示する點に於て、本樹は貴重な性状を帶ぶものであると言へる。

黒松の葉は素々一本づつ獨立のもので、あつて、小さな枝即ち短枝に着生して二葉づつが束となつてゐるものであり、その基部に着生する鱗片と共に個々の枝を代表するものである。二葉が癒合して一葉となるのは、歸するところ短枝に於ける葉の發生に異狀が起つた爲めであり、この異狀が多數の短枝の中の一部に起るのは一種の枝變り現象と見做してよいものである。されば本樹は葉の癒合を特徴とする一種の芽條變異を可なり高い頻度に於て發現させる性状を持つた黒松と見る事が出來、この意味に於ても本樹は學問上貴重な標本なのである。

生標本に於ける葉叢を見ると、癒合葉に褐色に褪色しつつあるものが少くなく、普通の葉よりも早く枯死する傾向があるやうである。随つて發生の際に於ける癒合葉の出現頻度は、前述したよりももつと高いものと想像される。

二葉の癒合は一側が他則よりも高き程度に進む傾向を持ち、癒着縫合線は新鮮な葉に於ても注意して見ると明かに肉眼で判るが、葉が枯死に傾くと一層明瞭となり、落下した枯葉では癒合線から分離するのが多い。併し癒合は單なる接着ではなくて、組織の完全な合一的癒合なのである。なほ癒合の程度の進んだものでは、葉の内部組織の構造の單相化にまで進んで、完全な一本松葉の形態構造を呈するに至つてゐる(圖版寫生及解剖圖參照)。

本樹は枝下十五米にも及ぶ壯大なる直立主幹の上に、雄大な枝張りを持った樹冠を戴いた壯麗無比な樹相を持つた巨木であつて、黒松の樹相としては稀に見る見事なものである。本樹の大きさは之を數字で示すと、

|      |          |       |      |
|------|----------|-------|------|
| 樹    | 高        | 全長    | 約四〇米 |
| 枝    | 下        | 約一五米  |      |
| 張    | 東西       | 約二八米  |      |
|      | 南北       | 約二九五米 |      |
| 樹幹周廻 | 地上〇五米の所で | 六米    |      |
|      | 地上一〇米の所で | 五米    |      |
|      | 地上二〇米の所で | 四・八米  |      |

### 三 結 び

調査成績の示す如く、本樹は黒松としては稀に見る壯麗な樹相を持つた相當の巨樹であつて、可なり高い頻度に於て松葉の癒合なる畸形的枝變り現象を見せ、一葉黒松なる園藝品種の起原を暗示する點などに於て、學術上貴重な標本と認められる。加之、本樹の持つ宗教的傳説は土俗學上の重要資料を提供するものであつて、本樹を保護し保存の途を講ずる事は深い意義を持つものと思はれる。

(附記)この調査の遂行に當り多大の好意と便宜とを與へられた觀音堂主徳永亮舜氏に對し、この機會に於て滿腔の謝意を表すると共に、調査寫眞撮影描圖等にそれぞれ助力せられた九州帝國大學植物學教室員田口亮平、山下知治、有賀好文三氏に御禮を申上げる。

### 四、圖 版 說 明

#### 第一圖版 寫眞

- a、觀音境内西北方から見た全樹相
- b、西方山腹から望見した樹相
- c、觀音境内西北方から見た樹冠相
- d、同 樹幹相

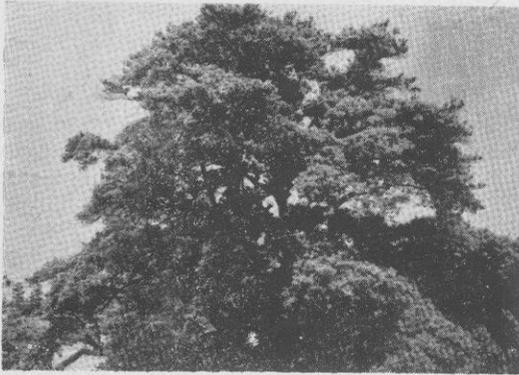
第二圖版 寫生及解剖圖

- a、枝の先端に着生する普通葉と癒合葉各一個(他の葉はみな除去)
- b、枯松葉癒合線の明瞭となるを示す
- c、種々の程度に癒合した葉
- d、普通の葉の横斷面略圖
- e、癒合葉の横斷面略圖
- f、(1. 2. 3.)種々の程度に癒合した葉の横斷面略圖
- g、癒合葉の横斷面解剖圖

福岡市浪人町のマキの巨樹



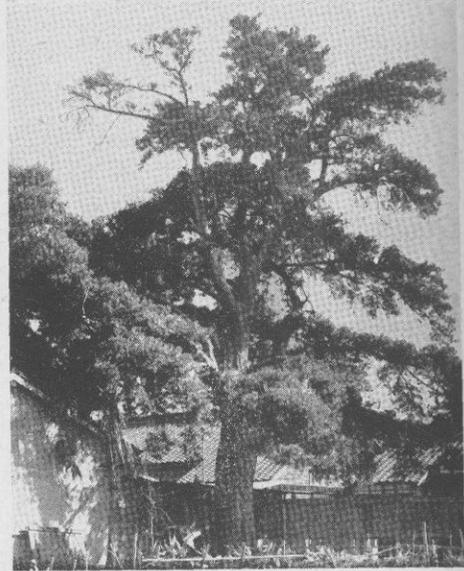
1.



2.



3.



4.

5.



福岡市浪人町のマキの巨樹

説明は本文中にある

## 福岡市浪人町のマキの巨樹

調査委員 纈 纈 理 一 郎

補助員 玉 井 虎 太 郎

福岡市浪人町八番地に一株のマキの巨樹がある。同地所及び該樹は福岡市榑木屋町四番地二川瀧三郎氏の所有に屬し、東に近く民家が接近し、南にも後庭を隔て、民家があり、西及北に面して數十坪の空地があるのみで、全体から見て人家を以て取圍まれた狭い空地の一隅に立つてゐるのであるが、現在のところ樹勢は良好で、枝葉よく茂り、高く民家の屋根を抜いて聳え、偉大な外貌を見せてゐる。

本樹は近郷に稀なマキの巨樹として、昔より世人の注意を引いてゐたもので、前記所有者二川氏の言によると、同地は黒田藩士で三百石程の祿を食んでゐた高屋某氏の邸宅地であつた關係上よく愛護され、なほ同樹は神木と言ひ傳へ、伐採損傷を防ぐ上に効果があつたとの事である。數年前までは四方への枝振りがよく整つた樹姿を見せてゐたが、(東京養賢堂發行)植物及動物第二卷第三號(昭和九年三月號)に掲載の本田正次氏、楨の大木なる記事及び寫眞参照。惜い事には近年樹幹の所々に腐朽部を生じつゝあり、更に昭和十年初秋に於ける暴風によつて、北側の一巨枝及びそれと枝を交へてゐた二三の枝を折られたために樹姿を少なからず損じたのみならず、腐朽部には蟻害が加はつて腐朽を助長しつゝある。けれども風害枝切斷部附近には、

旺盛な不定芽が發生しつゝあるのだから、此上腐朽部の擴大がなかつたならば、遠からず樹姿が整つて昔日の面影にまで恢復するであらう。

現在の樹姿は東南方面から見たのが一番見事で、圖版寫眞第一圖は東南方面の人家の屋根から見た本樹樹冠の枝振り全景を示したものの、第二圖はその上部のみをやゝ擴大して見せたもので、此方面からは人家や塀や庭木などに妨げられて、樹幹下部の無枝部を見る事が出来ない。第三圖は西方から見た枝振りで、前記の風害によつて折れた枝が除かれたために裸出した部分がよく示されてゐる。第四圖は西北方面の空地より見た樹の全景で、第五圖は同方面より見た樹幹の下部の状態である。

さて本樹は嘗て果實を見た事が無いとの事で、隨つて雄樹と認められる。その大きさは昭和十二年七月三日の調査によると、

樹高

約一三・〇〇米

地上一・五米の所で幹の周廻

三・〇〇米

地面から最下部の枝の分岐點まで 約三・〇〇米

枝張り南北

一六・〇〇米

同 東西

一一・二〇米

を算し、樹高樹積主幹部材積共に、マキとしては實に堂々たるものである。なほ本樹の樹型はマキに普通な單軸直立型ではなくて、濶葉樹に見る如き多岐型をなし、隨つて巨大な枝が多い。主幹の地上約三米のところにて三叉的に分岐し、中央の主幹は太さ(周廻)一・八米、北方へ基部周廻

一六五米の大枝を出し、南方へ基部周廻一五米の大枝を出してゐるが、この南北兩枝は何れも下枝をよく發達させ、先端に垂れるが如く茂り、全樹冠の底部として良好な發育をなしてゐる。併しこの北枝の更に分岐して成れる主要の枝一本が前記の風害にて欠損し、其外この北枝が主幹から分岐する所に徑三〇糎程の枝の切口を残してゐる。

主幹は前記の如く三叉的分岐點から急に細くなり、地上約五・八〇米の所で再び四叉的に分岐し、茲で主幹としての相を失つてゐる。四本の枝は何れもよく發達し、よく分岐して樹冠上部の見事な枝振りを見せてゐるが、そのうち北に面した枝の持つ相當に太い枝數本が、矢張り風害を受けて欠損したため、切除されてゐる。なほこの四叉的分岐點より〇・八米程下方に當つて、北へ相當に大きな枝が一本主幹から分岐してゐる。

主幹の最基部は寫真にも見えてゐるやうに、漸次斜外方に擴がつて根に移行し、ピラミッド形となつてゐるから、地表の根廻りは幹の太さに比して著しく大となつてゐる。この根廻りの北側の一部に蟻害を受けた腐蝕部があり、また主幹の三叉的分岐部に於て、北枝南枝の基部上側腋部に何れも腐朽部があつて、之にはコンクリートを以て應急的な手當がしてある。

斯くて本樹の現状は大体に於て良好な樹勢を示し、マキとして稀に見る樹相と大きさとをもち、北九州に於ける天然紀念物として後世に傳へる價值を十分に持つものと思はれるが、近年に於ける菌害虫害に加ふるに風害を以てし、腐朽部は次第に多大ならんとし、前記の二箇所の外にも數箇所の小なるコンクリート充填部があつて、之が保護を試みられた努力の跡を見るが、聞くとところによると、このコンクリート充填は最近まで本樹所在宅地に寓居してゐた福

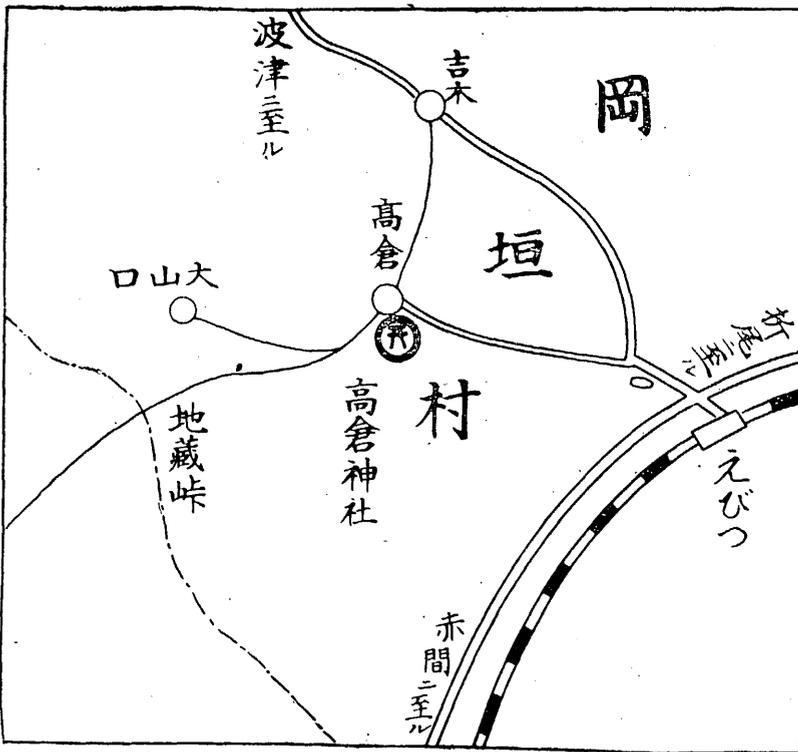
岡高等學校教授牧川鷹之祐氏が樹木愛護のため應急的に手當したものであると、素より簡単な應急的對策に過ぎないから、現在では殆んど其用をなしてゐない状態にあり、加ふるに風害のため除去された大枝小枝の切口は其儘に放置され、將來の腐朽部増加の危険に暴されてゐる。依つて今の内に徹底的な保護法を講じ、本樹保存の完きを期したいものである。

本樹は既記の如く個人の所有に屬し、地所が市内重要な宅地地域であつて、本樹の如き巨樹のため廣大な地積を占居されるは忍び得ざる事情もあらうと思はれるが、幸に所有者二川氏は本樹保存に就て十分な理解を持つて居られるのだから、然るべき當局の助力によつて之が保存を策する事は、實に學術的な意味からのみでなく、綠樹に恵まれる事少き市街地に必要な保健的施設の一ともなると信ずる。

終りに臨み、本調査を行ふに際し、多大の便宜と好意とを寄せられた本樹所有者二川瀧三郎氏及び寫眞撮影を一部分擔助力された同氏令息朝雄氏に對し、滿腔の謝意を表する次第である。

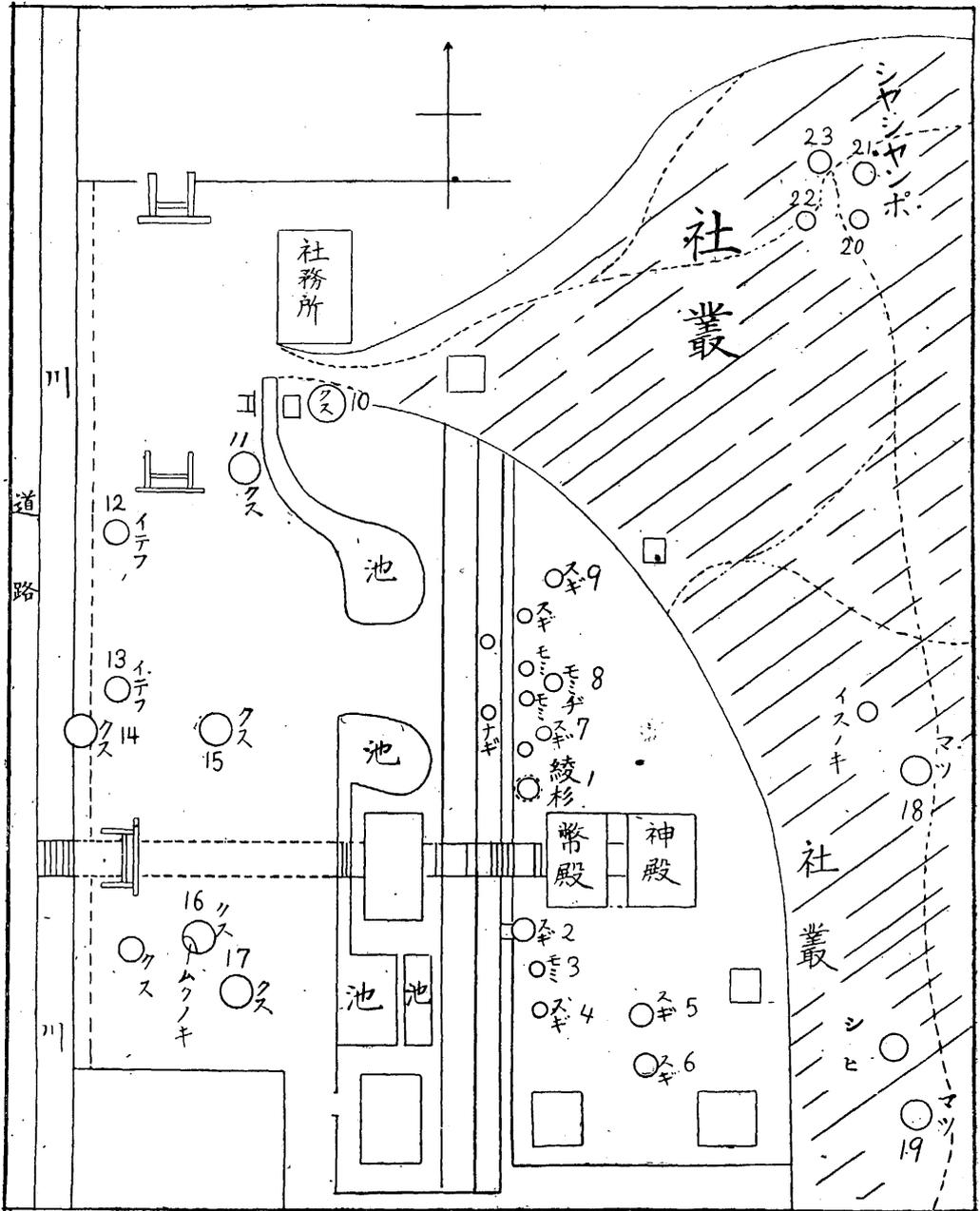
縣社高倉神社境内の樹木

福岡縣遠賀郡岡垣村高倉地方略圖



昭和十七年九月十七日下關要塞司令部檢閱済

高倉神社境内略圖



昭和十七年九月十九日下關要塞司令部檢閱濟



高倉神社社叢の一部

高倉神社のヤシヤシの木の



昭和十七年九月十九日下關要塞司令部檢閱濟

高倉神社の杉木



昭和十七年九月十九日下關要塞司令部檢閱濟

## 縣社高倉神社境内の樹木

調査委員 山崎 又雄

高倉神社は福岡縣遠賀郡岡垣村大字高倉にあり、鹿兒島本線海老津驛下車國道に出で參道を通り約三軒で達する。

高倉神社の御由緒は仲哀天皇八年(紀元八五九年)熊襲親征の爲め筑紫に幸し給ひし時、岡の縣主熊鱈が奉迎し岡の港に入らせ給ひ天皇は倭國菟田の人伊賀彦を祝部として大倉主命、菟夫羅媛の二神を祀られた社である。社殿宏壯境内廣大なりしも、時移り、豊臣秀吉の頃には社地を沒收され天文五年(紀元二一九六年)大内義隆社殿を造營し結構美を盡せしも、永祿二年(紀元二一九九年)大

友義鎮の爲めに焼かれ、天正十五年(紀元二二四七年)小早川隆景社殿を造營す、慶長十八年(紀元二二七三年)

黒田長政國守となり、爾來代々の國守信仰篤く神田の寄進或は社殿の修築等ありて、遠賀郡の總社となる。明治五年(紀元二五三二年)郷社となり、境内は高津峰を加へて四千三百七坪あり、神域老

樹枝を交へ最も神々しく社殿の南には峰高く聳へ、山腹には乳垂の靈泉湧出し泉水流れて乳垂川となり、社前を流る。大正九年(紀元二五八〇年)縣社となる。境内に御神木として神功皇后三韓征

伐の後攝政二年(紀元八六二年)御手づから植給ひし松、杉、楠、楓、榊なぎの五靈樹ありしが、年代を經るにつ

れて枯れ朽ち今は綾杉と楠のみ残りて昔を偲ぶのみ。

今境内の樹木を記すれば、御神木として最も貴重なるは綾杉(1)である。幣殿の左側石の玉垣を廻らせり、神功皇后御親裁の後枝葉繁茂生長し居たりしが、永祿二年大友義鎮耶蘇教を信じ神社佛閣を焼きし時、この社も其兵火に罹り御神木を初め神社社記寶物悉く烏有に歸し綾杉も樹幹焼失せしも一部の樹皮僅かに生存して枝葉を生じ、今は五本の支柱に依りて繁茂し皇々として千古の縁を含み轉々御神靈の尊さを畏敬せしむ。

贈大政大臣勝定院足利義持の和歌

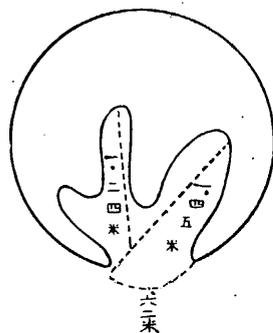
世を守る神のしるしか今もなほしげる千枝の杉の下蔭

綾杉の根廻り六・七メートル地上二米の幹圍六メートル樹幹上部は焼け落ちて内部は全部空洞なり、外部の裂口は〇・六二米あり、深き部にて一・四五米あり、焼けたる跡上部は今に炭となりて遺存せることは珍らしきものである。

幣殿の右側の杉(2)は石垣を築き幹部を埋められ根を生ぜることが見られ、深さ二米埋められて居る。其根廻り四・三八米、目通りの幹圍も四・三八米、樹高三〇米、枝低部より生ず。

其南側に樅(3)がある、根廻り三・二一米、目通り二・三八米、樹高一五米ある枝葉に澤山の天狗巢病に罹つて大分衰弱して居る、この病害は境内の樹木に蔓延しつゝあるが如し。

其南側及び東南に三本の古杉(4)(5)(6)がある、何れも根廻り約五米、目通り幹圍三・六米位高



二〇三〇米ある。

幣殿の左方綾杉の北方にある杉(9)は根廻り四九米、目通り三三八米、樹高三十米ある。

其の北に槭樹(8)の老木がある、これは神木の楓であらふ、根廻り二・二一米、目通り一・五八米、高は一〇米、樹皮には苔が一杯附着して居る、附近に杉や榎(竹柏)がある。

其の北に老杉(9)が一株ある、内部は朽ちて樹皮の一部にて壽命を保つて居る、針金で巻いてある、根廻り三・五米、目通り三・二米高さ二〇米。

其の北西社務所の南側殿島神社の傍に樟(10)の大樹がある、根廻り一五・二六米、目通り八二米、樹高三〇米、樹幹にはボウランが澤山着生して居る、ミルランと呼んで居る。

この樟の西にある一株の樟(11)は根廻り五・五米、目通り三・三二米、樹高二〇米の若木である。

その樟の西鳥居の側に公孫樹(12)がある、根廻り三・四米、目通り三米、樹高一五米、ボウランが着生して居る。

其南にも一株の公孫樹(13)がある、根廻り二・八米、目通り二・四米、樹高一〇米ある。

其近くに川の岸に樟(14)がある、根部大きく川にかゝり廻り七・三九米、直ちに五枝に分れ高さ二〇米、枝は割合に小さし。

社庭中央の樟(15)は根廻り一〇・六米、目通り七米、樹高二五米、いづれもボウランが着いて居る。中央鳥居の南にある小さな樟は根廻り七・六米、目通り三・八五米、樹高二〇米ある。

その東にある大樟(16)は根廻り一五・九米、目通り七米、樹高三〇米、ムクノキの大木が樟の根と共に生じて枝も互に兩々相接して成長して居る、ムクノキの地上二米の圍は二・四五米である。

その南にある樟(17)は根廻り一・二・九五米、目通り五・八米、樹高二・五米である。

以上七、八本の樟は根廻りの大なる割合に幹部小さく不釣合なるが如きは、いつの頃にか幹部を切り取りたることありしが如し。聞く所によれば小早川隆景樟を切りたりといひ傳ふ。

社殿背後の山即ち社叢は原始林の如く雜木茂り居るも、社庭の樟、杉等の老樹大木に比較すると小さく若過ぎるの感あり、この森林は神社創設の當時よりの自然林にはあらざるが如く、今にも所々伐り取りたる跡がある。老松二株(18)、(19)は斷然樹林にぬきんでて頗る風致を添えて居る。何れも根廻り五・一米、目通り三・九五米、樹高三〇米である。いづれも白蟻に蝕まれつゝあるが如し。別にそれと同大同時代の一株の松が枯死したる株や莖幹が捨てられてゐるのは白蟻の爲めに斃れたものである。

椎の木は數多し大なるは根廻り四・二米、目通り三・一米に達するものもある。

イスノキにも大なるあり根廻り二・八四米、目通り二・一四米のものがある。

この山林中の樹木に特筆大書すべきはシャシャンポの原木が四株ある。

その一(20)は根廻り一・三七米地上二米の幹圍一・三〇米、樹高一・一八米。

その二(21)は根廻り一・八米地上二米の幹圍一・三〇米、樹高一〇・六米。

その三(22)は根廻り二・二二米地上二米の幹圍一・二一米、樹高九・一米。

その四(23)は根廻り一・二二米地上二米の幹圍〇・七米、樹高九・一米。

シャシャンポは方言ミソツチヨ又はミソソチヨ又はミソマメノキ又はシャシヤビと稱へ小さな黒き果實を小兒は好んで食する。この木は普通高さ一米乃至二米位の灌木として知ら

れ文献にも必ず灌木としてある。この四株の大シヤシヤンボは灌木とするには當らず、喬木と言はねばならぬ、此の如き大木は實に珍らしきものである。他處に見られざるものにて天然紀念物として保護すべきである。

高倉神社社叢の樹木を列擧すれば

- ア カネ科 ありどうし、くちなし。  
ケフチクタク科 ていかかづら。  
ハイノキ科 みみづばい。  
ヤブカウジ科 やぶかうじ、つるかうじ、いづせんりやう。  
シヤクナゲ科 しやしやんぼ。  
ミヅキ科 あをさ。  
グミ科 つるぐみ。  
ツバキ科 やぶつばき、さかさ、ひさかさ。  
アラカヅラ科 やまびは。  
カヘデ科 やまもみぢ。  
モチノキ科 もちのき、いぬづけ。  
タカトウダイ科 あかめがしは。  
イバラ科 やまざくら、ふゆいちご。  
マンサク科 いす。

トベラ科 とべら。

クス科 くす、やぶにつけい、たぶのき。

ニレ科 むくのき。

殼斗科 しひ、あらかし。

マツ科 しろまつ、すぎ、ひのき、もみ。

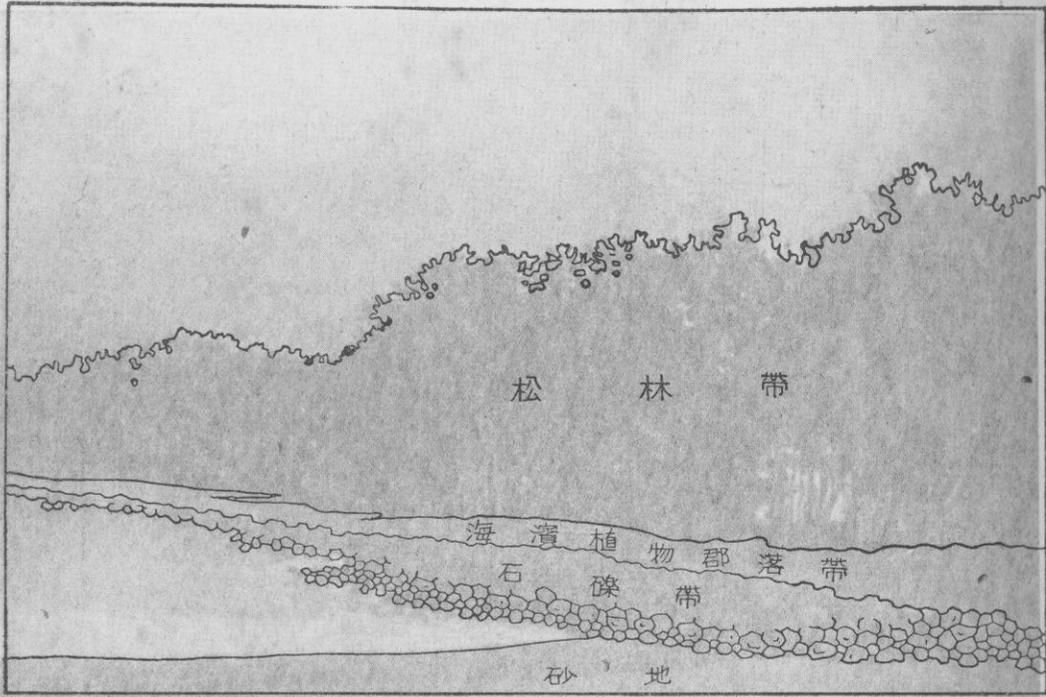
イチキ科 なぎ。

以上の如く樟、杉、松、樅、椎、シヤンポ等の老樹大木鬱蒼として繁茂し境内廣く社叢の種類に富み神々しさを増して居る。この上に樹草を愛護し天狗巢病の如き病菌を去り白蟻、象虫、介殼虫等の如き害虫を除き鳥類を棲息せしめ、鳥の巢箱を設備して其繁殖を計り害虫を食はしめたらんにはいやが上にも繁茂し神社の壯嚴を増し、信仰敬神の念慮を深からしめ歴史的にも日本精神涵養にも科學的知識も得られ、綾杉やシヤンポの如き大樟の如き史蹟としても天然紀念物としても社叢を保護して永久に傳へたきものである。

高倉神社社司川原百之氏に教を受け且つ便宜を與へ下されしことを謹んで感謝の意を表す。

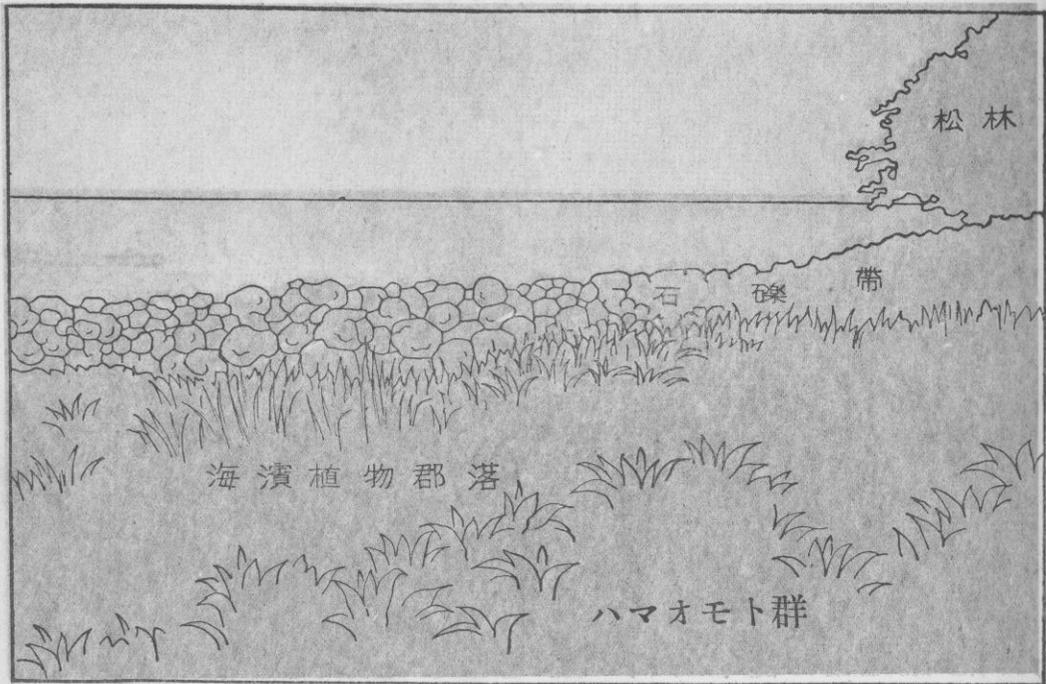
芥屋大門波止松原の海濱植物群落

昭和十七年九月十六日西部軍司令部許可済



芥屋大門波止松原

昭和十七年九月十六日西部軍司令部許可済



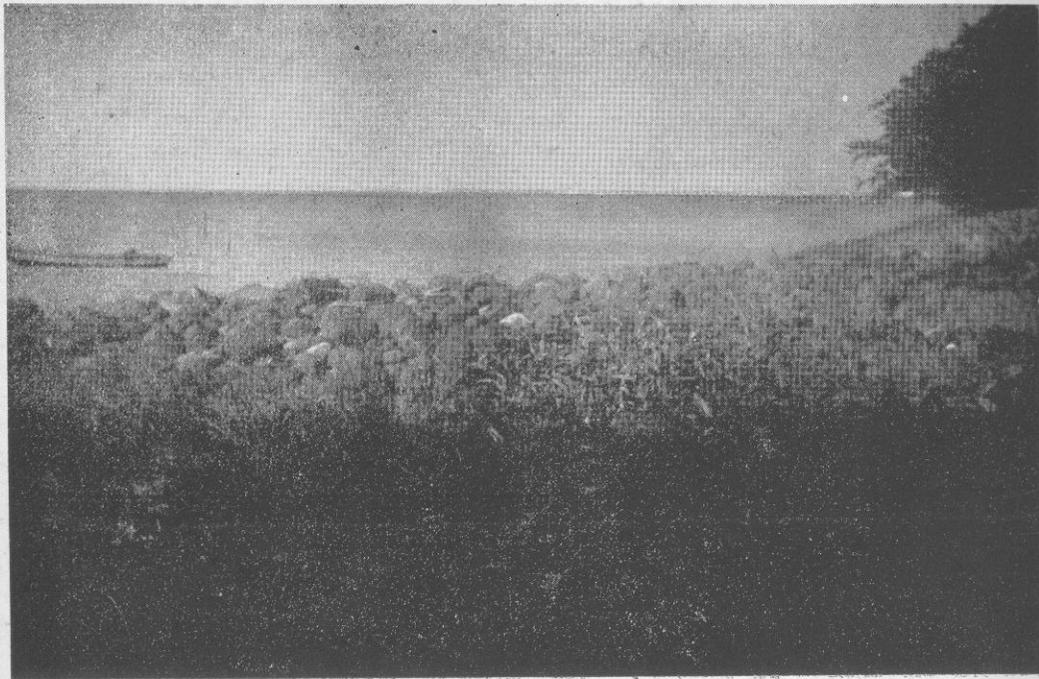
芥屋大門波止松原の海濱植物群落

芥屋大門波止松原



昭和十七年九月十六日西部軍司令部許可濟

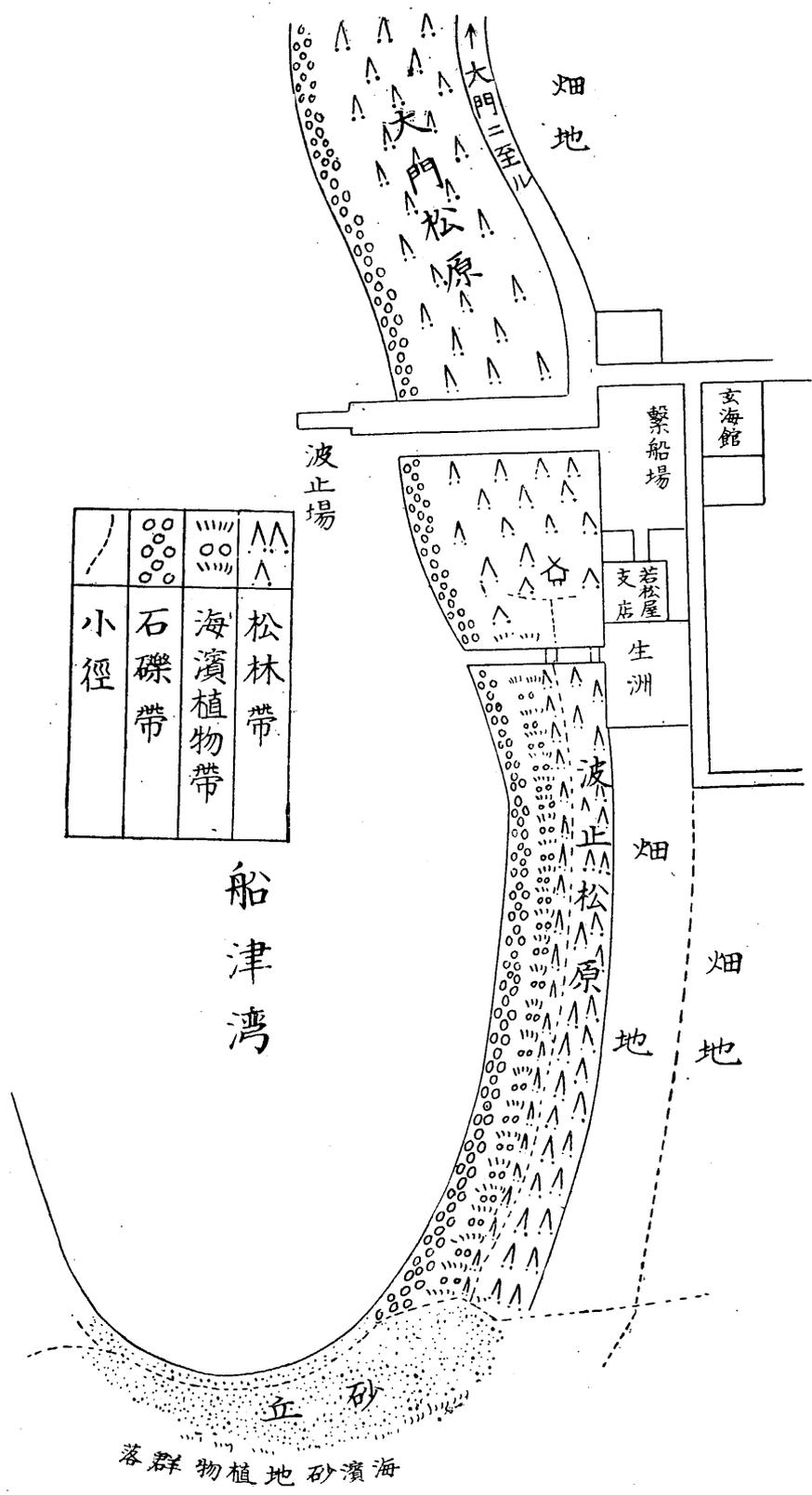
芥屋大門波止松原の海濱植物群落



昭和十七年九月十六日西部軍司令部許可濟

福岡縣糸島郡芥屋村波止松原附近略圖

昭和十六年九月十六日西部軍司令部許可濟



# 芥屋大門波止松原の海濱植物群落(はまおもこ)

調査委員 山崎 又雄

福岡縣糸島郡芥屋村大門崎の南方海岸船津灣に沿へる一帯の松原は大門官林である、其の中央部に波止場がある。波止場の北の方の松原は大門松原といひ南の方は波止松原又は船津松原といつてゐる、其處に海濱植物の群落が美しく繁茂してゐる。

波止場は明治四十年頃築かれたもので、漁船や大門觀覽船がここから出入して居る。昭和九年に波止場の入江から海水を南に通じ生洲をつくつてこの生洲から松原を横切つて海水を出入せしめてある、旅館等が建ち道路も出來た。

波止松原は延長南北約二百米、東西約三十米である。この地域は三帯に分ちて東部は松林地帯にて畑地に接し、汀邊は石礫帶である。松林地帯と石礫帶の間は即ち海濱植物群落帶である。石礫帶は幅十米にて汀邊にありて波浪の打かけて洗はれ稜角の取れたる轉石ころびいしの堆積で頭大以上のもので、植物は全く生育出來ぬ處である。

松林地帯は幅約十米にて東は畑地に接し石を積んで境としダンチクが生えて居る。中央に小徑がある、幹圍二米位の黒松の老樹がよく茂つてゐる、樹下は芝草多く植物少なく、散歩に最も適して居る。こゝにある植物は

草本には ツハブキ、ヤブラン、ハマオモト、ヤブソテツ、ミノナヲシ等

木本には ハマヒサカキ、マサキ、マルバグミ、ナハシログミ、エノキ等

蔓生には ハスノハカヅラ、アヲツヅラフヂ、キクバドコロ、ナツフヂ、ツタ、ノブダウ、キヅタ、

コイケマ、ヘクソカヅラ等がある。

海濱植物帯は松林帯と石礫帯との中間にて幅約十米で、この地帯も石礫地にて石の間に海濱特有の植物を生じ最も多きはハマオモトにて、高さ一米、花莖九十糎、葉の長さ七十糎以上のものもある。其株数の多いこと大小數へられない程澤山で、七八月頃白色の花を開き美觀である。其間にハマゴウ、ハマグルマが最も多く繁茂蔓延して居る。ハマダイコン、ハマヒルガホ、ハマヨモギ、ハマゼリ、ハマウド、ハマボツス、ハマエンドウ、ハマナタマメ、ハマナデシコ、ツルナ、イハタ、イゲキ、ハマボウ、ソテツナ等の海濱植物が群をなして雜然と生えて殆んど四季を通じて各種の花が咲いて美觀を呈してゐる。

中にもこゝに最も目をひき注意すべきはハマオモトの群落である。

ハマオモトは日本特産の植物にて

學名は *Crinum asiaticum* L. var. *japonicum* Bak で石蒜科ひびん科の植物である。

和名はハマオモト、ハマユフ、ハマモメン、ハマバセウ等の名がある。

漢字では文珠蘭又は濱木綿と書く。

本邦本州中南部から四國、九州に分布し暖國の海岸に自生する常緑の多年生草本である。

「言海」には紀勢州の海濱に多し莖は芭蕉の如く皮幾重にも重なる、葉はオモトに似て長く、花

は幣してに木綿ゆふ四手してを切りかけたるが如し、「大和本草」に西土にもあり、ハマバセウと云甚だ雪寒を畏る、宅中にうへては冬月わらにてあつくつゝみ或はこもを以ておほべし、然らざれば枯る盆にうへて屋下の暖處に置くべし。海濱にありては潮風温にして雪早く消る故枯れず。

萬葉集に

三熊野の浦の濱はまゆふ木綿ゆふ百重なる 心は思へどたゞにあはぬかも

拾玉集に

濱ゆふや年を重ねるみ熊野の 恨みは老の残りなりけり

落窪物語に

へだてける人の心を三熊野の 浦のはまゆふいくへなるらむ

新拾遺和歌集に

立ち歸り千鳥なくなるはまゆふの 心隔てゝ思ふものは

ハマオモトは古くから文に書かれ、或は歌に詠まれ、貝原益軒は鉢に植えて觀賞されることまで述べられてゐる。近年特にハマオモトが觀賞用として栽培する人が多くなつて、植木屋は勿論街頭にまで販賣してゐるのが見受けられる。それ故各地に自生するハマオモトが掘り取られ次第に少なくなり遂に取り盡されて絶滅したる産地も少なくない。福岡縣でも産地が少くなり、恐らくこの松原のハマオモトが最大群落であらう。

此處のハマオモトは波止松原の風致に一層の美觀を添へ、名勝奇觀芥屋の大門の地でありて觀光の客は年々多くなるばかりである。觀覽客は必ず此の波止場より渡り、又必ず此處に歸

着するから待合せや、宿泊をするこれ等の人々は必ずこの松原に散歩し風光に接し海濱植物を見、松濤を聞き林間を船津灣に沿ひ趙遙すれば松原の盡くる處よりは砂丘になり、コウボウムギ、コウボウシバ、ケカモノハシ、ハマニガナ、ハマボウフウ等の砂地海濱植物が群生し、波打寄する汀には種々の貝類や海藻が打上げられてゐる處も面白き遊覽散策の地で、向の立岩山、キンタケ岩等も奇觀である。

此地に遊ぶ者必ずやハマオモトの根株を根こそぎして持ち歸りつゝあり、或は種子を持ち行く人も多し。このまゝにして濫獲に任せ置けばやがて絶滅の悲運に達することは明である。今の内に保護保存の方法を講じ、第一にハマオモト其他の海濱植物を保護し繁茂せしめて觀光客を喜ばしめざるべからず。かくて松原の風致は一層増して防風防波、保安の上よりも亦風致林としても土地の繁榮策としても保護の必要がある。幸に芥屋村に保勝觀光繁榮の期成會ありて有志の方々によりて保護愛育せられつゝあり、且つこの松原は國有官林であるから安全であるとはいへ、海濱植物に於ては地元の方々や觀光客の愛護によりて特にハマオモトの生育繁茂することを切に祈る次第である。

終りに波止松原に關し御教示を賜はりたる畠中次市郎氏に對し深甚の謝意を表す。

(附記)

芥屋村大門波止松原へ行くには鹿兒島本線博多驛より筑肥線(東唐津行)に乗換前原驛下車或は福岡市今川橋より乗合自動車にて前原町に下車し芥屋行乗合自動車にて芥屋波止場終點に達する

昭和十八年三月二十五日印刷  
昭和十八年三月三十一日發行

福 岡 縣

福岡市築石町八

印刷人 堀 傳 一

福岡市築石町八

印刷所 大洋社印刷所

電話西②四一二五番  
振替福岡三九六〇二番